特28
821

西洋風信記

西許生先生著

駿文堂本店梓

明治二十年五月二十五日　内務省交付

4104

街上高架鐵道ノ景

目次

●西洋にて衣服帽子靴抔の有樣の事
●衣服襟飾抔の着用工合の事
●日耳曼の英佛と趣を異とする事
●食事の工合の事
●西洋常用の茶の事
●オペラと芝居の事
●日本の俄と申す樣のもの、有る事
●小屋掛り舞臺棧敷抔の有樣の事
●樂器雌方幕の工合の事
●東京芝居と西洋芝居と比較の事
●棧敷敷物等の事
●平土間の事
●燈火の工合の事
●舞臺飾付の事
●英國抔の一般行儀の事
●吉凶の時衣服の樣子の事
●下女の有樣の事
●彼岸の團子玄猪萩餅の事
●正月並クリストマスの事
●西洋人の相貌骨格の事
●日曜日の有樣の事
●西洋諸國にて碧眼を貴ふ事
●婦人の毛髮の事
●公園の有樣の事
●倫敦の市中鉄道の事
●西洋諸國男女の髮の流行の事
●男子口髭の樣の事

●鉄道馬車乘合馬車の事
●寄席落語手品輕業等の事
●辻馬車牛車の事
●音樂場躍所作事の事
●家屋の有樣屋根瓦の事
●道路の有樣の事
●家屋の規摸窓の有樣の事
●窓飾ガラス戸の事
●戸敲並曳鈴の事
●居酒屋並同手代の事
●菓子屋婚禮菓子の事
●魚類の事
●野菜の事
●湯屋の有樣の事
●パノラマの事
●毎朝八百屋抔の來る事
●總馬並英國タルヒーレースの有樣の事
●西洋諸國新聞紙休裁の事
●伊太利國風俗の英國と異る事
●外套蝙蝠傘の事
●伊太利國衣服家屋の有樣の事
●鳥の種類並同風味の事
●羅馬府の有樣同名所の事
●佛國巴里グランドホテル並諸國ホテルの有樣の事
●アルプス山の景色の事
●倫敦氣候の事
●氣候の變遷に依り風俗及園圃の趣を異ふする事

●花候の景色氣象の事
●人家に近き禽類の事
●自轉車幷自轉車藝の事
●米國よりてモルモン宗徒の開きたるソートレーキ、シテーの有樣の事
●モルモン宗の奇談の事
●新聞紙上の日本と異る事
●新聞社か會議の筆記抔取る事
●子守女の事
●一夫多妻の有樣の事
●歳暮年始の儀式幷クリストマスの景況の事
●通例物品の贈答の事
●伊太利國地底住居の古跡の事
●一寸買物抔に行く時の工合の事
●英國にて議員大改撰の節改進保守兩黨の勝敗を爭ふ有樣の事
●チヤムベルライン氏の演說幷其他大改撰の景況の事
●撰擧人投票の手續其他の有樣の事
●大改選總体の有樣の事
●メスメリズムと稱へ奇術を施す事
●メスメリズム施術の有樣幷之を試驗せし筋書の事
●煙草を嗜む事
●芝居の詳細なる摸樣の事
●所作事と付我邦の芝居と異なる事

●芝居よりて慘酷の所作を慎み避る事
●役者舞臺の有樣の事
●芝居の事並其他の事に付き我邦と異同ある事
●芝居の趣向幷一ト幕芝居の筋書の事
●ナイティンゲール島の事
●ケンシントン博物館の事
●鵲高麗島の事
○回航紀事
●倫敦よりリバプール港迄紀行の事
●歷的瀾洋渡航の事
●紐育着前船中よて訣別會の事
●西班人を日本人と見異へし事
●米陸着港の事
●下宿屋の事
●高架鉄道の事
●新聞社の景況の事
●グラント將軍の墓の事
●土耳其湯露西亞湯の事

目次終

西洋風俗記

郵便報知新聞社員　西澁生著　吉田熹六紀事

同

西洋より歸てる分は逢ふ人も見る人も皆な西洋の土產話せよと責めらるれど政治法律抔の事柄を選び際限なき浮世話の何より始めん何を先きよせんと云ふ次第も立ちかねれば先づ御話申さんと返答するを常とせり今日の日本人に就て西洋の事物を聞き畫めんとする闕點を數ふれば政治法律抔學問道理よて求め得らるゝ所のものは以ての外なれども却て風儀習俗の細事に在るなり而して其風儀習俗の細事は取りも直さず國の法律なりの出りて生ずる所の原素となるものなれば苟も國の眞との根を看んと欲する時は細事と雖ども風儀習俗こそ却て大切なる意味あるものなるなれ左れば朋友故舊間一時の問答も或は今日の闕點を補ふて西洋風俗の一端を知らしむる便りよなる事もやと續々之を掲るとなせり

●問　西洋にて衣服帽子靴抔の樣子は如何に候や其着樣格好と如何よ候や

●答　私共が始て巴里に到着し亦た倫敦よ參りたる時第一に目立ちて覺へたるは町中往來の人の帽子よ候凡そ中以上と見ゆる人々は皆な日本よて禮帽と稱なへ居る高き絹の帽子を

冠り辻々に屯せる馬車夫までも派出を貴ぶ連中は皆な同様又は之に隠せたる塗物の高帽を戴けり日本にて尋常冠り候低き羅紗の丸帽子と牛乳配、八百屋、荷車曳等より下は乞食まで都て先づ手足を働かす中以下の人の冠物に候尤も旅行等致す時には遠路の崎嶇然と高帽を聳かし詰めに参るも窮屈あれば輕便なる右の羅紗帽子を着るを多しとす左れど凡べて應對向等には高帽と云へる者紳士の常装となり居る事あれば大抵身元ある人は旅行するにも別に之を箱に入れて携帶する習なり日本より初て参りたる者が郷に入ては郷に從へと心穏やかならぬ面色し乍ら餘義なく彼の高帽を冠り買物に出掛けたるに前日は「ヘー」とか「イヽエ」とか答へ放しありし煙草屋の亭主が今日は急に「ヘイ旦那」「イヽエ旦那」と忽ち旦那の尊號を加へし等の笑話は甚だ多きとあり倫敦等にて中以下の家の息子様に在りては早く算筆に達して商館の手代にでも住込み絹の高帽を冠り見度との一事少年中第一の大望に候

衣服は先づ倫敦を以て申さば通例半マントル（モーニング、コート）を着るとに候中には フロック、コットを着るもあれど甚だ少し尤も上衣直衣をば黒地にしてズボンには何か縞物を用ると尋常の取合せとする事はマントルもコートも同様なり上下共に眞黒なる出立ちなる全くおきにはあらねど極て希れあり附け襟は今日日本にも流行居る立襟にて襟飾は「又」の字形の懸飾を多しとす黒色蝶形の結飾と老人用にて少壯の人は着けぬ方あり尤も「又」の字形の懸飾にも必ず留針を挿すべき規則あり日本にて針無しに之を懸け歩く向も折々見受る様なるが失体なるべし西洋に在りて日本仕立の洋服の際立ちて變体に覺ると第一上衣直衣とも異常に丈長き事第二全体にブク〳〵として身に合はざる様見ゆる事第三ズボンの下口上部と短様に甚だ廣く水夫のダン袋に似たる事第四肩行短く去て白襦袢の袖口覗れ過ぎる事等あり其他胸の明け方の大小、襟の折返へしの廣狭等と時々の流行にとりて始終移變りもある由なれば強て言ざるべし唯だ何分にも丈い高く双の肩い頸の付け根とり両手おろげ「ハ」の字形に削り落ちたる如き優形をなせる柔和槐偉の身体に丈分のダリヒズムなくシックリと適あふたる衣服を着けさせたる事あれば其格好誠に都雅に立上りて見ゆる事なり偶〻其中に日本人が丈は低く肩と四角張りたる上にブク〳〵としたるものを着て立交るときは何か無下に見劣りして我れ乍ら慚づかしき心地するあり三四年前或る英人日本に游びたる時の紀行に日本の官員と皆な借着した様なる衣服にて云々と再三記しつけたるを見て不平に堪へざりしが成程西洋人の目にて遠慮なく悪口云へば左もあらん歟と嘆息致さたる次第に候

●問　西洋と衣服の工合大抵何國も同樣と候や

●答　左れば世の流行と申すい處と隨がひ時ゐ隨がひ常と移りやさ候へば一定の御返辭致しかね候へ共まづ平日が半マントル若くとフロック、コット餘程あらたまり為る處よて燕尾服（イウニング、コート）旅行の時が上下揃ひの縞の脊廣又た靴と本靴「紐掛」よても鈕留よても」が極マよて日本よて流行居る半靴い球投げ抔野懸けの游婦の折か又と船中等の外と一切穿き申さぞ是と一般ゐ少しよても肌衣の露るゝを忌み慎むよりの事ゐり尤も老人様の中ゐと其足よ寛やかあるを貴びて平日半靴を穿くもあれど此と年ゐ免じての話よて一般の作法にいあらぞグラットストーン氏の倘だ在朝の此一夕余等議院よ參聽したるゴグ氏い內閣員席の上頭よ踏んぞマ返りて控へ玄が其のズボンの下口より足の甲の邊までダンダラ縞の靴足袋長く露れ出て居りて流石よ老人と最早や服裝にも頓着せざるあらんと可笑く覺へたるとあり氏の穿きたると偖ゐ半靴と見受けたマ又グ氏よて憶出し候前さゐ附襟と立襟が一般なりと申候が老人よなると外觀よマも身よ安らかなるを擇ぶふとマ折襟又と立襟の喉佛の處だけ切り拔きたるを着くるも多しグ氏抔も其一人よて喉佛の處を左右よ廣く切り拔き夫よても尙ほ頷下の周邊を突かるゝをうるさしと覺ると見へ双の襟耳を痛く外邊ゐ推開き置く癖あり保守黨の若者共の洒落よ「金を儲けたら附襟の一ダスも買てグ氏の襟を取替へ」われを內側よ曲け込て遣り度」とは何處も同じ例の人の口あるべし又長靴は獵よでも參るとか遠足でも致すところの外と穿かず平日之を穿き居るは泥濘の中をも奔走致さねばならぬ極々の職民よ限るとよ候

右の處と英國を主として申したるとなれど其他の國々も凡そ似さり寄たりあり但し其國々特別の風と申すは必ずあるものあれば一概よは參らぞ例へば巴里にてとフロック、コットの方甚た多くして半マントル割合よ少く丁度倫敦と逆さまなると又たフロック、コットの下よ黑色蝶方の結飾を多く用ゐ英國の加く重もよ老人よ限るよ非る事又た倫敦抔ゐては例の「〜」の字形の撫肩を悅ぶが故角肩のものも成る可く引詰て肩の角を隱す樣せんとするよ日耳曼よ至れば「ㄱ」の字形の角肩の方を珍重し從て撫肩のものまでも肩先を突出して角立てんとする抔仕立屋の針加減全く相反する事等樣々なり

●問　左すれば燕尾服を着ると申す事と極て希れよ候や之を若たる者を御見かけの事と少く候や

●答　其事よ候以上は都べて中等人の風俗を專らに擧げたるとよて此より下等よは半マン

トル抔は思か春慶とても上下滿足あるは得着ぬ者夥しく又此より上等に參れば貴族抔の暮しにては毎夕晩餐一節は一々燕尾服よ更ためて膳よ就く由なり尤も茲等よあれば中々よ富貴千万なるものゝて家内召使の童僕抔も尋常の仕度にては面白うらぞとて中世よ流行りたりと申す何か異体の裝束を着けさせ髪よは眞白の粉をふりかけて滿頭雪の如くよ粧ゝせたるも少からぞとの事あり是の頭髪に白粉をふりかけると申すは矢張中世の遺風にて百年許以前までは英國よて身分ある紳士は多く是の粧をあしたる者の由日本人の考にて一寸之を思へば何も故ふよゞゝ穢さ白髪を悦びて眞似るとかは好し眞似あれば迚何の飾りよあるとかはと批判もすべきあれど西洋人の眞白なる底よ紅味を帶びたる一種の桃色の顔に對するよ生地の黄金色を白粉よて染め銀の如くよ照り輝く髪を以てせば誠よ派出やかよして品よく一段優美なる風采をあすよは相違なし然るに百年許以前有名あるピットの執政中彼の那拿翁三世を抑ゆるため打續たる佛國との長戰に國の費は益々嵩み有もる物品よ税を課する成行となりし程よ髪染の白粉抔は奢侈品の重もなる者と認められ重税を課せられたり此よより是の白粉を用る者一時よ減少し遂よは其風俗の息むまでよ至りしあり然れども古物を珍重するは凡ての人情なれば奢侈よ長せる貴族の暮しよては今ゐ其召使ゐ是の粧をあさしむるなり斯る富貴の中なれば平日毎夕燕尾服よて食事致す服も怪むには足らず亦た其他の萬事をも併せて想見るべしと存候又た芝居抔よ參れば或は燕尾服ならでは入るとの出來ぬ樓敷あり又おさも些と上等の場處抔を取る位の紳士あれば多く燕尾服を着け候又た有志音樂會と申し身分ある男女が各の得意め歌なり琴ありを奏して聽衆より木戸錢を集め之を以て何か慈善義俠等の事のためよ使用するとあり是の會よは色〻天狗連の出掛るとあるか其節ゝ婦人も禮服なれば殿原も燕尾服あり仍は其他夜會宴會等よ之を着くると申す迄もなき事よ候

●問　日耳曼ゝ英佛抔より些と趣の異なりたる所も多うるべくと存候加何

●答　御承知の如く日耳曼ゝ元と許多の國々を併合して今の帝國とあり居るものなれば其奮の國々の分ちよりて一々よ吟味せば千差萬別あるべく候へ共先づ私共伯林近傍を旅行致したる通りゝ〻りの目を以て申せば伯林邊の巴里倫敦よ異るゝ物事都へて質素に田舍びて見もる事に候衣服ゝ半〻〻テルよりフルック、コートを着たる方多き位よ候へ共巴里抔の如く綺麗よゝなく殊よ其帽子の高帽は極て希れよして丸帽の方十の八九あり甚しきゝ麥藁帽子を冠りたる者さへ少からぞ立交りて相見へ候尤も伊太利抔よても丸帽隨分多けれども

日耳曼程よはあし唯た日耳曼にて綺麗に派出やかに見受けたるは軍人の裝束あり流石と武を以て國を建つる處丈よ軍人の裝束は水際立ちて花々しく帽子抔と兜形の黒地に白磨きの銀鈑うち頂きの中央よと獨鈷成の立物したる有樣四下眩眼ばかりあり此邊は如何ある譯よや人の丈樣々にて軍人こそ皆な一樣よ揃ひ居れ其他往來の人を見わたせば高きと余等よりも乳以上も高きあれば低きい余等の目の下あるもあり參差不同實よ甚しく候是は南北人雜りし故斯く不揃あるとにや日耳曼中にても普西亞よ限り斯く人の長短參差なる由樣のあり候事にや其邊は未得調べず候へ共兎よ角目には立つ事よ候

●問　西洋よて食事の工合い如何に候や日本よて食べる通りの西洋料理を毎日三度々々繰返すのとの事よ候や

●答　西洋は朝の起き方通例餘まり早からず故に朝飯（ブレックファースト）は大抵九時前後よ候夫より一時二時の間よ晝飯（ランチヨン）七時八時の間に夕飯（ディンナイ）が通例よ候此外よ夜食（サッパー）と申すを十時頃よ用る事もあり又近來佛國より始まり來りたる風なりとて五時の茶と申す事大分に流行し今は中等の家までい多くと之を用ひ候是は晝飯と夕飯との間の五時に茶を飲む事よて腹加減よは恰好の處なり但し是の茶を用る時は少々心し

て夕飯を延ばそは臺所の作樂もあり世番持ちの婦人同士なあげでは昌の五時の茶の折を目指さて相訪問れ共よ茶を飲み乍ら四方山の話をあす抔の工合尤も妙あり扨て其食事の献立と朝食が先つ鹽積の豚を煎りつけたるよウヂ玉子、麵包、バタ、茶若くとカフヒー等なと或と豚の代りに乾魚を用ゐるともあり又た晝の工合よよりてい茶と燒麵包、ウヂ玉子、位あて肉食せざる事もあり晝飯い大抵昨日の夕飯よ殘りたるローズト、ビトフ（燒牛肉）の冷たきよ馬鈴芋のウデたる位を添るを常とし然らざれば何か魚の天麩羅（フライド、フヒッシュ）でも片るかあり此外と例の麵包よバタよて是處茶おし飲めば先つ水なり或と時としてと橙皮を砂糖煮にしたる者又と ヂャムと稱しヤナヂ抔の類を砂糖よて煮詰めてトロ〳〵おしたる者又と ゼリーと稱し右のヂャムを一層精製して悟らかよしたる者（恰も ヂャムと日本の粒餡よて ゼリーと漉餡おと）等を添へ置く事もあり是等と皆おバタ同樣各自隨意に麵包お尊て食べるものあり五時の茶と茶請として麵包を薄く切りたるよバタを塗りたるをあしらふ位お て左したるものなし或い之よビスケットを加へヂャム又いゼリー抔を添るとも否とも其い臺處の所存次第あり多飯と一日中第二の驛走よて蒸汁、ビーフステキ、羊の切身、燒牛肉、燒鳥抔の類を二三品と馬鈴芋、胡蘿蔔、蕪菁、慈、其他其時々の野菜と二三品宛添てと之よあし

らふ事なり麵包パンと申すまでもなし是等を喫べ了てりたる處あて何の牛乳品甘い物を出す例へば玉子を碎きたるゐ牛乳砂糖を交せて煮たる者、林檎の身を小さく切りたるを砂糖と混じ其上ゑ小麥の粉の衣をかけたるを蒸燒ゑしたる者、小麥の粉を日本のホウロク燒様ゑ燒きたゑゝモヂの酢をかけ砂糖をふりかけて食べる者等是れ類色々あり左り乍ら是の夕飯中ゑありて常ねゐ第一立を占むるゐ燒牛肉（ローズド、ビーフ）とヂー諸なり燒牛肉と大塊の牛肉を遠火ゑて炙ゆてゑるものゑて必しも其時ゑ食べ盡そゐとあらぬ前ゑ云へる如くりて仕舞置きて翌日の晝飯ゑ用るとなり日本ゑて申せば冷飯の儲をおし置くと同様ゑて不意ゑ須事振れ舞ふべき來人抔ありて料理の用意も十手手廻りゐぬる時ゐ緩意の間柄ゑて是の冷牛肉を出しても目前の間ゑ合ふとなり即ちゐ茶漬と申す場合あて又た馬鈴諸のウデ方ゐ英國自慢の嚙梅のあるもの、由ゑて晝も夕も善く膳の上ゑ現れ出るなり純粹英人のハエヌキと云ふて是の燒牛肉とブウ芋とを兎ゑ角ゑ夥しく食べる事あり英人の大食と歐羅巴の名取ゐて佛國抔ゐ參りても英人なりと申せば何と扱置き一番ゐ燒牛肉とウデ芋とを山の如くゑ持て來るを常とするて英人が自身ゑ語りて打笑ふ所なり是て男子のみならぬ婦人ゐても隨分の大食ゑて夜の世界の美人の標準ゑ支那の足伊太利の髮、佛國の愛嬌英國の唇と並ぶべ稱さる程唇薄く口元愛らしく生れつき乍ら其愛らしき口元ゑて食べるて〳〵大抵の日本男子て迚も叶い染めぬ程ゑ候夜食ゐ通例茶と麵包パンのミゑて濟ませ候哉て全くて之を用ひざる者も少からぬ候是は繁しなの事故成るべく胃に物の溜らざる様致すよりの事あり尤も以上て唯だ中等人の處を申したるものゐて貧富ゐ應じては其撰様色々相違るものなる事を御合點あり度候又日曜日て大抵皆ゐ寺院ゑ參詣の都合もあれば是の日丈て夕飯の馳走を晝ゑ繰上げ午後ゐ茶を飲みたる計りゐて寺院ゑ參詣し夜分歸宅したる處ゑて尋常晝飯の料理を食べると申すが多く候

●問　近來て日本の茶、追々輸出の途相開けたるやゑ承候西洋ゐて日本茶御見うけの事あり候や西洋常用の茶て如何ある工合のものゐ候や

●答　日本茶の少々宛も輸出あるゐ米國へ向けての事ゑて西洋ゑゐあらぬ米國ゑてゐ宿屋抔ゑて日本茶を出したる處て少からぬ候へ共西洋ゑては好事奇癖の人て知らぬ常人の處ゑて日本茶の顏さへ見うくるとなし西洋常用の茶て謂ゆる紅茶ゑて之に牛乳と砂糖とを混せて飲む事あり故に茶とさへ申せば必ぬ牛乳砂糖を調合せねばあらぬものと心得、余等が偶々日本茶を入れると抔あれば下女ゐ毎つも牛乳て如何、砂糖て如何と尋ぬると常例ゑ

て牛乳も砂糖も不要と云へば何か不審氣な面色よ候茶ハ平均したる風味國が一番上等の物を用る樣相見候佛國と名代のカフヒー飲みおてカフヒーの住しきと佛國、第一あるべく英國よりも劣りたる衆等よ問てと佛人と毎も「英國でと迚も斯るカフヒーハ召上られまじと」自慢をる位又た眞よ英國と反ばぬあり左り乍ら斯てカフヒーの方を重るよ用ゆる丈ゑ茶と煩る疏まるゝ方よて物体よ上等の物をべ用ひぬ樣あり又ゑ茶世界ゑて下々と申すハ日耳曼あり日耳曼と聞ゆる麥酒の名所ゑて例の甘口よして軟らかある一種の麥酒を醸出す處あり斯く甘口よ柔らかよして酔ふと鮮さが上よ其の價も他國の例よそれば異常よ賤く日本の目安を以て一寸概算したる處先づ一合一錢内外が通例あり故ゑ血氣の少壯男子ハ勿論年寄も子供も又た婦女兒も悉く皆ゑ麥酒を嗜み飲み水の代りよそ麥酒、茶の代りよも麥酒と一切の飲料と麥酒の一ト手よ持切られたる有樣あり故よ家内抔よて茶を用ると云ふとは極少きと見ハ偶まよ用るを見れば誠に言語同斷の惡茶あり余等の宿まりゑる宿屋ハ毎つも大抵其地ゑて二と下らぬ家ありし故茶抔と皆ゑ相應のものを出したりしが伯林逗留中、中ごろより下宿を致したりしよ茶の惡き事〳〵形容よも話よもあらぬ樣かよ二口三口飲みたるのみよて置きたり然るゑ惡酒と一杯と雖も立どころよ効驗を頭痛よ顯とすが如く僅かよ二口三

口の惡茶直ちよ其効驗を顯ハして當夜と余等兩人共夜半を過る比まで睡ゑ之能とざりき日と早々よ町よ往た自から茶を求ゑ來たりしが第一茶を賣る店を見出そとそら餘程苦勞ありしなり漸々ゑして其店を見出し求め求りし店よて最上飛切と申せる分よてゑりしが矢張余等の口よ上ぼすよ堪ざりし又伯林第一のカフヒー店と云へるよ往きて茶を試みたりしが是も先づ飲ひとこそ出來たれ中〳〵ゑ倫敦常用の茶よと及ぶべくもあゑざりし怡も廣き國中の事あれば日耳曼とて我〳〵の未だ得味ゑあとぬ程の上茶を用ひ居る人も之れ無しとも申されねど兎ゑ角概したる所よてと日耳曼ハ茶を用ひぬ國と申て宜ちかるべく候

問　西洋の芝居と如何よ候や西洋よてハ王公貴人も表向き芝居よ參るを憚からざる程よ芝居の品位高く從て役者の身分も立上りて取扱とる、樣承候如何

答　大間違よ候芝居ハ西洋とて日本とて孰れも同じく衆人の觀せ物ゑ致候ものゑて其座主の心持と是の興行よて何卒澤山儲け度と思ひ狂言作者の心持ハ是の書下よて何卒見物よ面白ゞられて報酬を滿ッチリ貰い度と思ひ役者の心持と何卒是の役にて見物に悦ばれ給金の昇る樣爲し度と思ひ皆な歸する所と金儲けよある有樣は誠よ簡單無造作、罪も偽もあきと處よて西洋も日本も毫しも異ゑく候役者の中ゑて隨分心掛宜しく材藝も研き品行も正ちく

士君子の間に容れらるゝ者も一二とあらざる候へ共是と其者乃心掛宜しき故の事にて役者あらざるとも材藝品行兼備はりたる者何とて人に賤まるゝことあらんや是等と別段の話に先づ概ねたる所役者と正當の者とと認められぬ方あり西洋と女役ハ女役者にて務め男役と男役者にて務め芝居と都べて男女入雜りなり左るに是の女役者なるものと怡も日本の藝妓と申を形あるにて陰には種々媚を獻じ嬌を呈するとを恥ぢざる貴族富豪抔の少年子弟の之が為め身を持ちくづすと少からぬ事に候又男役者の方にありても色々不始末不身持の行迹を致すもの多く凡そ家風正しき士君子又と年若かき娘ある家抔にて役者を近つけ候事ハ一切嚴禁と致すとして苟そめにも役者を近つけ又と之を出入り致させ候抔の嘗相立つ事と尋常の良家にて甚だ不面目と致す事に候あり前にも申す如く元が紅粉を註ひ聲候を弄そび て衆人の觀せ物身み物と相成分者の何とて立上がりたる身分として珍重さるゝ道理あるべきや又た王公貴人の參るを憚からぬと申すと（オペラ）假にも能と譯すべしの事にて尋常の芝居（シヤクター）にと決して其樣の事之れあく候尋常の芝居と雖分夫れ相應に臭陋の事共も少からざる無論王公の覽に供ゆべき品位のものにと之れ無く候

●問　芝居とオペラとと加何なる差違のある者に候やオペラと王公貴人の見物をも添けな

ふする程の品位のもの候や

●答　芝居は日本の芝居と同樣なる事と前にも申したる通りの次第にて其仕組セリフの工合又と道具立の有樣、小屋掛りの造方等に至りては流石に文化の異なる丈に異なる處色々之れあり候へ共大体の上にハ矢張り芝居にと紛ぎれ無きに候オペラの方と先づ假にに日本に引當てゝ見れば能と申す處なり役者の舞臺にて述べ候セリフと一種歌となり居り皆な雖去方の離しにつれて之を唱ふ事あり故に悲しき處と沈みたる細き調子をおして文句をも長く引き怒りたる處と揚りたる太き調子をおして文句をも短く促みかける抔聲韻に種々の加減上下にあれども兎に角一切悠永なる歌唱を以て問答應對する事あれば從て手足の動ろし方抔仕打萬端尋常の芝居と遙に異りたる趣をなす事に候日本の能がセリフと謠譜にて述べ手拍子足拍子其一種の舞の態をなすと善く相似たるものあり左れど先づ其オペラと能との相殊りたる重なる個條を擧ればオペラにと脚色の樣子によりてと幾人も〳〵の役者一時に舞臺に現われ出てゝ彼此交々セリフを唱へ立てる事尋常の芝居に異ならば能の役者のシテとツキとに限りあるが如きに非ず又た舞臺の書割、飾付、尤も念入にて山あれば山、城あれば城、座敷に座敷、町中と町中、と恰も眞物を見るが如き精巧なる道具立を用ると

尋常の芝居よ謂あらぜ又た役者の扮粧衣服よ至りても務めて花々敷く綺麗びやかのあるを用ひ皇后壹人現はれ出れど其裝束よつける金銀珠玉摺箔縫箔よて舞臺壹面炫やきわたり又た壹場の朝廷を描き出せば百官有司の立て連ねる冠い秋の夜の星の壹時よ天降りたるうと怪まる〳〵計ある抔都べて派出〳〵しさと能舞臺の簡古撲茂なるの比よ非ぜ左れどオペラよ演ぜる世界は、諧譜の如くよ幾番と云ゐる番組こそあけれ、其作者こ皆な昔時の大家ゐして前よ古人おく後よ來者おしと申す擇抜さの名人が心を凝したる中の又た傑作と稱せる者のみゐして中々よ近今の文人が壹時漫然筆を觸てたればとて之をオペラ舞臺よ演ぜふるゝものに非ぜ茲等が西洋よてオペラと芝居との大差違ある所よて芝居にこ新作者新作物代々之あり候へ共オペラこ昔よりて傳へ來の世界の外新作物の侵入するとを許さぜ是れ恰も日本よて芝居よこ近松並木の後よ世々河竹あると得れども能こ内外二百番の上よ一番を增し得ぬと同樣よこ候はぜや又脚色セリフよ就て申候もオペラこ芝居の書下の如くゐ臭陋ある事野鄙なる事淺墓ある事淺猥しき事の類い甚だ少く珍しく男女の間柄を描し候よも今の俗世界を今の儘よ寫したるものと異あり候が故、只だ優よやさ玄くして何となく氣韵の高き心持致し又た同じ憤悲め詞を吐くよも恨むが如く訴ふるが如く自然に餘味を存する抔オペラ場の處と異へられ候其品位格式の高さとい亦恰も日本の能が芝居よ於けると善く相似たるよ候こぜやオペラこ斯々品格の高さものよ候故是こそ王公貴人の寵に供せるも恥しかゝぜ王公貴人こ之よ臨て物体の下ると申す程よこあき事よ候左れば西洋にてい現に宮廷附屬のオペラ舞臺ある國〳〵少からぜ德川氏の時、芝居は河原者と申せどお能は朝覲會同の燕よも備へ置きたると同樣の譯なり又た世界の日光とも申ぜべき綺麗第一を誇こる巴里の大オペラ舞臺こ那翁三世が列國王公貴人の游び處とせんため念よ念を入れて普請したる者にして今よ於き毎年佛國政府より幾何の保存補助費を給する所よ候又た伯林よて王宮の直ぐ並ゝびよ小さなるオペラ舞臺あり今の維廉こ常よ屢〳〵之よ臨む由よ承候是の如き次第よて王公貴人のオペラは參るとい表向き面目よ關すると毫も之れなく公然見物致す事よ候尤も芝居とても國中第一と申す大芝居ゐて平生よやこ品格も極々上流に置かれたる者にこ間〳〵王公貴人の見物もあれよ候こねど是こ希有の事ゐて且何れうと申せば物体よこ宜しからぬ方よ去て先づ通例こ王公貴人の目を樂ましむるいチペラと定りたるものよ候

問　日本の能の變体ゐる狂言と申ぜが如き類こ西洋ゐい之れなく候や

答　西洋よオペラコミツクと申すがあり候滑稽チペラの謂にして一寸能と狂言との加き

關係を有し居候へ其是の滑稽オペラと頗る下りたるものゝして新作物も脚手ゝ出来、一体の樣子向き何かと鄙去く覺へ候成程セリフと大抵歌唱ゝて述べ身振と多く踊りの態に致ぼ抔オペラの變体と見受けらるれども日本の狂言の如くゝ名人の傑作を選りて番組を立あるが樣あるゝ品格ゝと參らぬ候先づ目前花々しく賑やかゝ女子供の悦や可なる工合ゝ拵たる者ゝ候

問　日本の俄と申さ樣あるものゝこれあく候や

答　西洋にも滑稽芝居と申ぼがあて尋常の芝居の前幕に一寸一ト切、出し抔事多くあり左れども東京ゝて致さ俄茶番大阪にて致す俄狂言抔の如く扮粧を異樣に去脚ふべき身振仕打をなし見物を強迫して無理に笑らへ〳〵と責め立てる同樣ある拙劣の譯のものには御坐なく又た故さらに姪りが間數事厚顏しき事を述べ立て並べ立て、見物の惘笑乾笑を買とんとぼるが樣ある臭陋あるものにさ御坐あく一寸見たる所にては仕打抔も何の事あくサラ〳〵と爲て了けるが如く裝束迚も別段に格外異樣のものを着けたるにもあらねと只だ之を見るうちに自然腹を捧へる樣に相成るあて例へば鹿粗かしき男が或る娘を尋ねたる處にて其娘の氣に叶ふ樣面白ぎる樣なる話あさんとて頭りに手を振廻れし作ら喋べり立て居るち鈕の留め方や惡しかりけん左りのカフス（白襦袢の袖口に蒙ぶせる飾り下り）スポリと抜けて膝下に飛散るを忙しく拾ふてテーブルの縁にて娘に見へぬ樣に話める是時其男の娘の調子を變へて娘ゝ悟られざる樣との心配、心急く儘あか〳〵ゝカフス嵌まらぎして益ゝ氣の焦燥つ工合、氣焦燥に從ひ頻に手を操さて身躰甚だ穩やかならぬ格好抔別ゝ其男が妙に變な身振を長々とあすにもあらぬ只だ拾ふて二三度嵌め損なふ儘々四半分か廿秒かの間の所作あれども鈕の歪がみたるゝ失禮とする作法嚴しき國ゝありて婦人の前ゝて別して行儀を正くする習あるゝ殊ゝ是男別ゝ詞や色ゝこそ出さね是娘ゝ懸想せる趣と疑ふ可らぬ左るゝ我々屬意の婦人の前ゝて其氣ゝ叶とんと勉強して話を折も折とて是始末なれば其心中の周章狼狽推量るべく思ゝぬも噴き出さゞるを得ざるあり是と唯だ一ト幕の内の一事を擧げたるものなれども同じく男女の間柄の摸樣を種子とするゝも其趣の立上がりて品よきゝ是の如し以て其他の事共を御類推あさる可く候又彼の談下手の人か可笑しき事柄を談すゝ已れ先つ咥々と自ら笑ひ乍ら談去のゝれども談しる處ゝて聽者ゝと存外可笑しくなく又た上手の人と地味ゝ徐々と談せども聽く者ゝ頤を解す抔の相違ゝ乃ち日本の俄と西洋の滑稽芝居との摸樣の異ある所と覺へられ候故ゝ第一ゝ品の上下第二ゝ技の巧拙と是の二ツ

の相違の彼此の間よ存することを御合點なさる可く候

問　芝居、オペラ、等惣体小屋掛り舞臺棧敷抔の有樣如何よ候や

答　小屋掛りの大体よりお話申せば四角なるもあり三角なるもさて外廓の形と其場處の廣狹、近傍の家の建込方よりて一定せぞ候舞臺棧敷の位置と概略皆な一定あて舞臺ハ正面よ「一」の字形お横たとり棧敷と舞臺の兩端の付け根とり半月の形を成あて遮なり對し居候茲よ絃極及て短く弓幹極て長た弓ありと假定むべし絃は即ち舞臺あて弓幹と即ち棧敷なて舞臺と日本の樣よ幅廣くして奥行狹く短冊を横あしたる如きと異がひ幅と奥行と相似て恰も式紙を置きたるが如くよ候棧敷と四層乃至六七層も重なりて段々よなり居て恰かも棚の如くよ候是の半月形の棧敷と「一」の字形の舞臺との間と廣く平あて日本よて申を平土間の處よ當が申候一寸見たる所よて第一よ日本と相違するハ舞臺よ花道の無き事と雛方の平土間の最前(大阪邊にて咬附と稱する處)に控居る事となて平土間の中央より後ろの半分ハピットストールとて極賤すき處なれ共其前の半分とストールとて甚た貴き處なて是のストールの前即ち舞臺の床の付け根の處を一隔番丈け仕切りて雛方と茲に見物を背にし舞臺よ向ふて陣取れが尤も地が堀凹ばめありて雛方の頭と皆な床よりも低くなる樣になしおれば見物の目障りになる事となけれ共ストールの最前に坐せる見物ハ最後に坐せる雛方と手の屈くまでの近くに相接せるとと接し居候

問　雛し方の外に床の淨瑠璃又ハ呼出しの蔭歌抔申す類ハ之れなく候や

答　左樣、之れなく候

問　然らば唯だ樂器にて雛立候のみに候や

答　左樣

問　然らば前面に坐せる雛方一と組の外と何もあく候や

答　否時ありて幽かに悠遠なる響の風々として地底より湧出るが如く聞こゆることあり是時前面の雛方ハ一同に手を歛めて聲まり居候是れ床下か或と舞臺の背にて奏る事と存せら れ候但し是と常に有る事にと之れなく候

問　幕の工合と如何に候や西洋にて之矢張最負連と て幕を贈る抔の事あり候や

答　幕と皆な釣上げ釣下ろす事に候西洋の舞臺は天井甚た高くして舞臺の幅と割合に廣からぞ故に釣上げ釣下ろす方便宜にて曳く方ハ不便に候尤も曳き幕を用ひざると必しも舞臺の幅に關する譯にハ候とれぞ打見たる所の体裁より申すも左樣に候又幕と其座附の幕一

張あるのまはで他より贈る拵の事と之れあく候

問　然らば役者拵最負なる者と如何にして己れの最負を示し候や

答　示すにも及ばぬ事に候最負あれば屢々其芝居を見物に参るべく候又た強て其を又先方に通じ度と手紙を遣いするも宜し公衆に觸れ度は新聞に投書して其旨を吹聽するも宜し尤も貴族富豪の子弟が愛顧の女役者を招聘そる杯と又た別種の事拵に候倫敦巴里杯にて所作事の終りたる處にて見物より薬玉の如くに圍るめ飾りたる花を卽座に其女役者に贈りたるを見し事い折〻之れあり候是等が眞に花を持たせたる者とも申すべき歟但し是迄大芝居にて い餘り見掛けたる事御坐なく候又男役者の貰ひしをも見掛けたる事と御坐なく候

問　近來い東京も芝居小屋段〻宜敷相成り候新富座千歳座杯と隨分美事なるものに候とや西洋と比較致したる所にて如何に御考相成候や

答　誠に殘念乍ら是と比較よも割合よも掛り申さぬ候餘りに懸隔方の甚敷候故何より お話し致さんかと立迷候先づ其方より御尋下さらば之に應じて御答申をべく候

問　棧敷にと矢張ケットでも敷きあり候や

答　敷物を敷きたりと申すより一切錦（日本にて云へば）を以て綴ふたりと申す方適當あるべく候大抵赤色の極厚き毛氈を以て一切包み廻いし柱も凭欄も椅子も悉皆同樣同色あり何處よ觸はるもフワ〻〻としてシナヤかある事、何か手近く喩へて申さば、左樣〻〻先づ別製の人力車の内張りの如きものと御承知あらば捷徑あるべく候又芝居よりては上等の處にと綾の滿幕を垂れたるもえれあり候

問　平土間と如何よ候や

答　棧敷の外は皆あ一人腰掛の椅子を平一面よ並べたるものよ候　棧敷の方と素より一ト間〻〻〻仕切ありて其中よ備へある椅子と一個宛何處へなりとも移し動ろすと自在に候へ共平土間杯の椅子と一人宛よ分別こそ致しあれ跟脚と一聯一串あて作り付けに候故に平土間ゐ並び居候者其を上とり眺むるときい小學校の子供等が教場に坐とや居る時の工合よ似たる者と御會得あさるく候

問　其平土間の椅子と少しも綺麗ゐ候や

答　少し處にと御座おく異常ゐ綺麗よ候滿園と皆なバチ入り肱掛い皆あ小枕付きよて其切地と極厚き毛氈又と綾の類よ御座候

問　日本にて土間の前を低くし後を高くし惣体に勾排を着けたるい見物よ便利ある仕組

と候何れ西洋とても斯く致しあるとと存候如何

答　左様と候西洋にても土間の外、桟敷の區畫の致方とも氣の利きたる事を致居候御承知の如く日本にて桟敷の間の仕切は只だ低き馬堰杉を入れたるのみの事と候（共西洋は桟敷と悉皆別室の如くに隔て了りたる者と候故若し日本の通りと舞臺と平行線と仕切りて之少し後邊と坐はり候ものと隔ての壁と障（られて馬車の馬同様己れの對面を一直線と視るとも外何も神能いぬ事と相ひあるべし故と之を遮くるため東西兩側の桟敷と皆な舞臺と向ふて斜めと仕切りあり候恰も矢の羽が兩側とも鏃の方と斜めに向ひ居候と同様の狀に候是等も初めて見たる私共の目とは異様と覺へたる一個條に候

問　燈火の工合と如何と候や

答　燈火と電氣、瓦斯等種々交ヒへ用ひ候通例小屋の中央に天井より下げある大燈火をと數千（詳説の數とはあらず）の蠟燭形の瓦斯火（瓦斯の火口を蠟燭の形に致したる者）が團々と相聚りて大きく椎實狀と相成り居り其間と球様の電氣燈を交じへ挿さみたる工合黄色白色の火相映じて隠離、彩を成し明かるき事も甚だ明かるければ美くしき事亦た極て美くしく候是の椎實狀の大燈火の建物全体の廣狹とよりて無論大小のあるとは候ゐ共大きな

る分にて其最も大きき處の直徑二間以上あり候

問　舞臺廻りの燈火と如何

答　尤も妙を覺候と舞臺の前端即ち雨落の處の燈火は候雨落の處を少し斜に置れの方位内まで切下げて是の窪處に燈火を仰むけ置くとは候故と明るみは十分舞臺と照りわたり乍ら見物の目とは筐が障とあり直接と燈火の光体を認むるとなし左れば螢燭の如く見物と眼花とおく又たブリキの蔽をつけたるが如く目ざわりとも相成らぬ事と候一切したる事乍ら氣の利きたるものと候はもや

問　舞臺の飾付と如何と候や

答　斯く申して何か些と繪畫論の領分に踏と込む様と候（共全体繪畫の巧拙の差と無論の事として扨置くも西洋の繪畫は彩色と富み居候ゆ（同じ雲の色を描き候とも嵐の彩を點し候にも加何とも眞物を面のあたりと見る様と覺へ候加るとは例の燈火の使ひ方甚だ巧みして假とへば森谷の塲を現出し候とき前の方と點樹交錯の狀を描き樹身、樹葉、樹葉の外をば皆悉切り拔き恰も眞物の如くとせをを飾付け其背後と又た種々木石を排置きある上お天井より斜と緑色の燈火一線を差出て是の群樹と背後の木石との間の空隙を照らすが故

恰も大陽の光の繁茂せる枝々をくゞりて蒼然の色を成せるが如くよ見ゆる事に候又た其
具へ一切上よ釣上げるこの下よ繰下ろすかの二ッよて其仕掛も至て整ひ居候故幕の間よ槌釘
相觸るゝ響丁々として常よ人耳を乱ゑす樣の騒動之れなきと亦た快き事よ候

問　日本より西洋お御出の上にて第一よ目を駭ろかを程よ目立ち候と何等の事柄に候や

答　先づ人事よ就て申さば英國抔の世間の行儀一般によく行屆き萬端の事一切よ規則に
て律りた程よ作法整なる為るとよ候右と日本抔と較ぶれば實に際つきて目立ち候程の相違
之あり例へば他人よ無沙汰見舞をあすが如きも自づから一定の時間ありて至急の用事にあ
らざれば通例と午後二時半より四時半迄の間に限ると候左れば故あきに早朝或と夜分或
と食事頃に人を訪問ねて先を方煩らと如きと決して之れなく候又婦人抔の前お出て又
た別して遠慮強く少しよても醜なき事樣き事よ渉たる詞抔と士君子の決して用ひざると
に候例へば「裸體」と申す詞を出だすも最早既よ不作法者の如く見へ口に出すを聞ける事よ
候是の一事よて其他と推して知るべし又少し醜あき話よ及べんとそれべ其座ふあり婦人と
聽ゲぬ眞似し又と其話を外事に轉ぜるが如き程のとよ候又殊よ感心なると食事の節抔と
雖と相接する位よ並び居るを除席の人よ飲食せる居の音の聞へぬ樣に慎しむの一事是れな

り始めて日本より赴むく者と是の事よ氣つかを多くハヒチャ〳〵ムシャ〳〵と大なる聲お
立て甚だ卑陋野蠻に見ゆるとあり是の一事へ最も著るしきとにて日本お歸る後他に招のれ
或と同席にて食する内おても人に因りて二三間隔りても聞ゆべき二よゾロ〳〵と大なる
音をさせ乍ら汁を啜り其他の物を食べるお同じくヒチャ〳〵ムシャ〳〵と犬猫の食ふ如き
大なる音を出をも希れあらざるが如く相見候是等と飲食の中よ著しき野卑の有お現と すも
のなり左れば外國人抔と共よ會食する時よと是の一事と少しく注意せねば實に彼等よ不行
儀不作法を見下げらるゝの恐れあるべし内地雜居も最早遠ろらざるとお て外國人との交際
も必らを廣く始まるべきとあれば些末のとあがら言の序よ御話し致し置く事よ候
又日本人に極めて多くして西洋よて と餘り見受けざる一事と頻と よ懷中り時計を出をて
見ると是れなと凡そ他人よ招かれ饗宴へ赴くとき主人よ對して其待遇の手厚たため心面
白ろく思はを長座を爲すと云ふやうよするが禮儀よ適ふ譯なり然るに何か忙がし忙よ懷中
より時計を出して眺むると甚だ失禮千萬の譯お候とをや定まれる宴會の席抔お人の前を
も憚らを時計を出して公然と嫌める者抔と殆ど見掛けざるとよ候然るよ日本お て之上等
の士君子の地位を有ちながら斯ると を爲すものも稀お と見受るが如し是へ時計を所持する

風俗の日本に入りしを猶は淺きが故に自然是に付ての行儀も定まらねとも者へふる其他英國抔にて之士君子の間の談話に下掛りたる醜なき話と云ふものゝ殆んど其口頭より洩す者あき位に候尤も斯る下掛りなる話をおさねばならぬ餘義なき場合あるときは兎に角及ぶ限りは皆に慎まて之を避けうとに候然かるに日本にて之士君子の間にも不遠慮に故さらに下掛りたる醜なき話を衆人廣座の中にて喋々と聲高く述べ立てゝ愧る色のなき向も往々之れあるやう見受け候是等も甚だ目立ち候やうに覺へらる當時は惡疫流行の際なれば別て其邊の話多きやと知らされども話さで濟むべきとなれば話さぬ方宜し又話すにも話し樣のあるべきことと存候

又其内行はいざ知らず外面儀式の上より云へば西洋にては士君子婦人の間に於て之娼妓抔と申すとも一切之を口頭に出す者なく之を語るさへ恥辱なりとする程にてある世の中なるに日本は大に異なり偶ま縫箔抔する者の中にも輸出品の内にて華麗とろ唱ふる者の袂抔を縫ひ出し或は猫き出し之を美術中の一つの飾同樣に置く者ありて西洋の婦人より之を如何なる種類の婦人なるやとの問を受け之を娼妓と答へ之國の恥辱にて娼妓の如き者を斯く品物に迄描付け或は縫付けるならべ其風俗の紊れ儀式の崩れ居る國なりと見下げゝ

る、との愧かしさに迄に之を娼妓ありと答へるに出來ずして是は日本古代の然るべき婦人ありと胡麻化しさる人もある程のことに候

右之中等一と通りの行儀を云ふものにて夫れすらも猶は斯くの如し上等社會の人に至りて之に倚更らのことに候唯だ其下等社會のものに之に隨分不行儀不作法をなす者も少くあからざると乍ら夫れほどを日本に比較する時は異常に割合の少くなきことにて如何なる下賤の者と雖も其仲間の婦人に向ひ下掛りたる話抔をなすものに殆んどなき程に慣り居候最も西洋迚も其行儀の上に於ては緩急の差別ありて其都びたることを云へゝ佛國に萬事英國に立ちこへ英國の方に甚だ都びて見ゆることに右左り乍ら又事に因て之佛國の方の甚だ都びあることをあり婦人抔の行儀に至りては上等に其模範を佛國に取ることあれば中等以下の行儀に至りては却て英國の方嚴重ありとの評判に候又日耳曼に至れば其行儀も少し緩かにて婦人の前にて遠慮すことも英國に比すれば稍や輕き方なりと見ゆ然るも其行儀とさて中々に日本の比にあらず例へば男子に向ふて之に或は帽を脱がせして禮をなす場合もあれども婦人に向ふて禮をなすが如き一切必ず其帽を脱ぐが如き類に候

▲

其他國に比して一層行儀の六ケ敷國柄にて曾て或人の話にも英國にては下女に向て

る先方が女なるが故に便所の所在を問ふかねる心地すと聞きたれ共當初の内とよそを夫れ程のことあるまじと思ひ居しよ少しく土地馴るゝよ從ひ實よ其言の虚あらざるを知り候如何よも英國の摸樣よてよ下女よ向てさへ下掛りたる場所の所在を問ひ難く又下女が倫義なくこゝ返答する場合よよ其顔を赧らめて羞やかよ知らせ呉れる程の有樣よ候左程れ其他の事も亦御推量なさるべく候

問　甚だ卑陋なる事をお尋致す樣なれど便所を問ふとよ下女よさへも辺慮致さるゝぬ樣ゐてよ場合よよりてよ隨分御困却の事も多うるべく候

答　故よ先づ大抵い自分の機轉よて何處ろと探がし出す事よ候家の内なれば間取建方何れも凡そ相先居るがゆゑ方抵見當相付よ又たよ芝居小屋抔よてい凡そ見當の邊を獨りふて彷徨ふ居れば番附賣よの女抔が先方より氣を利かし默して指ざし教へ呉ル又たステーション　とゝ宿屋とかゐてよ左樣ゐ長らく彷徨居る暇もなき事多く候ゆゑ其處ゐ居る鐵道の役人又よ部屋附の小使抔の耳の處よ行き内所にて殿達（ゼントルメン）よ何處なりやと問ふとよ候是よ男子の便所には皆ゐ殿達との一語を記したる標札掲げたる故よ候尤も斯く申して問ひたればとて其問題が既よ卑陋なる事柄なるが故到底行儀宜しき方よい之れなく候へ共先づ

旅行中の事急卒中事のとして相互よ其不作法を恕とる丈の事よ候

問　西洋ゐて吉事凶事の時の衣服の樣子を伺度候

答　吉事よ婚儀を以て大禮と致候へば先づ婚儀の時の衣服なれども是よ皆ゐ白き色の絹を用ゆ是の點な通例の無尾服なり女子の方を亦た尋常の禮服なれども是よ皆ゐ白き色の絹を用ゆ是の點いよく日本よ似よりたりとも申すべし且つ婚儀の時い女子よ必ず被を頭より蒙ふり首の周邊よ長く寛くシホ〳〵と垂るゝなり是の被も矢張白き色の極薄き絹よて紗の如き類のものあり打ろつきたる所にて顔の透とはりて見ゆる工合甚だ品の宜しきものなり是も亦ゐ善く日本の花嫁の綿帽子と相似たるものと云ふべし又た花嫁よい必ず侍女（ブライドメイド）と申すが一名或よ數名相添て其式ゐ參かる事なるか是よ皆な成る可く其親族中の娘の年頃十三四より五六の間なる娘擇びて之ゐ仕立つるが定マり是も亦た支那諸侯の婚儀よ同姓の國の姪娘を以て花嫁の勝とすると申すゐ相似たる趣あり婚儀の時ゐ限りて花嫁い被を蒙りたるのみよて帽子をば冠らず但し橙の花と葉とを美麗よ取合したるを髮よ挿み置く事よ候尤も是の花、葉よ何れも剪絲もの丈よ候

又凶事の時の衣服い先づ都べて黑き色と申すか悲哀の心情表はをとと相見候男子なれば通

例の燕尾服なれども襟飾は黑き色を用る事なり元來燕尾服の時は白き色の結飾を着ける
一般の定りなるは凶事の時なれ亦た必ず之を黑色とす致すが定りなり又た女子なれば同じく
黑色の禮服を着るとなり其喪を服する間は男子なれば常に彼の絹帽子の胴を黑色の切地に
て廣く纏ひ置くなり又絹帽子を冠る程のものにあらずして紗帽子を着る方の社會なれ
ば左有何れか片手の袖の二の腕の處に一寸五分乃至二寸許の黑色の切地を縫ひ付け置くな
り是等の切地は矢張紗の樣なるものにて特に喪の時の用のために出來居るものなり女子は
至りて喪を服する間黑色の外決して他の色易へりの裝束を着けることなし黑色の衣服は平
日も善く着るとして喪の間はあらざれば黑色の衣服を着られずとの定めはあらざれども風
色の衣服はあらざれば喪の間は着られずとは定りたる作法なり又た其夫を喪なへる
婦人は必ず髮の背後は黑色の薄き紗の如き切地を懸け流がせり髮の處は一寸襞畳をとり
て狹べめ下は一尺許も垂れ居るなり是は面帽とウェイル（蒙面とも譯すべき歟彼の女子の面
は蔽ふる薄絹なり）は顔を蔽ふ樣に前は垂れ居たる譯のものなりしは世の推移と共に其
制も變じ今は斯く意氣なる姿のものはなりしなりと云ふ寡婦は限りて必ず其帽子は色花
の飾を着けず何か黑色の切地はなりても結び置く歟或は飾めきたるものをば一も掛まぬ歟なり

若し夫れある婦人は年長けて老境に入りたる後までも猶は帽子は色花の飾を着ける事は候
又喪の事は付西洋の風俗のおうしさは其衣服の色抔は右の如くは嚴重にてあり乍ら其喪服
を着たる者が無遠慮に芝居寄席抔游歡の場處に立入るとなり日本なれは喪は居るの衣服抔
こそ確かとしたる定りなれ喪の間は凡べて謹慎を旨とし成る可くは戸外に出つるとをも
遠慮するが一般の習をるは西洋なれて芝居寄席抔に至り見れは男子女子とも喪服を着たる儘
平氣なれて棧敷抔は坐はりたるが稀れならざるは甚た奇異に覺へらるゝ事に候

●問　西洋にて下女の有樣は如何は候や

●答　倫敦抔に居馴るに從ひ人情の何處も同しさは思當たる事共甚た多し下女の事抔は
即ち其一に候倫敦にて世帶持の婦人抔の話すを聞けは「倫敦の者を何分に使ひにくし」とて
態と近在のものを召寄せて使ふとなり又た年若かき下女が蔭にて囁やくを聽けは「内の女
主人は毎つもお前は年が行うぬから氣が付うぬ〳〵と叱れど」云々、又た年長けたる下女と
年若うき下女と兩人同居する處にて其年若き方は常に年長けたる方のためは凌き壓へら
るゝとて不平絶へす双方の口論の末には年若き方が泣く事を屬ふあるなり或は座敷を掃除
に來たりなる序に棚の上の菓子を一寸撮み食ふ抔申す者も間〻之れある次第に候

下女の仕度い甚だ簡單ゑて尋常の衣服ゑ衣服あれとも眞ゑ上と下と揃ふゐりと云ふまでありゐ肌ゐは只た襦袢一枚を着け其上に更紗樣の筒袖、袴を被たるのゑなるが多し冬分抔ゑ寒さも頗る嚴しきゑ唯だ是れのゑゐて能くも堪へたる者ありと想ふ程ゑ候其立働の間い胸より膝の邊ゑかけ白きレースの腹掛と膝掛とを繋ぎ合したる樣なる一種の蔽を當て居れり即ち日本の前垂と云ふ處あり其使抔ゑ出行く折ゑ前垂をゑ脱づし白きレースを卷き付けたる小さき帽子を一寸冠ぶるなり佛國ゑては下女が細長きレースを以て背鉢卷の形ゐし其結ひ餘りの尾をは一尺許りもヒラ〳〵と下げたる樣些細の事乍ら至て派出やうゑ見やるあり日耳曼旅行中も屢々下女の是の仕度をなせるを見たり日耳曼ゑゑ近來佛國の流行風次第〳〵に浸潤こむ由なれば是等を其一ッゐるべし唯た伯林ゑて目立ちて見苦しく覺へたるゑ露頭の婦人の折々町中を往來したるを見請るゐり眺めたる所下女とを見へねゑ亦た身分高き婦人とも見へす只た其邊の中等以下の家の細君の近處歩行したる者とゑ見やれど何分ゑも倫敦抔ゑい見受けんと欲するも見受るゑ出來さる不行義ゐる事共あり倫敦抔ゑゑ下女ゐ至るまても必す帽子を冠らされ決て戸外ゑゑ出行かゑ殊ゑ日曜日ゑ女主人ゑ連れられて寺院ゑ參詣する時抔は衣服も晴着ゑ更さゑ帽子も平日のレース卷付の分ゑゑあらゑして通例のボンチットを冠る等大ゑ觀を更たむる事ゑ候之を總ぶるゑ通例下女の仕度ゑ家内立働の時が更紗樣の衣服ゐ例の前垂なり是の上ゑ冠むれい彼の白のレース帽子ゐり、此外黑色の女服一ト襲、是ゑ臺所ゑて被居る時もあれど大抵は外出の分なり唯た下女ゑて仕度の仰山なるゑ伊太利ゑ及ぶいゐからん伊太利ゑては身元ゐる家の夫婦抔か其幼孩兒を連れて外出するときゑゑ其兒ゑ別段異常の華美をも裝はしむるゑ能ゑざるが故其代りゑ是兒を抱きたる守女を飾り立て綾織の絹衣裳ゑ胸のあたりゐゑ何ゐ金線抔を閃ゑかしたるが花〳〵しき出立をなさし咫たるが多く候隨分一種の風俗ゑ存候

●問　彼岸の團子、玄猪荻餅抔ゑ申す樣の事西洋ゑゑ之れあり候や

●答　之あり候十二月廿五日教祖耶蘇の誕生日ゑてクリストマスゑ稱し一年中の大祝ひ日ゐり是日ゑい例ゑ去てクリストマス代盛物「プッディング」ゑ申すゑ家〳〵ゐて拵らゆる事ゐ候是の盛物ゑ製法中〳〵ゑ喧ましく先づ誠に其大器を申さゝ第一ゑ乾葡萄一磅半を切り碎き之ゐ覆盆子半磅を加へ又た凝脂一磅、麵包を碎きたる粉一磅、橙及ひレモンの皮一磅麵粉一磅、其他卵子、砂糖、ブランディー等を調合し之を善く混せて長〳〵の間煮つめるゐり之を混せるには又た緑義のある事ゐて手づゝらゑれを混せたるものゑ一年中仕合宜ろしゑて家内

中が皆な寄りて集かりて銘〻一度宛之を攪さ廻すす事に候余等も下女の勸めに遵て一度宛之をクル〳〵と攪さ廻すしたる仲間あり扨て之を養つめたる上ゑて平あるを皿の上ゑ圓く頂尖がりたる富士の山形ゑ盛り立て其周邊ゑブランディーを注きかけ之ゑ火を點けて卓子の中央ゑ持出る是時卓子を圍みて坐りたる者共は皆あホラー〳〵と叫びて之を喝采するありブランディー のバチ〳〵と燃へる音ゑ皆あの喝采の聲相交りて聞こゆる其樂さの裏ゑ於て卓子ゑ上席せる主人ゑ一々之を分かち盛りて同席の人々ゑ頒かつ主人の直ぐの隣ゑ坐りたるもの抔ハ尚だ青き炎のチヨロ〳〵と立ち升りたる物を匙ゑてすくひ食べるあり左れども酒精火おれハ火傷抔するとゑ決て之れおし是の盛物ゑ本名プラムプッディングゑれとも クリストマスゑ附物として拵えふゆる故ゑクリストマスプッディングと通稱し候是ゑ英國が別して得意と見へ子供抔ゑ是の盛物と樂み待設けると恰も日本の正月餅と同樣なり風味ゑ一寸備中矢掛の袖餅子ゑ似たる所あり英人ゑ例の大食と申し又た殊ゑ是の盛物を嗜む方おれば昨年のクリストマス抔ゑは倫敦ゑて或る大家の娘が之を食べ過きたるがためゑ頓死せる話あり氣樂ある某新聞は此話を切論して一日の社說を塡めたる事之れあり候

●問　正月をも盛ゑ祝ひ候や

●答　英國ゑて正月ゑ至て淋しく候右のクリストマスが日本の正月と申す程の賑やかさゑて是の祝ひ日ゑゑ座敷臺處等所々の壁又ハ天井ゑ青葉を吊ゑ懸くると猶ほ日本の〆飾りと云ふが如し平日ゑ各自渡世の業ゑ忙ゑしくして親子兄弟皆ゑ離れ〳〵ゑ住まへる者も是日ゑ一家ゑ打寄りて共々ゑ一ッ卓子ゑ坐りて夕飯を喫べ或ゑピアノを弄そび或ゑ歌ふ等甚た打解けて睦み游ぶ事あり又た親しき間柄にゑクリストマスの贈物とて種々の品を遣り取りすると日本の歳暮歳玉ゑ等しクリストマスより正月ゑうけてゑ引續きたる休日ゑて皆あ平日ゑ異ありたる日と致しあり殊ゑ一月一日ゑ別ゑ「新年の日」と稱して取りわけ大切ゑゑ致そとおれども前のクリストマスの方主とありて一日ハ左して賑はふ程のことおさが通例おりクリストマスの日及ひ「新年の日」ゑゑ知人の間同士にてカルタを贈答する禮あり是のカルタゑゑ種々綺麗なる繪を畫かさ又ゑ金字銀字等ゑて色々の詩歌又ゑ經文中の語又は名言抔を記しあり是ゑクリストマスの前より各小間物店ゑて賣捌きあれり之ゑは「樂しきクリストマスを祝申候」とか「愛たき新年を賀申候」とか書するが通例おるが「或ゑ是ゑ繪と共ゑ板ゑて摺りあるもあり」其中ゑゑ「樂しきクリストマスを祝し併て愛たき新年を賀申候」

とて双方を一所ゑしてクリストマスの日ゑ贈答るも少あからぬ候是等も新年の餘り珍重さ

れぬ一證と申すべく候

●問　クリストマスの前後より何か別段の芝居を致す由承候如何よ候や

●答　其ハパントマイムの事と存られ候パントマイムハ本仕來身振の謂ゐて元方の無言の筈の義の語ゐり左れどもクリストマスの頃より倫敦よて常例として多く相催すパントマイム（仕方芝居）は語義よは違がふて皆ゐ喋べり立つる事よ候是ハ唯た年若き娘又は子供の還び觀るものにて唯た扮裝を華美にし滑稽を旨とし目先きを悦ばゝのミの芝居なり左れば外題も毎年々々大抵定り居てお化物語「フェイリーテール」亞刺比夜話（アラビヤンナイト）等子供の常よ翫そぶ桃太郎、カチ〳〵山の如き類の中より又ゐ尤も普通ある話を撰びて之を演するゐり左れば筋と最早人の飽きる程承知せる事ゐれば別に其邊よセリフと細やかにするよも及ばず只だ〳〵華美よ賑やゐにして面白ゐかしく致すのみの事よ候例とへば亞刺比夜話の中の「不思議ランプ」の話を演せば彼のランプよ屬せる魔王が神通力を以て古來より の美人を見せると申そゐ托して歴史上ゐ有名ある美人を集め女役者一人宛を其美人よ打扮せ其時代〳〵の流行より從ひたる種々の飾り方造り方の馬又は車又は乘物等ゐ乘せ又之に其時代の風俗に從がひ色々の仕度の侍女、衛士等を附け一組宛次第よ舞臺に練り出し皆ゐ揃

ふたる處よて又た百有餘の踊り子出で、大舞踏始まる等金銀錦繡粲爛て目を奪ふ計り花々しき處が是の芝居の精采よ候

●問　西洋人の相貌骨格ハ如何ゐ候や各國よ就て夫々特有の個條と之れあるへく存候

●答　先つ英國より申さと私共が倫敦よ到着の第一よ快からす感したると自分等の身材の矮くき事よ候町中よて行き違がふ人もすれ違がふ人も皆ゐ已れより二三寸乃至四五寸高きよゐふさるはあく向ふより小さゐる子供上がりの若者が來たれと是こそ我よりは低かるべしとそれ違ひさまゐ肩を較べたれは矢張先方代乳までしかゐし見わたしたる處先方の人々と抱体よ打揃て丈高さが故一寸眺るのみゐては左して高き樣よも思とす自分と較べ視よ及て始て其異常よ（余等より謂へは）長大ある事を悟るゐり余等と日本ゐて割合すれと撃ろ高き部分ゐ屬する方ゐれとも倫敦抔ゐて中人よやも平均二寸許低く覺候又其次ゐ如何にも殘念ゐると先方の人々の血色の貫ゐ際立て壯健し氣よ亦た綺麗ゐるとゐり飽まで白き底よ紅味を持ちて一種の桃色をゐせるを通例とし其紅味の勝ちたる方は面より首筋よりけ恰も赭を塗れるが如く襟元よりと湯氣よても立ちハせぬやと疑とる、計り丈夫相ゐ見ゆるゐれば又た白勝ちの方、と眞よ玉子の殼白の如くよ玲瓏れり余等平日打寄りてと「學問技藝

の及とさる事い勉強して之を學はゞ到底追付かれぬと聞ふ道理いあし暗た勉強にて能はぬい身材等の事あやせめて之身材たけよても彼等の上よあり度ものならはや相互よ對坐して話をあそにも彼等い常に俯し語り己等は常よ仰き聽くの体勢をなさねならぬ殘念あス次第のものあり或る西洋歸りの人よ御旅行中何が一番愉快よ候ひしやと尋ねたるよ私とや身材の低きものよ出逢ふたる時が一番嬉しく候と答へたる由の話を聞き居しが成程尤もある事に覺へらる」と且つ笑ひ且つ嘆したる事屢々よ候

英人の顔立ちと豐潤にてノンベリと温厚しき方なり髮の色は黄又いコゲ茶が通例なり眸子の色と碧を貴ひて黒をべ賤むと申す傾きあり或る統計家の說よ英國よてと碧眼の方次第よ割合增加し黒眼の方次第に割合減少するの實迹あり是れ男女とも碧眼の者を愛して黒眼の者を疏んするよやと其愛せられ說とるゝ者と常よ增加すると云ふ進化の大法よ因て斯の差異を生ぜしものありと云へり同し英國中ゐても蘇蘭の人は身材一層長大く又た髮の色も赤ヤケて殆と棕梠の毛の如きをなせる者少からす又た瓦爾斯と稍や白勝ちのもの血色のもの多き方あり之を要するゐ英人の特有の點か身材スラリッと高く双の肩と有るか無きか迄に撫でおろしよなり居るの處よあり候

一章帶水を隔てたる中なれとも佛國よ參れゞ相貌骨格共よ又宛然別物よ相成候佛國よていい平均したる所身材左して高からす日本人を少し長大よしたる位の者あやや或ハ扱んで、高きもの之れあり候へ共其工合スラリッと高きよと異あり何れかと申さとズンズラと短き格の躰の長き者と申す方あり顔立い英人よりも少しキュッと引ゞまりたる處ありて云はゞ氣の利きたる方あり英人の顔立い其末流れてダラりとして締やあきよ至るの憂あり佛人の顔立は其末流れてイカッさシかめる險惡の相よ赴く憂あやや先つ是の二國人抔と善く其國柄人柄を其顔よ顯とをたる者と云ふへし一方と鈍く温厚あしくして其内に應揚なる處あり又一方いい鋭く賢くして一寸氣の利きたる工合抔其顔は卽ち恰好其國柄人柄の寫眞あり佛國ゐと髮の色稍や黑き者隨分あり又伊太利よと更に黑色の髮多き樣に見受たり伊太利と人の身材抔と先つ佛國と似たり寄たやなり顔立と佛國よりも少し温厚をしき方と覺ゆ日耳曼と通り掛りよ見わたせる所よてと顔立身材共よ參差不同よて茲ぞ日耳曼人の特有の點なりと申す處と一寸捉ふへ難かりし但し肩と何れも角立ちて張出たり左れとも南部の方と大抵人の身材揃ひ居りて英佛の間よ立つ位のものと覺ち北部の方い高きと看上くる計り低きい看下を樣なるもの打混し居るの差異あり之を要するに日耳曼人と物体ゐ相貌武骨よて英佛の

如くゐ品よき處稍や乏しき方あるかゐ疑候

婦人ハ平均したる所よては英國か一番不同あく揃ひ居る樣あり佛國の婦人は惣体よ甚た愛嬌としとの公論あれとも其顔立の上より謂へハ甚た不同多くして英國の如くよ揃て器量よからぞ躰の態度抔よ至りてと概して迚かよ英國よ讓る樣あ可尤も二國絶頂の美人同士を比らへあと佛國の方婀娜の致を以て勝さるとの評もあれと其と既よ人々の嗜癖よ渉れと別論あり又伊太利ゐと婦人よ大理石樣の白「ヤーブル ホワイト」とて一種特有の色あり英國抔の如くよ底よ紅味を帶ひさる純粹の白色あり其末と寧ろ稍や青味を帶ひる向ゐ流るゝ方あり日耳曼と婦人も種々よて一定の事を品し難し然れとも通例と稍や鄙びて見やる樣よも思ひ候

人種の異とやさる程爭とれぬものはあく候歐洲よて金を一番上手よ溜めれは世にを一番擯斥さるゝ彼猶太人の若さと一見して其特有の所相分り候其特有の處と他よあらぬ鼻あり猶太人は惣体よ鼻甚さ太とく又た大抵と「乙」の字形の鈎鼻なり左れと西洋よて草艸紙の政役と同樣の鼻ゐて且つ甚た太ときものを見れと皆ゐ之を猶太人と思ふても宜敷程なり是い尤も明白ある個所と見へ猶太人の祖あるモセスを畫きたる繪を看ればモセスをば毎つを是非

太とき鈎鼻よ畫きあるが通例の定りよ候

●問　日曜日は休業日の事あれハ町の有樣も常よ異りたる所之れあるへく存候如何

●答　倫敦よて旅人の爲ゐハ日曜日程ジョサイのあき日と なきあり又た西洋諸國よて倫敦程日曜日を嚴重よ致す處はあきあり倫敦よては日曜日よハ有りとし有らゆる品物仕事も切死よ果てる事よ候先づ雨日風日の別あく人事よ最も大切ある人の往來あり其往來よ最も必要なるは市中の汽車あり其汽車も日曜日よは午前は通行を相休み午後よ至りて始て徐々と之を開くあり通行を開きたる上よても平日より發着の度數を少くし候又た何時を限りとなく人事ゐ缺さ難さは吉凶存問其他贈答の通信あり其通信ゐ第一肝腎あるハ電報郵便あり其電報郵便け重立ちたる或る個所くを除きたる外日曜日ゐは各々局を〆切りて取扱を相休すみ郵便局の投書函丈け開きあれとも之よ手紙を投し置きたればとて其日は配達となさざるが故唯た其明朝一番の配達よ間よ合ふを樂むのみの事よ候汽車電報郵便抔一瞬一刹を爭ふ緊要のものすら斯る次第あれは以て其有樣を推量そへし町家と申を町家、店と申す店、悉皆戸を閉し錠をしめ表は唯た錠前と木戸の外何も見る所なし昔し禰衡が座人を罵りて皆な行るく 疾走しる肉也と申したるは一時の狂語ながら倫敦の日曜日は町は都べて生息の

あき空房計りなりとを形容致すへき歟是の日は有ふもる賣物一切休みと相成候が故世帯持の婦人組は皆あ其前夕即ち土曜日の晩あ盞所物万端の仕入あ出つる習にて少し賣物店のたさ通や筋の上日曜の晩の賑やかさは平日に倍して雑沓するあり麵包屋、肉屋、八百屋、荒物屋、小間物屋、等日用の品物を買さ候店々よは平日は大抵午後九時限やよ店を仕舞ふが常あるよ土曜日の晩は十一二時の頃までも瓦斯電氣ランプ等の燈火を眼花までよ燃しや立て景氣よく取引をなし其前をは夫々相應に身ありを取繕らふ為る婦人又はとあ随伴へる娘子供亭主或は只とは是の景氣あつれて散歩きする若者共思ひ〳〵よ隊を成し伍をなし三々五々打連れ立ちて引きも切らす往來する抔一寸田舎の夜祭、東京の緑日といへる樣の氣味あり左るよ是れとり僅ろ五六時間を隔てゝ翌朝とも成れと町は蕭然として人の往來さへ少く時々戸外よ聞こゆるハ行歌して錢を乞ふ食丐、手繰よて鳴る藥器を鳴らして物貰ふひする盲目あり左れは日曜日よハ博物館、繪畫館、植物苑、動物苑等平日見物遊覽に供ゆる場所〳〵も皆な閉ちて人を納れす滞留の旅人は往くべき所と觀るへき所もあくとて徒らよ無聊を嘆するのみ余等の發足の少し前に上院よて博物館繪畫館等は日曜日あても相開く樣致さんとの議可決せるを聞き(未た實施よと至らさりしかども)日本人仲間は皆あ打喜びたる程の事ありしあり是にて其他を推量そへく候

●問　新聞紙も無論休刊致すへく候如何

●答　クリストマスの日にも一日よも其他如何ある祝日祭日よも一つも休刊あき新聞紙あれ共日曜日にと皆あ休刊致候

●問　彼地の人と如何あして日曜日を暮らし候や

●答　家あ默坐致す歟朋輩を尋る歟其他ハ寺院あ參詣致す歟の事よ候へ共日曜日よ一番繁昌致すは公園なと平日と朝起きると火點す頃まて市區(シティー)あある商館商店よ通ひ務めそろよ間なき手代伴頭抔が是日と一週中の骨休兒よ各〳〵衣紋を飾ろふて例の絹帽子を聳やかし細き杖子を挾さみシャッ〳〵と公園を往きつ來りつ歩るき居れは下女守女抔と又た主家の子供よ附添ふて衣服の垢の引立つにも攝ハも洗ひたての眞白き附襟を押し立てゝアチラコチラと逍遥し、貧家の娘と見へて母の靴を借り來りしと覺しき足よも適はぬ大靴を引掛けて飛ひ廻り戯れ居るあれと同しく兄弟よや朋輩あや十三四の子供が古びたれとも只た破れ裂けぬを珍重し父のマントルを袖長裾長よ着下しブク〳〵し乍ら走り行く抔其他日雇稼の職人仕事師又と婦人皆あ最寄〳〵の公園あ出でゝ游ふ事よ候尤も是ハ重もよ中等以下

の社會の者共が多く候

●問　日曜日は終日一軒も店を開く所なく候や

●答　只だ一軒あるは煙草屋なり是も平日通り商ひ居候又居酒屋は午後より至りて皆な相開き候料理屋は店々よりて早晩の差はあれども午後より夕方の間には皆な相開き候是も寺院へ參詣する人々は晝飯へ煖かなる食事をなして竈の火を消し參詣へ出行くが大抵の習なる故參詣の歸りは是から内で冷飯を食べるも旨くなしとの心持より料理屋へ寄りて夕飯致す者も稀れならざれども之れを當込む都合もありての事へ候

●問　他の國々へて日曜日の有樣は如何へ候や

●答　巴里にても重立ちたる大家大店は倫敦同樣へ商ひを相休め共其外の中等以下の店に至りては營業致し居るもの甚へ多し又た日耳曼にても私共の見たる所へても朝の間も店を開き午後より相休む樣相見へ候左も乍ら何れも倫敦程町中一体思ひ揃ふて嚴重へ休業する處もなき樣覺へ候伯林へて英人と同寓せる人の話も日曜日へも休業日の事あれども皆々打寄りて骨牌游ひをなせども英人のみも決して之へ交じらず此方より「骨牌を弄そばぜや」と云へも必ず「今日は否」と答ふ「何故」と問へも又必ず「日曜日なり」と返辭する由物語りて笑居

れり加何へも英人も自國へて日曜日は骨牌游ひをさへなさぬが習なれば例の自らち重んじ自から敬する性質よりも外國も至りても猶は獨り其習を守りて之を易へぬと思はれたり米國も渡りし時紐育へて日曜日へ邂逅しが店は矢張大抵悉皆閉ち居たる樣見受けしが倫敦の如くへ木戸を閉し切らず賣物は矢張飾り付並べ立てたる儘へ置たてガラス障子より見へ遷く樣なし居たるが多かりし故へ同しく一体へ休業せるとも休業せる乍らへ店の有樣丈も平日へ異ならず從て町も倫敦程俄かへ淋しくなりて見ゆると申す事なりし樣覺へ候尤も人の往來も殆しく平日より減して相見候

●問　西洋諸國へて碧眼を貴ぶとのことを承りしが果して立派へ見ゆる者に候や

●答　加何へも日本へて碧眼の西洋人を見れば左程立派とも思はれぬ樣へ見ゆれども彼地も丸て見る時も其方へ團扇を揚る心地致すとも候東洋人は面色少し黑みたるが故へ毛髮も黑く眼睛も黑く茶色なる方自から世間の好みへ適するとなるべきが洋人は白く赤らげたる面色なるが故へ之へ黃金色の茶の毛を添る輕淡なる相貌へ一双の碧眼を點する時も實に稱すべき色の取合せとなるとへて最初余輩の目へは左程へも思はざりしが少しく土地馴るゝに從ひ成程斯る顏色と斯る毛髮の色との間ふも斯る色の眼睛こそ色の取合せ佳きものと氣付

き候程のことゝ候右之尊ら英國を申すとして歐洲全躰の上より申せい隣分國々よりて少々之好みゝも異同あるべく又同し洋人の内よりても人に因て好む所之同しからざるものあり例せは婦人の相を記載そるゝを青黑の毛髮、大理石樣の白の顏色、漆の如き眼暗、を痛く賞讃せるものもあり又薔薇の如き淡白輕紅の顏色と黃碧の二色を合したる眼睛を取合之はるを賞讃そる者もあり然れ之人とゝ因て其好みも一樣ゝ之勿論行のぬとなから先つ英國抔ゝて之碧眼ゝして淡紅薔薇の顏色を賞はるゝと普通ゝ之あり候先つ大躰の處より云之、小女及ひ芝居抔ゝては黑色の毛髮漆眼の婦人之通例其性活潑ゝして其弊之猛惡ある者の樣ゝ人相を描く多し又柔和ゝして恃け深き婦人の相を描くゝと多く濃茶色と毛髮と灰碧の眼睛とを用ふるゝと通例なり又芝居にて男子の惡人は動もそれい黑髮の者多く輕茶色の者少あし是等之東洋人ある余等の常ゝ甚だ不平ゝ思ひて打笑ひたるの一事ありき又輕茶色の人種の世界ゝてい黑髮の者出る時之何か性質活潑猛烈あるが如き樣ゝ見せるい是も亦一奇と云ふべし昔しの諺ゝも一ッ眼の人種のみ棲める島ありとて其人種を捕へたり見世物ゝあさんとて日本人も其島に出掛けしゝ一ッ眼の人種等い大ゝ怪みて世ゝは二ッの人もある者かゝ我等見世物ゝして呉れんと之を捕へて興行したりと云へり如何ゝも顏色毛髮眼睛の樣〻の色の中にて

孰れか好しとも惡しとも云ふも多數と少數との相違もあるべし東洋人の中ゝ一二の西洋人を交ゆれば甚た異樣見へ又西洋人の中ゝ一二の東洋人を交ゆれ之躰ゝ見ゆるも同樣のことなるべきか是れ等の東西の異同は左して是非する所あけれとも唯た男女ゝ限らそ日本人の身丈か常ゝ西洋人ゝ劣る之如何ゝも殘念あるとゝ候

●問　西洋の婦人の毛髮卷き縮れ居る者多き樣ゝ見せ右之自然のものゝやや

●答　英國を以て申さい婦人の毛髮い決して天然ゝ甚たしく卷き縮れたる者多しとい見へさるなり尤も東洋人に比それば彼地の人の毛髮之細く緻やかにして多く生へ東洋人の毛髮い同ち面積に數少うして太き毛髮生するか故ゝ彼地の人の毛髮は長くあるゝ從て少しく涙の如く糾れ縮れる傾きゝ之あるとあり右は大体を申すものゝて間ゝ之甚たしく卷き縮れたるものもあり西洋人の目ゝは穩かゝ大形ゝ卷き縮れたるは一種の飾りとして之を賞美するとなり其證之希臘羅馬の古蹟ゝ傳へるものより今日ゝ至るまでの彫刻の諸像を見るへし男女共ゝ大佛の如くチリ〳〵と小さく渦まきて卷き縮ちたるを好むゝはあらそ皆ゝ大形ゝ卷き縮れたるを好むとあり英國の女子も通例年若き人は日本の束髮の形の如く其前髮を切り下る者あるか額際を飾らんとて是の切り下けさる前髮を大形ゝ卷き縮らしめてフサ〳〵と

垂ふし置くあり左れど天然の儘にて之通例斯く巻き縮れ居る者なきか故ふ態々と之を巻き縮ましむるふ盡力するとあり之を爲そに二様の仕方あり其一は鐵の箸の鋏の如き張り居る物を火ゐて炙り此温鐵を以て好む程ふ毛髪をクル〳〵と巻き縮め暫くする後之毛は其儘ふ縮め居るとなり是之最も簡易なる法ふて髪屋の店頭ふは必らす此道具を貯り居とを以て其用ひの廣きを知るべし去りあから温鐵を用ふれは毛を傷むるとて他の一種の仕方を用ふる店あり亦以て東西共ゐ婦人之其毛髪を大切ふするを知るふ足るべし他の仕方とハ一種の紙を用ふるとふて此紙に毛を添へもちて一と撮つゝ糾をかけ數時間縛ゆ置くとあり然る後之を解き紙を捨去れ之髪之其儘縮れ居るとあり中等以上の婦人は多く之を用ふる由ふ候左りあから右両様共ふ一度巻き縮むれ之とて五日も十日も永く保つべきふ非ふす大低之隔日或は二三日其髪の質の剛柔次第ふて各〻適宜ふ之をゐすとあり左れは天然の儘ふて格好能く縮ま居るもの之先つ少き方と云て可あるとゐ候

●問　公園の有様は如何ふ候や倫敦には公園の數甚た多き由ふ承候が如何

●答　御尋の如く倫敦に到着の始めふは至る所として公園を見さる之なき様覺へ甚た珍らしく感する事ふ候彼の名高き「ハイドパーク」を首めとし「グリンパーク」「シントゼーム

スパーク」「リゼントパーク」「フェンスベリーパーク」等「某パーク」と申す者甚多し「パーク」之即ち公園の謂あり其の他「某ソルカス」「某キャヴェンディシユ等、廣小路、隙地抔の名を以て一二丁乃至四五丁四方を圍ひ其中ゐ樹木を繁へ腰掛を排べ一寸人の休息所とある様ふしある者亦た極て夥しく候「ハイドパーク」は「南ケンシントッ苑」と相續き唯た間ゐ一つの湖水あるのみふして別ゐ仕切もなき事あれは名之二ッふありたれども實之一も同様あり故ゐ是之周圍幾里と申す程廣く候廣さゐて其次ふ位する「リゼントパーク」にても外邊を一ト廻りせは凡そ二里許之れあり日本ふて迚も持勝ちて容易ふ彼地の山川の優處の見迯ぬがちなる之自分乍ら可笑しき程の事多し現ふ先般歸朝の時まで之テームス河にせ〻ライン河ふせよ處ふよりて廣狹はあれと概ね去たる所我が隅田川淀川位の者ありと固く信し我れも思へば人ふも聞り居しか歸朝の上始て兩國橋を渡りし時ふ之實ゐ其狹きふ案外しモソット之廣き筈ありしかと自から慨ふたる計ありし是之一つにハ彼地の家屋橋梁抔の都へて大形あるが故物同士の比較ゝり廣き河も割合ふ狹く見ゆる事あるへきか又た一ッふ之心底ふ日本貴しと思込居るが其原因あるべし左れ之余が殆て「ハイドパーク」に往きし時生憎霧深き日ゐて十分眼光の遠かぬとも遠かぬありしが

是ハ日比谷の練兵場を二つ合せたる位もあらんと云て同伴せる日本人に絶倒されたるとあり尤も斯る類の負けぬ氣ハ何國の人ゐも有り内と見へ倫敦の寓處ゐて一日夕飯の時主婦が此間巴里より歸りしと云ふ英人に向ひ「如何です巴里は嘸綺麗よもあり度くもあるでせう」と話しかけたるよ彼の英人は澄ましたる顔色ゐて「左樣、丁度、リゼントパーク位あるでせう」と挨拶したるよハ同じ卓子よ坐とり居たる余等と殆と噴飯さんとしたりし是れ英人が常よ倫敦の大あるとを誇こり巴里と華美あれどを小なりと申し居る平生の口癖ゐ過ぎざれ共亦た以て「リゼントパーク」の廣さとを併せ知る可く候

倫敦ゐて市區内と稱ゆる中央の町筋よてハ往來せる人と皆ゐ躰を斜めよし頭は足より二三寸先きよ行き居るが如き姿よて早く云ハゝ趨りゐ走り居ると申すも可あらん其中ゐハ茫然とイみて店の品物を眺め居る者又と左も要事無氣ブラ〳〵と致し居る者等も無論少からぬ事あるが兎よ角に車輪の響馬蹄の音人足の跫然たると相混して絶ゆる間もあく喧しき中なれと實は要事もあくして是の間を彷徨てはかられぬあり故よ身よ定れる仕事ゐき人、仕事の閑を得たる人、又ハ子供、子供の守をる者等の爲よは何ら往來の繁からぬ少し油斷すれは直ちよ人ゐ衝當る抔の心配あき逍遙處、休息所、の必す欲しき者ゐ右の「パーク」「ソルカ

「ス」キヴンデシュ」等と此のためよ出來たる者なり又た常に塵埃のためよ撲たる、眼ハ時々緑色のものを見て其疲を展ぶる所あけれは叶ハぬが理窟よもあり人情よもあれと折々公園あり際地ありよ往きて眸を放ち樹木の鬱蒼たるを眺むる事と眼の方より云ふも自然必要あり左れは公園類の設けは町筋と極て騒々しく緑色のもの迚は幾と希れある倫敦の如き所よて益〻其必要あるものなり日本よあては上野よ往くも増上寺よ往くも幾分ゝ快く感そる事は感する乍ら左程打て變わりて快よしと迄ハ思とす之を倫敦ゐて偶〻公園よ這入りたる時の心持よ比すれば甚たしき相違あるを覺ふあり公園よと貴賤男女打混して這入るか故彼の邊よは輕車肥馬よ駕して道路を驅り居る者有ハ此の邊にと手空きの日雇男が樹下よ臥して晝寢せるもあり或ハ小舟よ乘りて手づゝふ櫂を鼓乍ら湖水よ泛べる年若き男もあれハ或と球を投け合て戯を走しる子供あり其趣色〻樣〻あて例のシーズン〔期節〕と稱し夫々の身分よ應し各種の交際交遊の會を催して相往來し歡娛む一年中一番陽氣の期節なる春夏の頃ゐハ「ハイドパーク」の馬車道は午後四時比より身分身元の高き婦人の馬車よて打續くなり各自思ひ〳〵ゐ着飾りて茲に來たりて園内を馳回りて游ふとあり尤も園内よハ抱への馬外車の辻馬車の入るとを許さすとの制なれと苟めゐも公園の内を驅居りける者なれは男女

を問こす相應の身分なることを知るへし故ゝ倫敦の社會にありてハ先つ公園の内を馬車ゝて乘廻はす以上に達らねバ餘り面白のらぬものと存せられ候

●問　乘物ハ重もゝ汽車馬車の二種なる趣こ承知致居候日本にて一寸人力車ゝて出掛るとも申す場合ゝは如何なる振合ゝ致候や

●答　御承知の如く倫敦ゝてハ市中の汽車の仕組善く行屆き大抵の處は是ゝて便宜相足るゝ故ゝ地上を走る尋常の仕組の鐵道と又た其及こさる所を補なふための地下鐵道との二ツゝて是等の鐵道こ固より市中の往來のためゝ出來たるものなれハ概ね毎十丁内外の處にステンションありて上り下り自在あり尤も是の市中鐵道の始て出來掛けたるこ今より纔か四十年許前の事ゝて夫より次第ゝ支分れ長延び遂ゝ目下の如くゝ盛なるものとなりし者の由殊ゝ地下鐵道の方こ別して新らしく其預國の計畫丈の線路を布き了りたるこ只た昨春頃の話なり市中鐵道の始て出來掛りし時ハ乘客も尚だ不馴れの事なれは善く間違失錯多かりし趣にて余等の知れる或る老婦人の物語ゝ是の老婦人が花嫁の頃が恰も市中鐵道の出來初めなりしが或る時夕飯會を催さんとて前以て友達ゝ案内狀抔出し置き扨て其日の午後ゝ至り一寸膳後の菓物を整へ來らんとて新夫婦打つれて菓物市まで出掛けたり往復共汽車の

事ゝれは手間ハ取らじとの積にて左して時の餘裕も見計らこ毛立いでしが如何にしけん返りゝ線路を乘りちがへ途方もなき向ゝ走せ去りたり心付て其邊のステーションゝ下り又た後戻りして更ゝ乘替る抔家ゝ歸りし時は既ゝ二時間もおくれ座敷ゝ這入りけれは客人は皆ゝ面を並べて只た欠びせぬ計の時なりしと、今日の仕組萬端十分整頓して便宜此上なく且車室も上中下の別ありて左して身分賤しき者共こ同坐せねばならぬ氣遣もなけれ共大抵の人迄こ多く之に乘るなり彼が「銀行休こ日」抔こ申す祝ひ日ゝハ下等社會の者共が公園等ゝ遊びゝ往きたる復りがけゝ落ちつどふ時抔こ多勢の群衆の事なれ共下等中等共ゝ彌が上ゝ押詰まり其溢れたる者共が發車のマギワゝ突然ドカ〳〵こ上等室ゝ推込來るとあり鐵道役人の制統も屆かばこそ其儘ステーション一二個處をば通り過し事も多し故ゝ斯る類の日ゝこ少しも分を攝ふものこ中人ゝても先つ用心して乘らぬあり兎ゝ角ゝ上下推なべて多く乘るこ市中汽車なるへく存せられ候此より上ゝ參れハ辻馬車此より下ゝ參れは鐵道馬車乘合馬車と存候是等の諸駕車の振合こ更ためて詳細を相述申すへく候

●問　當節西洋諸國の男女の髮の流行ハ如何ゝ候や

●答　中以下一般の風を申せハ先つ五分刈七分刈位の所ゝ候右こ英國のみならず日耳曼亞

米利加抔も通て掛りよ見たる所よては同樣よ相見へ候唯佛國よてハ左樣よ甚たしく短くて
あらさりし樣ゟ相見へ候洋人て其頭顱大なるが故ゟ斯く短く頭髮を刈るも甚た格好よけれ
とも後頭の小なる人種の東洋人ろ之よ倣ふて短く刈る時て其頭誠よ小さく見へ甚た不格好
のと多く候

又頭髮を卷き縮ましむるとは獨り婦人のみならす男子よても佛國抔よは隨分之を致すもの
多し故よ巴里抔よて大抵の髮床ゟ至り之を注文すれは必らす丁寧よ卷き縮まし呉るゝとな
り物は試めしあけれ抔とて余等も一兩度試したることありしが如何よも善く卷き縮まりて
出來るなり唯た茲よ必要の用心は髮を洗てさる一事あり若し卷き縮ませて歸りたる後迂濶
て水にて洗ふと抔ある時は直ちよ故の如く眞直よなりて仕舞ふ若し之を試みんと欲する人
ハ之を洗てされは兩三日間て保つあり英國の髮床よても相應の家ならんよは之を注文すれ
ば直ちゟ需めよ應して卷き縮ませ呉るゝれとも大抵は其手際甚た惡しき樣よ思てれたり右
て實驗の說よて間違之なきとよ候

●問　男子の口髭の工合て如何樣あるそのの多く之あり候や

●答　是も英國と佛國にてて少しの違ひ之あり當時佛國よて年若き人の中ゟは鼻下の髭を

左右よ「八」の字よ分け又下唇の際てりぱつりと「▼」形よ殘して其狀恰も「八」の字の下に一
點を加へたるが如くし他の顯總躰の髯を剃り居る者多し右て定めて同國が本家なるとなる
べし英國よては此風餘り行てれも唯た時として之をなし居る者を見るとなて總選擧其他有
名の人の集會演說等よ至り見れば然るべき身元の人よは斯の如き風を爲し居る者は幾んと
之なきなて又中以下の輩の群集する繁華の場所よて注意するも此風の人て甚た少く候英國
よてて年若き人て通例鼻の下を「八」字髭よするのみゟて頰顯の毛をも併せて穩なしく一躰に延し「八」字髯のみよなさゝる人通例あり去
り乍ら是も佛國よ至れハ相違ありて老人の中よも「八」字髭のミの人多く候
又佛國ゟては一種の髮付を用ゐて髯髭と行儀ゝく堅め髭先をぱぴんと反ね居らゝむる者も
鮮なからず英國の髮床よても時として之余等の髯よ髮付を付けんと欲せし者あり左れて英
國よても之を用ふる者もあるとと見へたり唯全躰の處英國の髯の形て「八」字髭よても稍や
穩なしき方と云ふべく候

又英國にてて男女共に顏よ刀剃を當てさるとと見へたり（但し男子の「八」字髭のある者頰
髭を剃るのて格別其の以上の部分をは少しも剃らさるとと見也）故に近寄て顏を眺めれは

濃かある生毛樣のもの一面に生へたり男子は格別あれども女子抔は少し不相應しかゝぬ樣に思はる去り乍ら彼地に者と此を以て一種の飾りとなし居るやも知れぬ唯困却するに余等の如き東洋人は顯より頬へかけ黑き毛所々に生へ額際眉毛の間に見苦しき生毛の長ゆることあるが英、佛、孰れの婦人抔も之を剃り呉れたるとなし又他の日本人抔も同樣と見へ田舍にて其頭を眺むれば生毛の蒙茸と長へ居るが通例にて時として話し合ひ笑ふと

も度々〻候

斯く生毛を飾と居ると想へば甚だ異樣しく聞ゆれども何とも云へぬ譯なり其仔細は兩三年前佛國にての流行にて英國の婦人抔も髮を上に束ねて結び上ると流行し居りしに同し髮を束ね上るとあれば襟際より額際に掛けてはつれ毛おくれ毛あき迫に搖き上けて之を束ねる方サッパリと去て東洋人の目に抔よく見ゆるとあるに彼地の人は故さらに襟及ひ耳の邊の毛を一線通り束ね殘し顔及首筋と頭との界に短かきぱらつとしたるはつれ毛おくれ毛を澤山置て樣を取るとあり是と一切の毛を悉皆束ね上る時と切主襟の如く髮と他の肉面との間餘り見窟あれば故に斯く態々短かく毛を切りて顔及首筋と髮との界に短かくふやりとしたる毛を置き樣を取らしむるとあり是等の日本抔にて決去て飾りとと思はざるべく却て

見苦しき躰なるが彼地にて則ち飾とあるの趣あり是も亦我風俗を以て彼の風俗を是非し難き一事あり兎に角に顔の上部の生毛とは一切其儘にして少しも剃らぬ毛深き人に至りて双の眉相連なりて幾ど弦あき弓幹を仰け横たへたるが如くに相成居る抔に實に不思議に候

●問　鐵道馬車乘合馬車の趣と如何に候や

●答　鐵道馬車と現に我邦に行われ居るものと其振合左して異あり左たる所も之あく候佛國にて車中の腰掛一人宛に仕切ありて定たる人員の外は腰掛る事相成らざるものもあれども英國の方と通例一人宛の仕切あき故乘客の多き時と隨分窶ばと合て詰込まる、事も少からず亦た英國にては乘車の切符を呉る、とき例の小さき圓さを穴斷り抜く鋏に仕掛あり て一ッ斷る毎にギーンと云ふ音するありかねて鐵道馬車會社の規則として乘客に此のチーンの音を聽きたる上あらでは其切符を受取り呉間敷との事あり則ち車掌が一枚の切符を再用する弊を防ぎたる一法と見も斯くして斷り抜きたる穴の部分に當る小さき圓き切符の紙片と ポシリと抜けたる儘、鋏の中に殘る樣仕掛あり跡にて此の紙片をさへ勘定すれと切符幾枚を賣りたりとの事は明白に相分る仕組あり是も亦た切符の賣高を偽ることの得あらぬ樣

よしたる者なるへし乘合馬車ハ鐵道馬車より幾分か品格を遜づるやの氣味はあれと我邦よて二者の間ゐ逕庭ある程よはあらぬ樣あり（我邦よて圓太郎馬車と稱する種類の彼地よなきは無論に候）乘合馬車の第一よ我邦に異なるは皆な天井の上よ又一層の腰掛ありて此よも客を乘する事なり明治七八年の頃と覺ゆ銀座より淺草の間を往來する二階馬車あるものありしが其動もすれは怪我失錯の多きよより出來る間もなく差止められし事ありき即ち此の二階馬車こそ西洋諸國よて多く見受る乘合馬車の典型を摸たる者なりしあらめ乘合馬車は皆夫々白、青、黃、赤、茶褐等の色分けありて白の車ゑ何處の間を往復する者青の車ゑ何處の向よ去來する者等線路ゐ從て色を殊よせり左れば乘客ゑ近寄りて何處〳〵行との標札を看るゐ先きだちて先づ其色ゑ遠見して大体を識別る便宜あり又其賃錢の受取方ハ樣々ゐて鐵道馬車の加く何處行との區域を誌したる切符を渡すもあれど此の切符も鐵道の分の加く堅紙質のものよはあらぬして薄きペロ〳〵したる一葉紙なり鋏よて穴を斷り拔く造作もあけれハ只た幾千枚となく長く續けるを卷物の樣に卷きゐる内より一枚分宛裂き取りて賃錢引替ゐ渡す丈なり又其中よハ切符をは一切渡さぬ仕組の車もあり此の仕組ゐよれは客が乘込むとき何處迄との行先を話せハ車掌ハ其區域に從ひ二錢分一人とか四錢分一人とか覺書の紙よ記し置き其客の下りる時定めの賃錢を受取るあり此の仕組ゑ賃錢の受取り渡しゐ證據物あき故其手違ゐ避るため乘客ゑ必ず下車の時あらては賃錢を拂呉れ間敷との會社の口上が車中に掲げあり又た車よりては只た繁華の場所若干の間のみを往來せるものあり是れは一寸乘るも端から端よ行くも都て賃錢ハ一片あり左れハ此の車よは別よ賃錢受取方の人を置かす只た車中の一方よ一個の錢箱を備付け箱の上ゐ小さき穴を穿けあり客ゑ乘込ゑる時之ゐ一片宛拋り込む事あり左すれハ此箱の一方の御者よ面せる邊はガラス張となり居るか故御者の目よて今ま幾人乘込たり幾片拋り込たゆとの事相分る仕掛よ候

鉄道馬車乘合馬車とも よ惣体の大きさ我邦の分よ比すれゑ遙ゐよ大きく亦其綺麗ある事も遙ゐ綺麗よ候左れと馬車よ就て一番目立つゑ其馬の異常よ魁偉ある事よ候亞刺比馬と申す分は大きさあるハ大きある乍ら品よく優形ある方よて銘々乘の馬車を駕す時の飾り馬にゑ多く之を用れとも鐵道馬車乘合馬車又は荷車等よ使ふゑ又た別よ一種の大馬ある事よ候丈の高き事は例の亞刺比馬ゐ過るとも及はさるとあかるべし其脊の一番抵き所よても通例余等の腦蓋と相齊しく蹄杯ゑ宛然盆を覆せたるか加し左れゑ其力も從て強健くして我邦の馬車を倍にせる重量ハあるべく想はるゝと只た二匹立よて牽き居れゆ且つ同しく牽く乍ら我

邦の馬の如く動もすれは蹌踉しつゝ首低れもて喘きあがら行くと遠ひ馬の勇さをたるを形容せる彼の「躍る」とか「怒る」とか云へる語を適し昂然としてヤン〳〵と行く樣あり概した

る所日本馬ハ西洋より稱する駒位の大きさしりなき樣想ハる、なり西洋の諺より「其國の貴富を知らんと欲せゝ先つ其馬の肥瘠を見よ」と云ふとあり西洋人抔が日本より來りて始て日本馬を見ば果て如何の感を與すべき乎殘念ある次第あり去乍ら是は種の選ひ方蓄養法一つよりるものにて歐洲の馬とて昔より斯く魁偉強健ものゝあゝざりしが中世の頃武邊盛より行はれて戰爭とか決鬪とうさゝ云へは武士ハ皆ゝ自身ゝて歩行のならぬ程の重き甲冑を着用し之より應したる重き械仗を提けて馬より跨がるとあれば尋常の〳〵馬ゝ皆ゝ乘潰ぶされて物の用より爲ぞ從て一世の人悉く魁偉ある馬を強健き馬をト求むるより種も選へゝ蓄養法も工夫し此時より歐洲の馬世界ゝ一紀元を成して進化の道を開きゝる由に聞及候左れゝ日本の馬とて現時の小弱なるを唯た嘆息して已むべきものゝとゝ之れなくゝと存候

●問　日本の寄席の類ゝ之なく候や

●答　英國ゝて音樂場（ミューヂック、ホトル）と申すが日本の寄席より善く似ゝるものゝと存せられ候音樂場は大なるものゝあり小なるものゝあり極めて華麗なるものゝあり又左程より參らぬものゝあり

一樣ゝゝ行のされとも其演する所ゝ躍、所作事、歌、茶番、手品、輕業、等ゝて何を一色より演そるといふ事ゝもく先つ種々の齒を入り代り立ち代りて一ト切り宛務める事より候又婦人を常より次きゝ〳〵ゝ廻りて務むるものゝと見へ甲の寄席にて曾て見たゝし婦人を復た乙の寄席ゝて見る抔の事ゝ屢々より候

●問　落し話と申す類も出て候や

●答　純粹の日本の落し話の如きものは之なき樣より候へ共時々妙ゝ滑稽演說をなすものゝゝ現れ出候是の滑稽演說者ゝ顏をば眞黑より塗り其他の樣子も都べて黑人に擬ねて打扮たるが多く候

●問　手品輕業等ゝ別ゝ異はりし所も之れなく候や

●答　先つ似たり寄たりと申ゝきものゝゝ候へとも手際の鮮やかあるとは彼地の方遙かより打ち優りたるやゝ覺ふ誠みに其一例を申せハ一寸したる蹴鞠より手品遣ゝ右の手より一尺立方位の小鳥の籠を持ちてシヅらめと舞臺の前より出て一ト通りの口上を述へて又た舞臺ゝり下ゝ見物の央邊より進ゝ茲より已れの身体をあらため籠を調ぶる事抔ありたる末彼の小鳥籠を左の手より戴せ右の手より籠の上を提けたる儘見物のヤッタヾ中ゝ屹立して忽ちヤット叫ぶと

思へゝ如何よしけん彼の籠と今まで上下飛翔居たる小鳥を籠めたるまゝ雲ともつかを煙と
そつゝそ何處ゐ逝さしの影だよ留めそ是時手品遣の前後左右と悉く見物よして頭上よ照れ
るは赫灼たる電氣燈瓦斯燈のみ又た今まゝ一例を申さゝ舞臺の中央よ一枚の新聞紙を展べ布
き其上よ一脚の椅子を置き此の椅子よ年頃十六七歳の娘を腰掛けさせ娘の頭より紫緞子の
大袱を蒙ぶせて全身殘こゝくまなく蔽ひ了あて斯くの如く蔽ひ了りたるところゐて一寸口
上を述へ彼の椅子のそばよ近かづく是時紫の袱ゝ娘の全身を其形まゝよ罩こ居れは娘が少
し小もるきするまで所の波だつ工合ゐて明白よ分かる斯くて手品遣は其傍ゐ近づきて其左
肩の袱よ立ち姑く呼吸を計りて彼の娘の頭よ手をうけつゞゝット叫ぶや電光石火、袱も娘
も消へ亡せて殘るゝ例の新聞紙を踏まて行める一脚の椅子のみあて是等は眞に有りふれた
る手品ゐて奇にもあらねと妙にもなけれと同し事あゞゝ之を日本の繩拔抔ゐ比すれは品よ
く手綺麗ゐ覺ゆる事よ候尤も其中よと鳩抔の小鳥を使ふて車を曳かせ字を讀ます等日本の
山雀使ひと其拙を同ふするもあれと兎よ角よ器械仕掛の巧みある丈と手品よ色々の巧も出
來ると存せられ候又た輕業も其身体のコナシ熟練は日本と左して甲乙もあらぬやよ相見
へ候其其道具立ての宜さゝめ自然見優りする心地ゐるを免れす尤も身体の働きよ就て申す

も日本の輕業師は何とあく自分よ不安心氣なる面色危ふと苦勞する氣ある態度をあすと多
く見物をして動もすれと一種の快からぬ感を作さしむると少からざるよ彼地の輕業師は常
よ顔を怡ちけ坦然として左も平氣そうある風をあし居ると大よ着よき心地致候

●問　辻馬車の趣ゝ如何候や

●答　英國辻馬車の立派あると初游の余等よと甚た目よ留りて覺へたる事よ候辻馬車ゐと
二樣あり一と四輪附の者よて我邦の勅任官抔の多く用る箱馬車と同樣なり前後相對すれは
四人と坐わると出來る樣あり居るもあれば又た通例と正面よ一人か又と二人双坐と申すを
常とし二人以上とあるとき其以上の人か馬と背合はせよ坐わるべき方の腰掛と常にゝ上よ
疊あけてあり入用の時あらでゝ其棚を卸ろさゝる樣せるもあり第二と二輪附の者にてハン
ソムと稱する一種異体の形なり是には御者の座か尋常の馬車の如く前面駕馬の後邊よとあ
らそして人の乘坐する箱の背邊よあり箱の背邊の上部よ瘤ゐ似たる小さき四角ある枠つき
居り御者と茲ゐ車の天井と已れの臍と平行せるくらゐの位置をもて腰掛居るあり左れゝ手
綱ゝ馬の轡より御客の手まで恰も乘居の頭上を越して通じ居れり箱の入口も尋常の如く横
側よりつき居らそして前面よ開き戸あり其開き戸ゝ乘客の膝頭より小し高き位の半扉よて

乘客の乳以上ハ開けハあ主なり故ヨ座ハりを作らヨして前面を見らハすと出來るあり尤も四輪はの方ありとて前面ヨ當る處ハ上部をガラヌ窓あなしあるが故必しも眸を放つとのあらぬヨハあふねども一段高くありたる御者の座抔の蔭ありて隨分鬱陶しと云へハ鬱陶し故ヨ此點丈を申さべハンソムの方大ヨ聘目の快ありとすべし要するヨハンソム形ハ一寸輕便あからふ畧式ヨ屬する方ヨて辻待の分の外、抱への馬車抔ヨと見受けるとなき樣なり元來此の形と昔し英國のハンソムと云へる男創めて之を工夫し出したるより即ち其人名を冒せて斯くハ呼ふ位あて英國が本家あり左れと倫敦ヨて尤も多く此の形を見る事ヨ候

巴里と流石に華奢都だけありて辻馬車までも夏冬ヨよりて其差あり冬分は箱馬車を用る處を夏時ヨと重もヨ毋衣馬車に易ゆるあり毋衣馬車と御承知の如く後邊より毋衣立ちかゝり居り前半と打開き其狀恰も扉おき龕の如きあり之ヨ年若き婦人抔流行を競ひし盛裝をこらして端坐し彼のシャンゼリーゼの廣き大通りを馳騁すさまは一段の觀物あり巴里にては公園の規則倫敦と異がひ辻馬車をも勝手ヨ其内ヨ乘入るゝと出來るが故空腹かき氣節とあれと夕方よりと抱馬車辻馬車相混して老少男女を打載せつゝ彼のアドブンローヤの公園に趨むくものシンゼゼリーちの大通りより絡繹さて引も絶らも有名なる凱旋門と恰も此の道筋

の衢ヨ當りて巍かくさち居るが故試ヨ凱旋門上ヨ攀登りて（門の高さは直立一百五十二英尺畧は我ゝ三十間許りあり）屹と向を見わたせと幾百とあに許多の馬車は相駢びて四行五行とあり各行又た首尾相接して陸續と公園の入口を指して進み行く有樣と恰も糖塊を臭きて聚まり來る蟻の群を觀るか如きあり他處ヨてと餘り看難き景色と存候

伯林ヨて一寸異樣ヨ覺へたると毋衣馬車に上下の二ヶ通りありて下の方ハ惣体ヨ武骨ヨて綺麗ゐらも又た其品位を分つた処ヨや前面の窓ガラス（前後の毋衣を合せたるとき窓とあゲ疊みたるときと御者と客座との界板となる）上等の方は色無し下等の方と色付とあり居りし事ヨ候

日耳曼旅行中フランクフォート（南部日耳曼中第一繁昌の商賣地）の近在あてと牛ヨ荷車を牽かせる者を段ゝ見受けたり其牛の使ひ方と日本の如く鼻孔ヨ「ハナグリ」を貫せる所の法ヨと異あて單ヨ双角の根を約ばり其綱を執りて操縱をあすあり大抵ハ二頭立ちあせるが多かりしが一本の棒を横たへて之ヨ二頭の角の根を結ひ付け以て按控の事をあせり又た此の邊の田舍ヨ這入りしヨ或る處ヨて犬に車を牽かせるを見受たり是と往々ある事の由ヨて後ち伯林の町中ヨても幾度か之を見聲たり犬の事あれと固より大きある車を得率く等ハ

あし只た小さき車よ小さき物を載せて牽き行く其傍らよは必ず又た一人附添ふて行くあり日本よて云ふ丁稚小僧が袱包を之よ牽せて用達しよ出掛ると申す位の處なり何分よ馬と勿論牛よせよ犬よせよ身躰魁偉して強健く能く色々の働きよ堪へるとの出來ると羨むべき事と存候

●問　御話しの音樂場の建物い如何に候や

●答　早く云い、劇場を小さく致したるが如く仍復正面よ舞臺ありて其の兩端より半月形よ輪づくりて見物の席あり劇場と異ひ候い劇場の如くよ桟敷幾段も〳〵重なり居らす尤も其場の大小よりて色々不同もある事あれ〳〵先つ桟敷と二三層しかあさか通例よ候劇場の壯麗あると申すまでもなき事あれ共是の寄席なる音樂場よても少し場處柄よ至れと其華奢なる事初游の者の目を聳かそとなり一寸致しゐる事あから場中は廊下よ致せ階級ゐ致せ一切厚きブク〳〵しさる敷物を布きありて如何よ下品ある靴も穿きて這入る者も決して歩行くよつれてキウ〳〵ギシ〳〵と音の發そる心配あし物事不案内なる時い妙なる間違も起り勝ちあるものゐて明治の初年洋服の流行とじめし頃よは如何よ誤りけん靴と歩行くよつれて音の發するを善しと致し鳴革抔と稱し態〻一種の革を底よ嵌めて迄も音を發さんと勉めゐるものあり現時は固より斯る事もなけれと誠よ顛倒したる話よて彼地の作法よては靴の音の致すい甚た好まぬ所あり佛人の物語と覺ふ一昔て日本よ游びしよ最初本船とりハシケよ移りて陸ゐ近づきたる時日本ある國を始て目撃るゝ共よ第一よ奇異不思議よ感したると岸上を往來致し居る男女が都べて歩行くよつれ其の脚底よて一種の音樂を奏しながら徘徊せる一事ありき」との話あり成程靴にてさへ其音が發つと上品の禮とせざる風俗の中より來りて彼の立派なる婦人士君子の遠慮もあく駒下駄足駄の類をカラ〳〵コロ〳〵と曳き鳴ふし往來するを見ゐと驚きたるも無理あらぬ事と存候

音樂場の類と何れの國よも之れあることなれとも右と重もに英國を申したるものあり又倫敦ゐ水族館（アクウォリヤム）と云ひ聞こへたる人寄せ場あり是と元と人面の通り水族を養ひ時へて公衆よ觀する所ゐて水族館と稱すると他の博物、展書、等の諸館同樣各國の都會〳〵にも固より多く之れある事あるが倫敦の分と獨り其趣を異よし其建物も至て廣大あれと其振合も宛然別よて肝腎の水族と唯た斯の廣大ある建物の内邊の一方の壁際ゐ一ト通り陳べあるのミよて其の中央と翛然と打開きたる大廣庭あり其正面の中央よ一舞臺を擬へて仍復音樂場同樣種々の藝を演し居れり是の藝と水族館の附物としありて別段よ桟敷を取るよゐ

ちさるより外立ち見い人々の勝手あり其他時ゝ隙ひ是の館内を借りて色々様々の觀世物を興行するものあり恰も舊の淺草奥山と云へる趣ゝ似たり之ゝ加るゝ種々の賣物店、茶店、酒店、料理店、其中に羅列し夜分の賑かさゝ言ゝん方あし水族館ゝて毎夜點す瓦斯の火口無慮一十万筋と云へり左もあるべし館内は一面螢籠の如く燈やきわたれり然れとも是の水族館ゝ如く人寄せ場とおゞ居るゝ從て身元宜しからぬ職業の婦人抔も多く此ゝ入込み立交り居るが故少しく体面を搆ふ士君子ゝありてい水族館ゝ繁く出入する抔との事は餘り申すを要ぺぬ方ゝ候

問　音樂場ゝ限らす都へて劇場等ゝて演する躍、所作、事の物い如何なる樣ゝ候や

答　凡べて躍の手振ゝ一寸見物ゝたる所にて簡易にて變化の少き者やゝ存候日本の流義より云は、躍の手ゝ唱歌の意味を代表するものゝて眠ると申す歌意の時ゝ肱を曲け數へると申ゝ歌意の時ゝ指を使ふる抔都て歌意ゝ應じて一切の態度を定むとゝるゝ西洋の躍は更ゝ斯樣ゝるとなし兩三年前日本ゝ游ひて頗る好遇を受けたりと云ふ英國人某が著ゝせる紀行ゝ種々日本の風俗を嘲り記せる中新富座ゝて實の芝居を見居し彼の古市の躍の處ゝ至り其の躍の手の異樣ゝて變化おき旨を說き居たれと日本人の目に西洋の躍は隨分異樣ゝて變化なく見ゆるなり左れと斯る議論ゝ置き西洋の躍の日本と異るゝ躍の地と稱すへき歌を唱ふとおきと從て其手ゝ意味を代表するとおきと是れあり先つ一寸尋常の振方を掲て茲ゝ云ゝゞ多勢の躍子が五人十人乃至二十人三十人宛各々對の衣裳を着け幾組とおく（組數人數の多少ゝ其掛りの大小ゝよりて勿論其差あり）次き〳〵ゝ現れ出て一ト組宛手を揃へて躍り後ゝゝ二組三組と諸組打混して躍る其間〳〵ゝ計りて他の躍り共をゝ周遊ゝ片寄せ首尾とも云ふへき一人が例の腰鐵の如き輕羅の裳を着け獨り舞臺の中央に出て、躍る是の一人躍と組躍とか入れ違ひ〳〵ゝ躍りたる末舞臺總躍となりて終るなり扨て其躍の手ゝ單ゝ手を廻わし腰を捻ねり足を振りて走り回るゝ過きすして何の意味もあし唯た其賞玩すへき點ゝ身体輕捷にて手足活潑毫も重もた氣おる所おく一人躍りの巧なるに至て身体凝忽として空を歩そるかと想いる、計りおり組の躍方は別ゝて簡易ゝて唯ゐ其多勢出齊しく揃ひの手ゝて躍ると申す所ゝ文章の存するとなり凡そ何でもなき手振にてゝ多勢齊しく揃ふて之を演するときは其間ゝ自然の風致を生するゝ人類眼世界天然の規則に候

又今一つの異所を申さい日本の躍ゝ彼の多錢善買長袖善舞の諺の如く衣裳のヒラ〳〵ゾロ〳〵したるゝ因て其態度を取れとも西洋の方ゝ衣裳ゝ其彩色をなほのみゝて態度い重

もよ眞の四肢のコヤシに因て其趣を取る樣あり左れど西洋の躍子は手と手、足は足、と其備を露とは衣裳を重もよ用ゐて緩褪潤袖と若けぬ事よ候

問　西洋の家屋の有樣と如何

答　家屋の建築法と實ゐ種々の制あるか上其國々よ因て又種ゝの區別あり去り乍ら先つ其物質だけは何處も同樣よて第一は石室あり第二と煉瓦室なり然る處石のみを以て築きたる家屋ハナカ〳〵稀なるものよて先つ古代より傳はれる城壁の或と有名ある王公貴人の宮來よりの住居か抔の外よと通例の家々よと思ひも寄らぬとあり是と其物質の堅牢あるとを無論貴ぶとあがら實よ其入用ゐ堪へ寧ろ人造の煉瓦にて積み上ける方其費輕さか故あり左れと純粹の石のみよて建てたる家は寺院ゐ城廓か古代の遺物ある公共の建築物か此外にと見へさるとあり尤も英、佛、墨等の重もなる場處へ聳へ立てる建物の中よと總て石を以て積みたるか如きものあれとも多くハ唯其前面のみを化粧したる迄よて左右後面及び家の中心迄悉く石と用ひあるよは決して之あし先つ通例ハ皆ゐ煉瓦よて積み上け所ゝよ石を以て化粧をなすよ過さすと云て可あり又煉瓦よも二樣あり其形ちと總て日本の煉瓦と大同小異乍ら銀座抔よ用ひたる如き赤色のそのあり又黃ある土色をあし居るものあり此二種の

内一方と火よ強く一方は水ゐ強しとのことを聞きしが左樣ある區別もあるとよやと思ゆ黃色ある方ハ赤き方より全脆ゐ堅き樣ゐ見受けたり此等の煉瓦を用ゐて其間よとセメントを塗り詰め家屋を組み立るとなるか田舍の村落の家々の中よハ家根組み及ひ二階の樣柄抔ゐて都て木を用ひ居たるもの多し然れとも都府ゐて重もなる商店の家抔と建築するを立寄て見るよ樣柄抔ハ皆ゐ鐵を用ひ太抵の木を用ふる場所よハ鐵よて之を辨し居れり又亞米利加よても相應ある場所の普請を立寄て見さりしよ是も樣柄其他よは成るべく皆ゐ鐵を用ゐて木を用ふるもの尠かりき然れ〻歐洲の家屋の後來の運命ハ土、石、鐵三者より成立ち木材と僅ゐよ之を助けるだけのものと成行くあるべし

又建築法の論と姑く置き尋常住居家の勝手向の有樣を述べんゐ此等も英、佛、墨、伊等國々に因て多少其趣を異よし居れり其一例を擧くれハ巴里、伯林、等よては廣大よして高き家多し故よ家を借る者ハ其一階〳〵を借るとよて例せハ一階よは甲某が住へば二階よと乙某の家族が住居し又三階よハ丙某の家族が住居すると云ふの有樣ゐて大ある家を横ゐ幾段よも切り多數の家族が其一階〳〵を一軒の家とあして借り込むとなり又家主も其爲めよ工夫して建築せるとあれ〻一階を借り受る時と客間、勝手、臺所、書室、等夫々ゐ備はて居るとあり

早く云へば日本風の平家を五箇も六箇も積み重ねて其一層〻を貸家とおすが如し故に此大なる家の隅より頂上に達する楷子段は恰も裏長家の小路の如く五六軒の家族か共同にこを用ふると云ふ有様あり此仕組い專ら巴里、伯林、羅馬抔に行るゝあり

然るに英國こ又其体を異にし大なる家を堅に幾戸も仕切りてこを貸すの趣向なり故に例せい三間間口一軒を借り込む時こ其一階二階三階とも渾て甲の一家族に屬し又其合壁の次の三間間口こ乙の一家族に屬すると云ふ仕組なり左れば通例英國の下宿屋抔は一階より三階四階迄皆な一の家族に屬し居れり

右の有様なるゝ故倫敦の貸家下宿屋こ餘り大あらすに又高からさるに巴里伯林等の貸家下宿屋こ甚た高く又甚た大なるとあり倫敦抔の下宿屋は一階二階三階と人を容るゝに巴里、伯林、なれは一ト間二ツ間と横に並ひて客を容るゝ譯なり尤も巴里伯林にても場所に因てい倫敦の如く横に仕切て住居する様に拵へたる家もあり又倫敦にても場所に依てい幾階にも家を貸す如く拵へたる建築もあり然れば一様にこ申し難けれとも先つ重なる風俗は斯様なる相違あるとに候

今倫敦の一家に在ての間取を略説すべし尤とも上等の生活に至れば家も宏大にして其間數

も多く一様にこ云へぬとなり然れい此等をこ巴里と世間普通中等以下の勝手向の間取を述べんに往來の道と其天井と齊しき云こゝ地底の一と間あり又往來と幾んと並ひたる一と間あり又其上に一階あり二階三階ありと云ふを通例とす偖其家こ先つ日本にて見る所の西洋家の如く所〻に四角ある窓ありて其家の入口にい三四尺幅の開き戸あるを通例とす總て西洋の家は煉瓦にて三階四階五階と積み建つるか故に其重み強く餘程土臺を固めされば忽ち壁にヒゞの割目を生するゝ故に地盤の堅き所を擇み地形を固むると大切あり左れこ餘程深く地盤迄堀り付けて然る後に石、土、抔にて敲き固め土臺を拵へるとなり然るゝ故に最も低き一と間い前記せる如く幾んと天井と往來の道と相齊しき程あれば此處にこ光線取りの途をつけされば甚た闇き様に見ゆ此最低の一と間の床より往來の道に向て斜めに土を操り落し堤塘の形ちをおし町外れの繁華なゝさる場所にてこ此處に菓木抔を植へ置くとなり故に光線い相應に此より取かるゝなり（之をば假りに下た間と名つくべし）臺所、物洗場、一寸したる物置、勝手、に使ふ部屋こ則ち此下た間の内にあるなり又此上の間は則ち往來の道と其床と等しきか然らされこ往來の道より四五段高く昇る程の小高き位に床を据へたるものにて來客抔は往來より一二段石段を上りて此間の入口の戸を敲くとなり通例表向きの食

早く云へば日本風の平家を五箇も六箇も積み重ねて其一層〻を貸家とするが如し故に此大なる家の隅より頂上に達する梯子段は恰も裏長家の小路の如く五六軒の家族が共同にこを用ふると云ふ有樣なり此仕組は專ら巴里、伯林、羅馬抔に行はるゝあり

然るに英國は又其体を異にし大なる家を堅に幾戸も仕切りて之を貸すの趣向なり故に例せば三間間口一軒を借り込む時は其一階二階三階とも渾て甲の一家族に屬し又其合壁の次の三間間口は乙の一家族に屬すると云ふ仕組なり左れば通例英國の下宿屋抔は一階より三階四階迄皆な一の家族に屬し居れり

右の有樣なるは故倫敦の貸家下宿屋は餘り大あらず又高からざるに巴里伯林等の貸家下宿屋は甚だ高く又甚だ大なるとあり倫敦抔の下宿屋は一階二階三階と八を容るゝあり巴里、伯林、なれば一ト間二ツ間と横に並ひて客を容るゝ譯なり尤も巴里伯林にても場所に因ては倫敦の如く横に仕切て住居する樣に拵へたる家もあり又倫敦にても場所に依ては幾階にも家を貸す如く拵へたる建築もあり然れば一樣には申し難けれども先つ重もなる風俗は斯樣なる相違あるとす候

今倫敦の一家に在ての間取を略說すべし尤とも上等の生活に至れば家も宏大にして其間數

も多く一樣には云へぬとなり然れは此等を之遊歷と世間普通中等以下の勝手向の間取を述べんに往來の道と其天井と脊しさ云ふゝ地底の一と間あり又往來と殘んと並ひたる一と間あり又其上に一階あり二階三階ありと云ふを通例とす偖其家に先つ日本にて見る所の西洋家の如く所〻に四角なる窓ありて其家の入口より三四尺幅の開き戸あるを通例とす總て西洋の家は煉瓦にて三階四階五階と積み建つるか故に其重み强く餘程土臺を固めされば忽ち壁にヒビの割目を生するゝ故に地盤の堅き所を擇み地形を固むると大切なり左れば餘程深く地盤迄堀り付けて然る後に石、土、抔にて敲き固め土臺を拵へるとなり然るゝ故に最も低き一と間は前記せる如く殘んと天井と往來の道と相稱しき程あれば此處には光線取りの途をつけされば甚だ闇き樣に見ゆ此最低の一と間の床より往來の道に向て斜めに土を操り落し堤塘の形ちをなし町外れの繁華なゝさる場所にて此處に菓木抔を植へ置くとなり故に光線に相應に此より取ふるゝなり（之をば假りに下た間と名つくべし）臺所、物洗場、一寸したる物置、勝手、に使ふ部屋と則ち此下た間の内にあるなり又此上の間は則ち往來の道と其床と等しきか然らされこ往來の道より四五段高く昇る程の小高き位に床を据へたるものにて來客抔は往來より一二段石段を上りて此間の入口の戸を敲くとなり通例裏向きの食

堂に用ひ或は一寸せし來客を通すべき間抔は先つ此の第一階にあるあり又其上第二階は通例表向きの應接の間にして英人はドローイングルームと名つけり客座敷を此處に取ると多し（ドローイングルームとはウィッシドローイングルームと云へる意味にて客を饗應し其饗膳終りたる時に此に引上げ導き休息せむると云ふ意味ありしに追々略稱して今は唯ドローイング、ルームと云ふことなれり）此のドローイング、ルームに一家にて最も飾り付けの念を入るゝ部屋にて其家の珍重の額面飾物等は總て此間にあるとあり又此階には通例安椅子椅子一脚一「ソーフハ」一脚通例の椅子四脚を併せて六脚を置くを通例とす（尤も上等の分は此限りに非すと知るべし）又此上の一階なる三階に通例家族の寢室にして五人あり六人あり皆な夫〳〵廣き部屋にて小さき寢床の二つ三つも入れ狹き部屋には二人前の寢床一脚を置く等見計ひ次第あり又家根の頂上に隣りせる最も高き場所は諸間の中にて最も下等に見下すものにて通例は下女下男の部屋を此に取るとなり日本にて高き所程悦ひ下き間程何の卑き樣に思ひ居れとも彼地の風俗に慣るれば實に低き所程貴く高き所程何事にも不便にて一寸昇り降りをなすにも息の切れる程に段數の多きとあれば勢ひ頂上の部屋を尤下等とし下の部屋程を上等とあさねばあらぬ樣なる譯に候

●問　西洋諸國の屋根の瓦と日本と同樣ありや

●答　概して謂へば西洋の屋根の瓦は二種の區別あり其と日本の如く燒瓦あり他の一種と日本にて學校生徒の用ふる石盤と同樣なる薄き石片を用ゆる事あり第一種の燒瓦の方は古くより西洋に行はれし者と見へ英、曼、伊等の古き田舍の小都府に至り見れば多く皆な是の燒瓦の方を用ゐ居れりと而して諸國の繁華なる大都府などにて稍や新らしき建築及び相應なる家屋を見れば通例皆石瓦の方を用ることあり

英國ロンドンなどにて一寸見たる節は屋根の瓦は皆鐵或は銅にて張たる者と思ひ居たりしに何樣余等の見聞せる所は成る可く精しく之を我國人に報道せんと恐懼け綿密に之を調へ見るに至て始て今迄金屬の薄板張ありと思ひし屋根と左あらをして多くは皆石盤瓦なる事を見出せり ロンドンなどにて用ゐる者と先づ其幅一尺或は一尺五寸四方の者にて其平面甚たしき凸凹なく先づ滑らに平たき方なれども左ればとて尋常の學校石盤程に滑かに磨きたる者にあらず此の薄き石片を以て一者に葺きたる事にの其合せ目〳〵に少し石片を薄く削りて双方の端を重ね合せ為る者なれば一寸遠方より眺むれば恰も金屬にて薄く張為る屋根の如く見ゆるとあり故に等閑に見過す者と之を金屬の瓦ありと思ひ誤る者も有りしる

らんと想像する程の事なり

又此石盤瓦も國々に由て其形種々の相違あり佛國などの相應なる建築に一尺ばかりの鱗形に切りたる者を恰も鱗の如く重ね上げて疊みたる屋根もあり又曼國のライン河の上流に沿ふたる都府及びフランクフォート近傍の田舍に至れば此鱗形の石片の大さ僅に三四寸にて而かも其丸き形は種々の不規則なる者を鱗の如く重ねて屋根をきたるもの多し又家に因りては其屋根のみならず前面側面の壁をも一疊に此石片にて重ねたる者あり其狀恰も日本にて板壁を用ふる場所に板の換りに此石片を以て壁地に重ねつけたる者なり然れは日本の家などに比すれば屋根と云ひ家の前面側面と云ひ此石片の重量丈幾許か餘分の重量を擔ひ居るとなりと見も斯く石片を以て屋根のみならず四面まで掩ふたる事なれば日本などの如く大なる地震ある日には必ず其度毎に多少の損處あるとなふんと思ふるに扨て斯々一面に石片を以て之を掩ふたるが故に遠くより眺むれば恰も猶は灰色のセメントを以て葺きたるが如く見ゆるとあり

又其燒瓦を見るに不手際にてふき方の不規則なる事も甚た日本に劣れり日本の事物を西洋諸國に比較すれば何事も何物も唯た我れの劣れるを見るのみにて殘念に覺ゆる事多きに只

燒瓦の一事に於ては日本の方大に優れるが如し第一先つ瓦の形の正しき事も彼地に者ては日本の者に及ばすして甚だ麁粗なり又其色合も素燒の如く赤色を斑に帶ひて日本の如く定またる色なし左れば色と云ひ形と云ひ是の二點にかけてハ日本の方甚だ立優りたる者あり斯かる麁粗の瓦を以て葺きたる事なれば彼地の屋根に赤色に見へ又日本の如く一行〳〵に整然と條目正しく並び居らぬ左折右曲て見ゆるあり万事何事も正しきを好む國柄にありて何故に獨り屋根瓦の一事のみ此の如く見苦しきやと考ふるに蓋し彼地の家屋は總体に高くして往來人の目あたり只三階四階の軒端を見るのみにて其屋根を近く見ると能ハす只遠方より之を眺るとの出來るまでなり左れば通例市街の家に尚更の事少し高き家なふんには屋根に先づ其家の化粧の中あたり入らぬと云ふの有樣なり然るが故に自然と其瓦などにも注意すると溝きものと見ゆ（左り乍ら公會の家屋或ハ寺院其他有名なる建築の如きに屋根より土臺に至るまで念に念を入るゝ事あるが故に其屋根も亦尋常の赤瓦などをば用ゐも頗る注意する事なれハ此類の建築は取除けての論と知るべし）然るに日本の家は甚だ低くして皆な其屋根を望み見らるゝが故に屋根及び瓦などハ其家の裝飾の部類に加ハる事あれば自然と屋根瓦にも心を用ゐる所く西洋諸國に優るに至りし事あるへし尋常の家屋の瓦に日本の方が遙

かゐ西洋家屋の煉瓦より優り居ると云余等の保證する所あり

近來日本より行はるゝ亞米利加瓦とか云へる一種の瓦あり右は歐洲諸國よりは餘て見慣けさる樣に覺ゆ唯亞米利加に於ては處々より見受けたり然れば此見の型と近來の發明にて亞米利加より始まりしものにあらざるかと思はる然れども余等の耳目の及はさる所ゐは西洋諸國の中よりも稀ゐて之を用ゐる者ゐるやも知れぬ

問　道路の有樣は如何

答　西洋の道路い概ね左て四種ありと云ふも可なり先つ第一ゐは日本の銀座通て抔の如く通例赤土樣のもの、其儘ゐ固りたるものあり又第二に之石疊あり其仕方と日本より眞石と稱ふる堅き石を煉瓦の如く割りたるものの、非を形ちは煉瓦の通り乍ら其面は粗らくして所々より少々つゝの高低ありと知るべし）を以て銀座の八道を煉瓦ゐて疊みし同樣より一面より敷き詰めたるものあり此石疊道い舊來諸國より行はれ來りしものより少し都府らしき處より至れば其町々い如何より道幅と狹くも必す石疊あらざるはゐ去此方法ゐれい雨水の爲めより通例の土道の如く所〻を洗ひ流されて高低を現いす如き患もなく萬端都合好く丈夫至極のものあれとも余等の如き旅行者抔の爲めより

之甚た好ましからぬ道ゐて如何とゐれと馬車抔より此上を通行すれば其ガタ〳〵と搖れて頭腦より響くと實ゐ甚たし銀座通りの如き土道を車より驅ると此石道を驅るとは實ゐ乘客より非常ゐる苦樂の差あり此道を乘て行くときは辻馬車よりても其搖れ甚だしきとゐれば況してや乘合馬車抔より斷る道を通行する時と痛痛を悲き起すかと覺ゆる程より動搖し且其ガタ〳〵と軋る音も亦た甚た不愉快千万あり此一事い蓋し日本の車より未た曾て經驗ゐふさるとゐるべし又第三より は煉瓦の形ちの如くせる木の木口を道一抔より敷き詰めたる物より木道と云ふべきそれあり木道の普請抔をゐすを立寄て見るに其方法い先つ初め道の地盤を敲き固め然る後より煉瓦形の木の木口をヒシと敷き詰め其間より何か流し込みて空隙を防き然る後より極細かゐる泥を薄く散しゐるが如し然れとも諸車か其の上を軋るが故より此木口と自ら現れ居る場所も多し又此木口と悉く習ゐチャンを塗りゐる故に往來を始むる前より之道の色は黑く見へ居れり此木道は廿年來諸國にて造り始めたるとゐて追〻より用ひらるゝ有樣あり其第四と日本ゐてタヽキと唱ふる如き種類の道より一種のセメントより道一抔を塗り詰めるとゐるが又燥く迄より は時間と費やして此間より雨天もありて道を損ふの懼れあれい甚た此道と難澁の如く思ひたるに其修復を爲し居るを見れは大なる熨器ゐて其道の上を燥らせ

居るとなり熨器の形ちと恰も彼の御影石の圓き道ナラシ機械の如く鐵にて圓く出來居る其中ゑ火を入れありと見へて此圓厨器を徐々と一方より當れとセメンとの道い漸々お燥固さる事なり左れは初め余等が難澁おるものおべしと思ひしは甚た迂濶ありしを悟りたり此第四ゑ擧けたタヽキ道は諸種の中お て蓋し第一等のものおるべし大道をタヽキおたるとおれば徒歩はるにも心地好く又如何なる種類の車ゑあれ其道を驅る時とガタ〳〵と音もせされと些ろの動搖もおく車い澄とうかりて進むことおり

右四種の中ゑて英、佛、曼、伊、米の諸國に最も多きと石道おり其次ゆい木道おりタヽキ道は最も少きものおり之を用ふるとと先つ佛都巴里の目貫きとも云ふべきブールバードの諸街ぐらいのとなり又英國ゑては中央市區(シチーと唱ふる部分)ゑ限るとゑて適宜お木道タヽキ道お改め居れども尙は未た十分ゑ之を用ふるゑ至らぎ又石道の所と佛ゑても英にても漸ゑと木道ゑ改まり行くの傾きあり然れと西洋道路の後來の運命お豫言すれば今日石道の所は木道ゑ變し木道は又た次第ゑタヽキ道に變じ行くべきなり

又英佛の重もおる都府の中ゑて通例の場所い皆お馬車道と人道との二つゑ分かい中央の廣き所は馬車道にて兩側の狹き所は人道おると我銀坐通りと同樣おり此人道は巴里の中央ゑて

ては專らタヽキ道とおしおり倫敦ゑても同樣ゑて重もおる場所の人道は卒ねタヽキ道おり又中央ゑは少しく隔りたる町々の人道と英國ゑては人造石を以て疊きおり此人造石とは粘土を集め人造の石を持へたるものゑて其幅さい通例三尺四尺位のもの多し倫敦抔ゑてと場末の町々迄も人道お之を用ふるとなり此石は人造作ら意外ゑ堅きものおて一寸碎けべくも見へぬ程のものなり去り乍ら人の出入の繁き所と靴ゑて踏み銷ちされ居る所も多し之を以て考ふれば日本ゑて眞石と唱ふる程の堅さい決して之おきものおり又見たる所は通例日本で砥石色と名付る黃茶色をおし居れり右と英國お限る事ゑや巴里抔の町々人道ゑは餘り之を見受けさる樣お覺ゆ日本抔おても銀座の人道をタヽキ道ゑおすと出來難くんば此人造石を造りて用ひたらと便利おるへしと思とる

伊、佛、曼抔の小都府を旅行し終日瀛車お て搖られたる上停車場お到着し疲かれたる身躰を以て宿屋の手馬車ゑ乘せられ行くゑ當り前述せる石道の上をガタ〳〵ビリ〳〵と搖られ行くの一事と旅行者の爲め お難義なる一事おりしおり大陸の古き小都府お い別して此石道多く車ゑて之を乘り行くゑは實お難澁至極せり

◉問　通例の家屋ゑて家の規摸及び窓の有樣と日本の西洋家或と横濱神戸おどの居留地の

西洋館と左までの相違なきや

●答　横濱神戸の西洋館あと、差したる相違はなけれども稍や其趣きの異ある箇條なきあもあらば先づ倫敦あどの中以下の家の有様を謂へば奥行五六間を通例とし間口と十間迄の者を一ト棟とし此一ト棟を三四間間口に仕切りて一軒の住居とあす事あれば三四軒を合して一棟の家とあり居るあり扨家の四面と総て煉瓦の上をセメントの塑あて塗り色と其儘セメントの灰色の者多し而して前述せる如く通例三四階或と五六階までありて其一階毎に居留地西洋館の窓の如く細長き角なる窓を二つばかり宛あけあるを常とす最も間口の廣狹に由て或は大なる窓一をあけたる者もあり又小さき窓三つを設けたる者もあり

往來より一段低き下間と夜中抔と不用心あるが故に窓に外に鐵格子を設けあるか又と雨戸を閉つゝ様にあしある者も尠からず又往來と等き平間の窓も往來に近く去て不用心あるが故あ家に因てと扉の雨戸を閉る様にあしたるもあり然れども一階二階三階四階に至てく大抵雨戸を用ゐぬが通例あり右と家甚だ高く去て盗難も亦少なきが故あるへし而して右の窓々にはガラスの戸を嵌めたり是れも倫敦には通例窓一面の大ガラスを用ふるあり又其厚さも日本あて用ふる尋常のガラスの三四倍もあるべしと思ふ程に厚し日本には厚ガラス少

あきが故あガラスと聞けば毎も脆き者の様にあれども通常ロンドンの家の窓などに用ひある者ハ實に厚くして丈夫なるとあり又近來建築せる住居家と大概窓の戸を上下二枚あ分ち外面より之を見れば窓にハ其中位に一の字の仕切あり上て下のガラス戸を上ああぐるう又と上のガラスを下におろすかのとあす様に工夫せり故に窓のガラス戸全部を一時あ開くとハ出來がたき者あり

●問　往來の人より家内を見徹され或と日光の室内に差込を防ぐ等には雨戸なくてと不都合の如く思はる又雨戸ありとも此を閉むれば室内甚だ暗くあるの恐れあり其邊と如何

●答　外面より見徹されぬ爲めあと窓飾に室内に薄き紗の如き者〔非常あ高價なるあり又粗末にして非常に廉あるもあり〕を設けあるて此薄き布を垂るとき〕外觀より見徹さるゝ恐れもなく明光も十分に取るゝ事なり又夜分あど家内の者の寐床に入る時或〕日光の差込を防がんとする時はブラインドと名くる木簾を下ろすとなり此木簾と通例窓の内部あ設けある者にて幅三四寸と長しき薄板を幾枚も綴りて簾の如く拵へたる者あり是を卷上ぐるときと疊まりて四五寸ばかりに縮まり是を下ぐれば窓一面を塞ぐ様にあり居れり而して此の薄板の木簾は羽重ねになりて下にも向〕しめられ上にも向〕しめられ隨意に其の重あり方

を變する樣ゑ出來居れり横濱の停車場抔で先年之を用ゐありしを見掛けたり此木簾は雜作もおく出來る者ゑて甚だ便利なる工夫なり倫敦の住居家ゑては通例何れゑも之を用ゐる事多し然れとも又此木簾の外に唯厚き布を垂れて窓の日光を防禦ゐ爲たる者も少あからぞ是ゑ濃赤色又ゑ濃綠色抔の布を以て之を造り紐ゑて之を卷き上け或は引下げる樣ゑあすと通例あり前記せる木窓も加何に手際に拵へるも十分ならぬ譯ゐや廣大ある建築美事ある住居家あとゑて此布窓を用ゐる者の方稍や多きが如し序なれば爰ゑ記載すべし中人の通例の座敷ゑと雖其際ゑ一種の窓飾の長幕ゐて綾織の切布を以て之を造るは是の長幕は實際之を開閉に用ゐる事は至て少あり通例ゑ單ゐ其室内の趣を添ゆるが爲ゑするものあり其形ゑ先づ窓の中央より右ゑ一つ左ゐ一つあり二つを以て窓の上より下まで掩ふ樣ゑあり之を右と左の左右ゑ絞りあげ種ゑ窓飾りを其絞る所の紐ゑつけあり是は通例の部屋にゑ無くてあらぬ飾にて室内大切ある一部分とあり居る事あり

又窓ガラスも少し宛其趣きを異ゑするとあり佛國の都府ゑ至て見れば其窓ガラスゑ多く両方ゑ開く樣ゑなしたる開戸ゐて英國の如くゑ上ゑあぐるか下ゑさぐるかの外に前面ゑ開く事の出來ざる樣ゐて居る者ゑ甚だ稀あるやうゑ見受けたゐ而して又佛國ゑも通例其ガラス戸をゑ三四の格子ゑて仕切り其一格毎ゑ別々の一枚ガラスゐ恢め四五枚のガラスを以て一枚の戸となしある者多く英國に如く一面の厚ガラスを以て一枚の窓となせるゑ稀ある樣ゐ覺ゆれ此兩國の風俗の同しからざる者あり而して又全体ゑ英國の方は不細工ある程其ガラス厚く佛國の方ゑ稍や薄き方ゑ見へたり又伯林の如きに通例の住居家ゑガラス窓は佛國と其趣を同うし開戸の方少なからぞ又一種の便利なるゑ通例其窓の上段をゑ蒲鉾形ゑ操割て此處より一尺内外の處ゑ一の仕切をなし此仕切より下をゑ例のガラス戸の左右開きとなり居れゐ而して是の左右開きの上卽ち其蒲鉾形と仕切との間にハ亦たガラス戸の小開きを設けありて戸下なる大ガラス窓の開閉ゑ關せぞ此上段の蒲鉾形の處を開閉し得る樣ゐ工夫しあれり故ゑ若し風の入り過ると覺ゆる時ゑ下なる大ガラス戸を閉め其上ある一尺内外の小開きを開いて少しく空氣を通ぜる事ゐ自由なるべし此等ゑ英國ゐゑ餘り多く見掛けざる工夫ゑて至極都合宜しき譯なり

左りあがら英國とても少し田舍ゑ往て觀ればガラス戸の厚みゐ隨分薄き者多からぞ先づ都會の尋常の住居家の上に就て斯く國々を比較したる事なり一寸者へればガラスハ破れ易く往來ゑ窓々が立並び居るとなれば瓦礫抔ゑを擲ちて容易ゐ傷けられべき譯なるゐ斯ゐ惡戯

をあす者なきハ感心の國柄ありと思ひ居りしよ少しく倫敦の場末の市街よ至て見れば其空屋よ限りて窓のガラスと散々よ破れ居る者多し蓋し惡戯の子供が人の在らざるを窺ひ喜んで瓦礫を擲ち之を破る者なりと見ゆ家に困れば其ガラス窓の一階より三階よ至る迄美事ゐ打破ふれたる者多し然れば隣分惡戯兒童の多きハ何處も同樣の事なるべし

●問　西洋家は其壁も厚く扉も堅固よして縮りよしとの事なるが若し他人の宅を訪ふ時よ於て取次を請ふゐは鈴よても鳴らす樣ゐ仕掛ゐあり居るや如何日本の如く頼むと云ふも不似合あるべし

●答　如何よも鈴を鳴らす樣よあし居る家もあり先づ英國の事を以て申さバ同國人と何事も不便利あき以上ハ古風を存ぜるを好む者よや茲に一種の工合あり先づ中以下の通例の家よと其入口の扉の前面ゐ丁度手の届くべき高さの處よ手ごろなる相應の引出しの環の如き金屬垂下ア居れゝ英國ゐては之を戸敲〔ドーアノッカー〕と名く來訪そる人は先も此の環を〳〵と鳴らして戸を敲くとなり然るとき取次人出で來るを通例とす又此戸敲き方よて此と電信とか郵便とか是と來客とか區別自然よ出き居れり其譜調ゐ謂へと先づ電信あらばカチと高く一と聲敲くとあり又郵便あらばカン〳〵と敲たく聲なり又た通例の來客あ

らばカヽヽッカッと初めを刻んて後ゐ大きく一二遍敲くとなり右と甚だ便利ある區別よて何時の頃より斯る事の生ぜしゐや先づ電信あれば下婢も急いて之を取りよ飛び出すべく又郵便あれば左程急ぐよも及ばず又來客あれば取次人も餘ア見苦るしき姿よてと出でも一寸前垂よて手ゐても拭き取次よ出るの便利あり右の敲き方の規則ハ他の諸國よハ曾て是ゐき樣よ存せられ英國よ限る樣よ見も先づ何れの家も通例と右の戸敲の外ゐ畧入口の横の處よ鈴紐ゐあり臺處向の小商人の來る時よと之を曳きよ鳴すとなア例せば石炭屋青物屋牛肉屋抔が毎朝用を聞きよ來るとき之毎も此曳鈴を曳き知らする事なり

右の曳鈴は近來ゐては稀よ電氣仕掛を用ゐる者もあれども先づ通例は鉄線を延き其先よ能く鳴る鈴を付けゐるを通例とす斯る曳鈴の便利もある者を英人が古風ゐ戸の前よ戸敲き環を付けるも畢竟と不便利を感せざる限りと從來の古風をと其儘よ存するの氣象を察するよ足れり又右の戸敲き環と素と外より戸を開閉する時よ把手よ用ゐたる者を戸敲きよも兼帶し居りしか次第よ世と共よ推移りて今と戸敲きとのみ變じて外面より戸を開閉する爲の把手と別よ生じたるあるべし初めて英國よ遊びし人と其當座右の戸敲の譜調を知らすして甚だ困却すると有あり何よとあれば其曳鈴と家ゐ因れバ鳥渡目立たざる處よ在りて之を見出

すと難く左ればとて外面より頼むと聲をかける譯よも行かざればなり

佛、曼、伊等の國々よりは前記せる如く戸よ戸敲の環あるは殆んど見當らざる程の事よて此等の諸國ゐてゑ通例曳鈴の設ありて之を曳き鳴らして取次を頼む事あり又前記せる如く英國にてゑ一軒〳〵に往來よ向つて入口を所持し居るゆ故よ差支無れども大陸の諸國にてゑ一階一階を一家族よて取切り居るとなれば先づ其家よ至れば諸家族の共同よ用ふる一の大門ありて往來よ面し居るとなり然れば一先づ此大門を開け貫ひて然る後ゐ一階あり二階あり其訪ゑんと欲する所の家族の入口を又音のふことあり右の大門を開閉するよは一々門番が出で來るの勞を除き來客か門前より取次を頼む曳鈴を引く時ハ奥ある門番處より入ゑ出で來らずして旨く門の戸を開閉する樣に仕掛なしあり然れば外面より鈴を引き取次を頼めば人ハ無きよ其戸は自からパタリと開くとあり

問　日本よて居酒屋と唱ふる如き酒店樣のものも彼の地よは之あるや

答　然り先づ倫敦を以て申さば丁度日本の居酒屋とも云ふべき場合に當る酒店澤山之あり彼の地ゐてハ「バー」と唱ふるとあり先づ酒店よ至ると假定め其往來よ面したる店の一面ゑ渾てガラス張りにて外より見遮されざる樣よ艶消しガラス杯を人の丈の高さ位の所ゐ用ひあり窓の上よハ葡萄酒ビーア、ホイスキー杯の如き酒の名を一つ二つ横長く窓よ張り付あり偖戸を開いて内部に入れば酒賣りの手代と客との間よ机の如き仕切りありて此の仕切りの卓子ゑ丁度腰胸の間位の高さあり此卓子の上よは七八寸一尺計りの小き欄干のギボシの如き棒並ひ立てり手代ゑ客の需めゐ應し此の棒を抑ゆれば卓子の内部よて夫れ〳〵の酒出る樣よあしありて酒を盃よ盛り卓子の上よ載せ客よ與ふ然る時は客ゑ通例立飲をあし出行くとあり故に酒店よ至るとも德利の如き物もあく又樽の如き物も見へず唯仕切りをあせる狹き卓子の上よ短き棒の並立つるのみあり故よ甚だ手綺麗よ見ゆなり其酒の種類程卓子の上の棒の立並び居る譯ありバーと唱ふる居酒屋よてゑ通例立飲みをあすとあるか又間には粗末ある椅子を列べあるゆのあり夫れすらもベンチと唱ふる造り付けの長き椅子多し一箇つ〻別ふよ椅子を置くゆのは甚だ稀なり又酒屋の内よパブリックとプライベートとの二よ別ちたるゆありプライベートとゑ少し体良き客の入込みの立飲を厭ふ人〻の這入る所にて鳥渡仕切りありて別拵へをあし又パブリックと云つる方ゑ則ち手代の見る所よて立飲みをあする所を指すとなり

英國倫敦よゑ此居酒屋の夥しさと賞よ非常よて少し中央繁華の盛場より隔たれば到る所の

町〻角の大なる店に通例酒屋あらざるもの稀あり人目立つ便利を計りしよや不思議よ酒屋は町〻の角にあるとなり偖一杯立飲みをなすも勝手あるとあれど鳥渡氣注けをあさんとする者に直くに立寄り一杯飲んで出來るとも自由なり去り乍ら先つ通例の酒屋よは身元ある人に餘り立寄らざる方にて少し場末の町〻に至れば中等以下の貧民の集會所は酒屋たるの有樣にて甚だしきに至ては男女打交り土曜日の夜抔には押し合ふ程に此居酒屋は繁昌せざるものなし大酔の上クダを巻く喧アもあり買物を片手に提げ乍ら眞赤なる顏色にて出來る娘もあり下等の人民に至ては此酒屋を以て己れ等の倶樂部ハウスとし集會所とし愉快を買ふの場所とおし居る如く見る

右の酒屋にては「ビール」葡萄酒は勿論「ポランデー」「ヒスキー」等渾べての酒類を賣が上に又た「ヨンゝ子」「シンゝ〳〵ビア」等をも併せて賣るもの多し故に裏分市中を散歩し咽の渴く節は之に立寄るも隨意あり

酒屋のことを記する序に記し置べきは西洋諸國と云へる内にも羅甸人種と「トイトニック」人種の國は其酒の好きも自から諸國に押し拘して相違あると不思議あるとなり先つ佛蘭西伊太利等の如き羅甸人種の國々は先つ第一に出來る酒は葡萄酒に定たるとあり然るに「トイトニック」人種なる英、曼等の國々に至れば先第一に出る物は「ビール」あり一方の重もある飲物は葡萄酒あり是れは著しき相違あり故に巴里抔にて

抔にて注文あれば如何なる結搦の「ビール」も持ち來れども先つ通例の料理屋割烹店注文すれば甚だ下品なる客人の如く思はれ少しく差扣へると云ふ感あるに非ず然るに「トイトニック」人種の國〻にては酒と云へば先つ「ビール」に取て掛るを通例とし葡萄酒抔は女より外先づ飲む者おしと云ふ顏付きをなし居るとなり後來日本に「ビール」國とあるべきや將た葡萄酒國とあるべきや今日抔にては些と「トイトニック」人種の「ビール」國とあるべき樣見もるが如何

前記せる酒屋の景況は專ら英に限りたるとして佛蘭西、日耳曼、伊太利等抔にては別に斯る居酒屋樣のものおし夫の珈琲ハウス則ち（茶屋と譯して可あるべきか）が此酒屋の役目を勤むるとして此點に至れは佛、曼、諸國に大に英よりも都合好きとなり如何となれは佛曼の珈琲ハウスにては通例椅子卓子等それ〳〵備へ居りて如何なる田舍と雖も之抔立寄る時に緩りと休息も出來カルタもひき將棋もさし新聞をも讀み談話をもおし得らるゝ樣抔拵へあり

故に一つと珈琲を注文するのみならず加何なる酒をも通例注文し得らるゝとあれいあり然るに前記せる如く英國の酒屋は唯立飲みをあすを專らと持へたるものにて佛蘭の珈琲ハウスの如く緩りと寛いで休息するの仕組なけれとあり

尤も英國にても珈琲ハウスあきにいあらねども佛蘭の如く到る所に之を見ると云ふ譚あは行のき極く繁昌せる町々にてと佛蘭西の珈琲ハウスを其國に寫すも鮮らぎ其体裁と甚だ相似たるものあり總て是等の事物に付ていい英國は佛國の仕組を學ぶと少からと然れども常の町々にては最早固有の國風に從ひ無闇にあし置くとあり

英、曼、佛共に珈琲ハウスにて料理をも兼るもの多し料理屋あらば通例一方を珈琲ハウスにあしあるを通例とす

●問　酒屋の手代と男子あるや女子ありや

●答　双方共に之あるやうに見ゆ尤も酒屋に限らず近年英國にては女子に出來る仕事あれば通例多く女子を用ふるとあり右と女子と天性物事に綿密なると又一つに其給金の賤きとに由るものあるべし前記したる酒屋の如きと幾んど皆な其手代と女子と云ふも可なる程なり尤も唯酒を注ぐのみのとにて別に体力を要する程の業にもあらねば給金の賤き婦人を

用ふる方便利なるべく又一つには客人に對して萬事丁寧にして愛嬌深きにも由るものあるべく其邊にい定めて種〻の意味もあるとあるべし斯く西洋の手代の通例皆な女子なるのみならず町々の郵便局の如きは幾んど皆な女子のみと云ふも可なる程あり又た電信の取扱ひも同樣あり右い故さらに斯く爲せしものにや詳びらかならされども兎に角も其婦人の一手持と云ふが如き姿あるを目に留るとなり但し海外との往復を掌とる中央大電信局或と倫敦市中七八ヶ所に設けある重立ちたる電信局抔にて女子を使ひ居らざる者もあり然れば總体に婦人のみとは云ひ難けども先づ町々の電信局丈にては婦人多しと云て可なり

●問　彼地にも日本の如き菓子屋あるとやや

●答　然り隣分菓子屋も多きとにて何處も同じ菓子屋は重とも子供を其花主とあし居る樣子なり先つ菓子屋にて賣る品物の種類を擧くれば第一ビスケット（ミルクを入り或と生姜入や厚燒薄燒幾種類もあり）又とチョコレートを以て製したる者又ミルクを交へ子供に宜しき樣に彩色したる生姜等の類なり是等と日本にて云へば都べて先づ干菓子の部類に屬するものあり　チョコレート珈琲ミルクを入りの菓子の形と日本の金米糖より少き大なる程の粒にて種々の形ちに爲せしもの多し又此外に日本にて蒸菓子とも云ふべき種類の者あり出り乍

ら日本の蒸菓子の如く小豆と云へるものを一切用ひざるとあれば其蒸菓子と云ふも玉子、小麥、クリームを材料とし軟かゐ之を搾へたる物にて先つ風月堂にて製したる軟かゐる西洋菓子と相似ゐる者あり

去り乍ら菓子屋の最も得意ある商賣は婚禮の節に用ふる一種の婚禮菓子と名つくるものあり嘗て一度たび記載したる如く英佛にて婚禮の節には必らず婚禮菓子と名つくる一種の菓子を飾り付るとにて其必要ある事恰も日本の儀式に島臺の少く可らざる如きなり右の菓子其價次第にて如何樣にも大小ある菓あがら先づ通例は日本のカステーラと生姜入りのビスケットを混淆せる如き物質にて其表面に一面に白々ミルク交りの砂糖を塗りて搾へるか多し中等士君子の家あらんには此の婚禮菓子は五十圓も百圓も費すと珍しからぬ事あり而して婚禮の濟し翌朝花嫁が手から此の菓子を裂き親類朋友に夫れ〳〵進物とあすあり右の緣起を祝ふ菓子にて貰ひ受けたる方にては之を珍重し賞玩するとたるか多數の人々に分ち遣はとあれど其一個宛の切れは誠に小さゐるものあり時に因りては幅一寸長さ三四寸位なるものを分配せらるゝのも珍しからぬ斯く儀式に大切の菓子あれば菓子屋の重もある儀式込みと則ち此の菓子あるとにて通例相應の菓子屋の店頭には必ずらず美事に造りたる

婚禮菓子の二つ三つを並べあるを見るあり

通例の家にては晝飯或は夕飯に菓子を食するとあり是等の菓子は通例自分の臺處にて造る者多しとあるが又時としてはカステイラ樣の物を菓子屋より買入るゝと抔もあり去り乍ら菓子屋の得意は先つ第一に婚禮菓子第二に子供にして第三はビスケットの類なり是は英佛の習として夜食の茶の時分に大抵多く之を食するとあり

○問　倫敦抔にて賣り居る魚類は日本と同樣なりや

○答　同樣あるものあり又異あり概言して言へば通例の魚屋に列ある魚の種類は甚だ少しして先つ重に鮭、鱈、シタビラメ、比目魚、鰈、最も多きとあり又最も　く是等の魚類を食する事なり右の魚々の味は日本と異るとあし又此外に鰻もあり鰌もあり然れども鰻は日本の者とは聊か其種類相違あるかと覺ゆ先づ日本の下等の鰻と海鰻との間の如き然れども其色合全体の姿は先づ日本の鰻と云て可あり倫敦にては隨分鰻をも賞翫するとなれど其料理法は三四すばかりに筒切に切りスチウをかけて之を食す尤も鰻は其筒切の儘蒸たる者の如く見もる其外には右の鰻をフライにしたるものあり通例日本人は彼地の鰻の料理を　ば餘り賞翫する者少し余等が諸國を遍歷する中其地在留の日本の朋友が鰻の料理を企てた

る事も鮮からぬ其中の一二と稍や日本の蒲燒よ劣らざる程の旨ありしかども其他い何れも鰻の肉餘りよ大きく且つ脂多くして腥さく何分よも日本の鰻と同樣よい思はれざりしあり鰻は英佛抔よても殊の外珍重そるとあるが此鰻よ二種あり其一と日本を伊勢鰻と唱ふる者あり又他の鰻と日本よい餘り見當らざる者よて伊勢鰻よ蟹の如き大なる爪を生したる者あり先つ此方を珍重する事よて其肉の味も亦日本の鰻よ比すれば甚だ勝れりと雖も日本よて鰻は左まで上等の魚類とと思とざりしあ彼地に在れば余等までも自然殊の外之を珍重する樣あるは吾あから不思議あるとあり

又倫敦なとよて牡蠣を珍重そる事非常あり倫敦市中にある牡蠣も英國の海岸あ生ぜるあり又亞米利加、佛蘭西、葡萄牙そり輸入する者あり然るよ地の牡蠣は高價よ去て最も珍重され葡萄牙の產之よ次ぎ佛蘭西、亞米利加其次に居るとあり牡蠣の時節始まる時あと通例拇指の先程有るか無去の者十二(一ダース)五十錢以上ある者あり少し下りて三十七錢五厘二十五錢内外とある年々牡蠣を葡萄牙、佛蘭西、ふり輸入そる金高も相應よ大なる事なりと聞けり牡蠣の時節至れば處々の安料理店の前よ(牡蠣の時節始まり)と書ける看板を見る事甚だ多し英人の牡蠣を喰むと甚だしき知るべし此事に詳らかなる人の話あ英國の牡蠣ハ日本の

產抔と少し其種異あるとの話もあり果して然るや否や

中央魚市場よ至れば日本同樣の鰒も時として是れある由あて日本人が時として日本料理を企つる節よと此を買込むとあきよ非ぜ然れども何となく其味甚だ劣りし樣よ思はれたり

又乾魚の類と甚だ多し鯡、鯖、小鰻の類皆手奇麗よ店前よ列べあると日本あ異ならぜ只た此等の乾魚の乾去方如何よも手際よて鼈甲の如く透はりて見もる程の者もあり日本の乾魚の其表面あ鹽を吹き或と白く或はシト〳〵と濕り居るよ比すれば見たる計りよて既お大ある相違あり

●問　野菜類と如何

●答　右と日本の者と違ふ居ると鮮なからぜ且つ西洋料理よて用うる野菜のみあり時節よ由てそれ〳〵の相違はあれども先づ通例は日本よてサラダと稱ふる苣の一種及びキャベーシ、コーリフラワア、球葱、及びトマトー、馬鈴薯の類なり日本よ通例の葱の種類と之れあし又蕪菁とあれども蘿蔔なし又甘薯あ去時として二三の甘薯を稱よ店頭にて見懸るとあり一日日本の甘薯の旨味の懇去さよ之を買取りて歸り下宿屋の主婦よ吩咐て是を燒き食事の時出さしめたるよ恰も日本の腐れたる芋の如くビシ〳〵と水氣ありて甘みも更お多か

ふゝ其儘打捨てしめたる事あり其後聞合はに甘薯は英國抔にて出來難しとの事あり果して然るにや又前記せる外にある者にアスパラガス（西洋獨活）右は佛國にて品多くして廉なるも英國にては非常に高價なる者あり故に餘程其時節の末にとらされば中以下の家にては之を食そると能はざると言て可あり

●問　彼地の湯屋の模樣は如何

●答　湯屋にも上中下種々の差ありれども先づ中等の者より謂ば倫敦抔にて湯屋は二枚數位の一ト部屋〳〵の仕切ありて大なる湯屋には部屋數二三十もあり小なる者には十にがりあるもあり部屋〳〵は皆狹く仕切て其中に湯氣も立騰るとして逆上するの憂あるが故に通例其仕切〳〵の上に一体に皆空氣の通ふ樣にして透しあるとあり偖其一ト部屋の内の有樣を云へゝ其中四枚數ばかりに人の丈程の長サにて高二尺四五寸ばかりなる細長き湯坪あり其物質は先づ何か藥をかけテラ〳〵と燒きたる瀬戸物の如き者にて湯に垢抔のつくと少なき樣に拵へあり手障も至て滑らかにて其色に白し尤も是に湯坪の内面を言ふ者にて其外部に板にて四角に包まある事あり此湯坪の形は上中下の湯屋共に大抵相似たる者なり中等以下の者に部屋の外にて此湯坪に通せるチヤの湯口附きあるて湯屋の小使が外部より水の方を捻

れば水出で湯の方を捻れば湯出で隨意にある樣にしあり故に部屋の内より温くせよとか熱くせよとか其加減を差圖するとなれば又上等の部屋に至れば此のチヤ部屋の内につき居り我れは湯坪に在り乍ら吾思ふ樣に熱くも温くも勝手にあるチヤを廻わして自由に加減をなすと出來る樣に仕掛たる者多し又少く贅澤なるゝ頭の上に加露の如き口設けあり我は其チヤを捻れば湯が瀑の如く頭上にて打下るあり又ゴムの管ありて管の口先に加露の如き口つき居りこれを湯口にも水口にも自由に着けて勝手に頭を洗ふ樣にしある者もあり又一ト部屋毎に夫々鏡、櫛、ブラッシ其他脊中を摩る爲めのブラッシ、石鹼、抔を備へ置きあり但し家に因りては石鹼丈は別に價を拂はねばならぬ處もあり

先づ湯錢は下等にて六片（十二錢五厘内外）あり中等にて六片より一志（二十五錢内外）迄の間なり又上等に種々にて一志より二三志までの者あり去り乍ら先づ通例は一志あれば一ト通りの湯屋と云ふべし左れば下等生活の人民に取ては我東京人抔の如く日々湯屋に趨く事に迚も能し難き事にて一二ヶ月の内にて一度入るか入らぬ位の事あるべし又中等の人は各〳〵其家に浴室を持居れども夫れすらも日本人の如く頻りには浴せざる方あり是其時候の熱する時節少なきにも由るあるべけれども又た一には家内の部屋〳〵の便利よきが故ある

べし余等の如きアセフ者あても彼地に在るとき毎朝其部屋の中に備へある顔洗鉢にて毎朝〳〵全體を水或は湯にて拭清め然る後に衣服を着けたりしとなア是れ己の寢部屋に他人の勝手に立入り難く又他人に見透かさるゝの憂もあく部屋の中に恰も人〳〵の一城廓の如く之に加ふるに其部屋内あり水鉢、顔洗鉢、始め一通り手拭迄夫〳〵綺麗に整へ備へあるが故に何人も通例に毎朝起ると直に遠慮なく其全身を拭清め然る後其服を着るとあり且其服も日本の服の如く藍あゝ身につくべき憂おきか上に總て清潔なる白の下着を用ふる事あれば身体の汚るゝ少なとあり余等の如きも彼地にあれば日本に在る時の如く屢々浴せすとも清しの事なり

西洋諸國にては人の肌膚を露にすとて一寸にても非常なる耻辱の如くあり居れり斯く行儀正しきが故に其部屋と云ひ湯屋と云ひ全體を拭清めるに決して他人に見られざる樣に拵へあるとなり左れは暫時の間ながら彼地の風俗の中に在りて日本に歸り來り會〻浴室に導かれナガシ抔と唱へ下男が裸体にて出で來り此方も亦裸体にて垢を流し貰ふあゝと何か變なる心持もしたれし因て察するに外國人などの目にて我國の浴室の有樣を見ばさぞ打驚くとなるべき左り乍ら倫敦の如きも以前は皆入込ありし者の由ありしに政府より規則を出し

遂に今日の如くなりしと云へば唯だ彼國は我國より少し捗取り早きのみにて其初めに累相似たる者ありしあり

英國にては餘り其類なけれども佛國にてはフリクシヨンと稱へ別に價を拂へば垢擦の小使ありて垢を落し呉るゝと稱や日本の風と相似たり左れば日本のナガシと謂へる者も亦一種の贅澤法と云ふべし

國〻に因ては湯屋に髪床の附き居る者鮮なからぬ右は甚だ便利なる仕組なり

英國の湯屋にも湯浴場の外に水浴場を設けある處も甚だ鮮おからぬ此水浴場に綺麗なる石或は煉物、煉瓦等にて造りたる大なる池と云ふべき者にて其廣袤は十五間乃至二十間四方の者も少おからぬ是に清水を湛へ其深さも殆ど人の丈程あり夏分に青年の若者抔に此水浴場を泳ぎの稽古場とおして樂み慰む事なり左れば此水浴場に無論入込あり然れとも裸体あがらも各〻其腰部を確と包まし必べき腰布備へあり入浴者に之を纏ふて這入るあり又場所に由ては此地の清水常に新陳交代するの仕掛ある者あり

右の水浴場は男子のみあらず婦人の爲めにも之を設けある者あり其場所に婦人のみの專有に属し男子は無論立入ることも出さず

●問　パノラマと稱する一種の展畫之れある由承知せり是の趣之何樣のものゝよや

●答　パノラマハ先つ日本のノゾキ又之カラクリと申す處よりて其大体は廣き場中を圓く仕切り其圓形ありに何處を繼目と分らぬ樣に大なる續き畫を以て建て廻しあり見物人ハ其中央にありて之を周覽するとあり其見物人の周覽すべき場所と繪との間之匂欄を以て畫と平行線を仕切りあり早く云ハヽ蛇ノ眼を掘さたるか如し中央の白き處は見物人の立つ場所にて黒輪の外邊は即ち畫の建て廻しある處あり而して其黒環の環之見物人と畫とを隔てたる空間あり此のパノラマの畫は或ハ山水或之都邑等樣々あれとも大抵自國勝利の戰爭を繪きたるゝ多きに居れり則ち伯林にて名高きはセダン（普佛大戰爭の時那破翁三世が討竭きて遂に降を乞ひたる所の地）戰爭國のパノラマなるの類あり此のパノラマに就て目を驚かすハ其繪き方如何にも眞に迫り例へ之一とつの草叢を繪きあるに半分之畫にて其半分は畫と續けて眞物の草を叢へ在るあれとも何處迄か眞物にして何處迄か畫なるや見界付すゝ兵卒の打棄てゐる破れ帽子、空丸、等畫中にも有れハ其前に眞物も散亂させあれ共是亦視紛ふ計りなり畫の高さと其大小あより不同あれ共通例先つ三四間内外ハ有へし而して中央の見物人の場處之凡そ一間許りの畫の裾より高く築き上げあり其間之ナダラにあり居りて道あ

ゝ草叢あり其他土石花木一切の景色都て前面の畫と續けて眞物を以て拵らへあり則ち是ゝ由りて見物人の目を迷ハせ既れか畫既れか眞物あるを想ふまゝにさしむるの趣向あり流石之何事何物にも理學の入込み居る世界だけゐ顔料の使ひ方さへ斯く進きて咫尺の中に居り乍ら畫と眞物とを視まがふ程にあらしむるは感心の次第あり顔料の次に人の眼を迷ハす元素は其遠近の釣合の加何にも巧みある事あり例へは前面ハ一望の青海原にて山影模糊とし之大船巨船之すにも盈たぬ計りに見ゆる遠景ある處へ最近の濱邊に一幹の喬木を無遠慮に高く太く繪きありて其枝々の葉ハ歷々數ふへき程に分明あり此の釣合に由りて前面の遠景は眞に千里際なきに如くに想ハるゝあり又第三に人の眼を迷ハす本之其光線のとり方の甚た巧みなる事あり見物人の頭の上之一面に圓き青幕の天井を以て蓋ひあり此の青幕は畫の際より幾尺か手前にて絶れ居ケ此の間にとり光線を容るゝ趣向あり而て其天井の端之亦畫の頂きよりも幾尺か幾寸か下げありて見物人の眼に之畫は何處にて盡てたるやを知らさらしむ斯く前面を望めは望む程明かるき事之愈々明るくして且つ盡てし無迄に見ゆるか故見物人ハ自然眞景を視る心地する筈の譯あり何となれは若し此の天井にして何か別段の形あり別段の色ある者ならしめ又た是と畫との界判然と分明にあり居らしめ之其比較にて忽ち其

畫全体の畫たるを暴露すへけれとあり

パノラマ館の内よりて右の大畫の外よ又た幾多の小畫を觀する樣なしあるか多し是て一ト切

宛の平畫あて壁畫を觀ると同樣あり亦た鏡のなきカラクロを觀ると同樣なり又たパノラマ

と通稱するは多く右の圓く建て廻てしたる大畫を云ふとあれとも其中よは眞よ日本のノヅ

キ同樣幾個の平畫を鏡よてノヅキ觀する樣よせる分もあり

巴里伯林等至る所一都府中よは必す幾個かのパノラマ館あるう通例なるよ倫敦よてハ割合

よ至て希れあり如何なる故よや相分らされとも或ハ倫敦は仕事所あて游ひ所ゐ非るか故歟

く不風流あるありと云へる說をありさ

パノラマの大畫て同ヒ畫中にても亦た別派のものよて猶は日本の舞臺畫、書割、の加く其の

專門家よ非されて尋常畫工ゐて出來難き由あり左をあるへしと思ハる

問畫家ゝにハ日本の加く毎朝八百屋あどの來ることあり

答 然り此の事て少しも日本と異らさ出入の八百屋毎朝十時より十二時迄の頃よ中以下

の家をばソレ〳〵用聞きよ廻るとよて其店の大小よ應し各々皆ゐ小さある車を持ち居りて

よ青物、菓物、の類を積み之を馬に牽かせて行くとあり又牛肉屋の加きも毎日其の得意先を

廻ると八百屋と同樣あり牛肉屋が牛肉を盛りたる種て一種の板皿にて板の中を細長く操て

取り盃の加くあし其四角ある角々よて把手の加き者を拵へあり又八百屋の方よて青物を運

ぶにて日本と同樣の笊を用ふるとあるが世人の知る加く彼の地よは一切竹と云ふものあけ

れは余等も最初ハ何物よてザルを編を造るやと思ひ居たりしよヨク〳〵調べ見れば皆ゐ小

さき河柳の心を以て造りたるものなり則ち日本よて柳行李よ造る材料の柳の枝を以て日本

の竹籠の如く編たるものあり唯た余等の目よ最も羨ましきハ何事ゐも皆ゐ馬の力を用ゐ

八百屋よても牛肉屋よても苟も得意先を廻る程の者あらんよは其荷車を馬よ牽かせ居らさ

る者稀れあて其馬を用ひ得さる程の者は驢馬と用ひて其荷物を牽かせ居るも尠なからさ若

し日本よて馬の飼料よ入費あしと驢ゝは費先て驢馬あてとも用ひたをを用ふるだけよ

ても大よ人力を幣くるとあるべきなり

又牛肉の事よ付て思ひ出せる一事あて一日余等の下宿屋の使男が「日本よてハ牛肉のとを

何と申すや」と問ひしゆゑ「然らハ牛のとを何と申すや」と尋ねしゆ

ゑ「矢張り牛と云ふあり」と答へしよ使男て大ゐを笑ひ又た余等よ向ゐ「羊のとて何と申

し羊肉のとて何と申すや」と尋るかゆゑよ余等て復た「亦れも羊なり」と答へしよ復た大ゐ

打ち笑ひ「偖て之日本の婦人は牛肉のことを牛と云ひ羊肉のことを羊と云はるゝにや餘り婦人には似合しからぬとあり英國にて御存じの如く牛肉のことをばビーフと云ふ生きたる牛のことをばオックスンとかカウとゝ云ふあり又生きたる羊をハシープと呼ふも羊の肉のことをばモットンと呼ふ故に甚だ優しく聞ゆるとあるは生きたる羊又は牛と其肉との稱へ〻同じことにして婦人方が之を稱ふるよりも亦た牛を食ひ羊を食る抔とは如何よりも下品よりも荒くれておかしく候之さや何とかして生きたる躰と肉とハ別々の名を致さゞては婦人方之嫌かを之を詞に發するを迷惑に思はるゝあらん」と云へれて考へれば如何さま英國にては牛羊と其肉を之名を別にし稱へを異にするがも名に幾何か優しく品よく聞ゆる場合あり我國も行く〳〵之定めて兩者の間に相應ある別名を生ずるとあも立至るべき歟

去りながら他の西洋諸國の中には生きゐる牛羊と其肉との名を同しくし居る處も隨分之あきゐ非ずとのことあれば右ハ日本のみ獨り優しろらさる下品の詞を用ゆと之云ひ難きあり然れとも若し生きたる牛羊と其肉と別々の名を稱ふると出來得べくんば之を殊にするこそ然るべきとと思へる如何あも優しき婦人の口より牛を食べる羊と言し抔と之少し不似合あるとゝもあるが如し

問　彼地競馬の有樣ハ如何

答　英國人が非常に競爭を好ミ或は舟或ハ馬、其他、珠拋、クリケット、等の競爭會を開く事之殆んど絶へ間なき程の事なるが競馬にて英國第一等の大賭はダルヒーレースと稱あへイフツムと云へる處に一年一度催ふす者を以て第一等とす同處は倫敦より汽車にて一時間内外の距離あり又其時節之毎年六月上旬の頃あやと覺も英國の五六月之恰を日本の三四月の時節にて郊外に遊歩するに最上の好時節あり然れば特に此時節を擇みたる者と見も先づ右の競馬所の地形より云へゝ英國の他の部分と同じく渺々たる原野にして唯た處々に丘岡の陵夷起伏せるあるのみにて先つ一面に平地と云ふを可あり

偖其競馬所の周圍の廣袤は凡そ三四里四方もあるべく全体に芝原の如く細やかなる嫩草生茂りて僅か種々の樹木の其間に散點せるあるのミなり此廣野の中に一二里の長さある環さ線を畫き此環線を以て競馬の馬道とあ玄たる者にて見物人の馬道に亂入せざる樣内外両側に手摺樣の者を設けあり而して其手摺より内の空地を見物人の遊ぶ場あて種〻樣〻の見せ物デントなどを張りて店を連ね實に賑やかなると夥し其環線の側外の一部分にて一の大なる建物ありて此處にて競馬の節皇族貴族抔の棧敷をとる者とし其建物の左右に傍ふて見物

人ゝ貸し渡す爲ゝ數百間棧敷をかけ渡しあり棧敷の体は下より上へ段々ゝ腰掛る樣ゝ階級を造り其數凡そ二三十段もあるべしと覺ゆ此大競馬ゝ四五日打續くゝて其間毎日〳〵見物人は右の棧敷は勿論其他馬道の外側ゝ傍ふてヒシ〳〵と込合ひ居れり通例の處ゝて一人前の棧敷代は壹圓内外ありしと覺も尤も其處ゝとりて種々の高下ゝあるべし又此棧敷と馬道との間の空地ゝゝ賭札を賣る者充滿し其組合の符調と馬の名前等を番附ゝし賭札を見物人ゝ賣附けるゝあり其法ゝ見物人惣体と賣人一人との勝負の者もあり其他の仕組もあり又見物人同士の賭もあるへくなか〳〵ゝ混雜あるゝあり又貴族金滿家抔の豪奢を競ふ遂中ゝ幾十万兩も賭け物にする如き馬鹿者もあれば今日ゝ何百万兩の人の出逢ふ日なりゝとて平人ゝ物語る事あり又此賭ゝ行けば裸体で歸るゝと云ふ諺のある程の事あり

余等の見たる中ゝて此の環線の全長を競馬の駈けるゝとゝ僅か一二回にて其他は皆ゝ環線の三分の二或ゝ四分の二位の所ゝて勝負とあしたる事なり又馬を數匹揃へて一聲の合圖ゝ駈出す事は甚だ少なく馬も豫ねて競爭のゝとを知り居ると見ゝ逸りゝ逸りきりて馬を揃へて未だ合圖も懸けぬ中出しぬけゝ先ゝ飛出すを留めんとして止め能ゝず其儘ゝ駈出す者あり又既ゝ一四の馬か斯く飛出すを見る時ゝ他の馬も堪ゝ兼て二三四ゝ乘主の制するをも顧みも

彼ゝ伴ふて飛出すもあり然れば多くの馬が鼻を揃へて一齊ゝ飛出すゝ甚だ稀ある程に難き事と見も定めて此等の事は日本の競馬も同樣あるべし余等の如く何れの馬の勝敗をも唯たた冷眼ゝ眺め居る者の身ゝゝ何の興もあく肝腎の競馬よりも他の色々の見せ物慰み物か競馬所を廻つて興行せる者の方を面白しと覺る程の事なりき

此日ゝ賭をなして意外ゝ儲をなして歸るもあり又巨大の損失を蒙る者もある中なれば其人氣も荒く從つてスリ騙の類甚た夥し余等が競馬所より倫敦ゝ歸る混雜の滊車の中ゝて例の三枚骨牌（三枚骨牌を伏置き某の骨牌ゝ幾なりと暗射して勝負をなす者なり是の術ゝて旅人行客杯を欺く姑徒ゝ至て多き事ゝて餘程の田舍者ゝ非れゝ乘らぬなり）の仲間ゝ出逢ふたるゝあり然れども其節ゝ誰も引懸けらるゝ者あかりしゝ勿論滊石不愛想の英人なれば之を見向く者さへなく其儘ゝ彼の仲間は出て行きたりとく聞き合すゝ此日は往復の滊車中なりとゝは種々の事も出來する樣子なり

又倫敦より此競馬見物ゝ趣く者は滊車を用ゐも一種別仕立の馬車ゝて往く者多し定めて此は滊車抔の始まらざる以前ゝ倫敦より乘人の出懸けたる頃の有樣を今日まで存し居る者と見ゝ其馬車も通例の馬車とは違ひ倫敦ゝて田舍行ゝ用ゐる大なる長馬車なり之ゝ大勢乘込

とて日傘をさし喇叭など吹鳴らして威勢よく馳せるとなり其喇叭は多くは厚紙拔よて製たる者よて競馬所の近處の露店なんどよて之を賣り居れり恰も日本の開帳の時厚紙拔よて可笑なる面を造り或て喇叭拔造りて此を見物人よ賣ると善く相似たる有樣なり歸途よて男女共多く此喇叭を買ふ之を車中よて吹鳴らしつゝ復ひ威勢よく返るとなり最も中よて眞の喇叭あるやも知れざども先づ見うけたる所よては此の如し田舍路を丈夫なる大馬車よて往來するとなれば大抵車中の人は砂塵よて其肩の邊眞白よ見ゆるも鮮からぬ左りながら何か勇ましい氣よ思はるゝ者なり汽車のなき時代こそ兎も角も今日は一時間經つか經たぬよ通ふ鐵道の有者を矢張以前の如き大馬車を仕立てゝ競馬ゐ趣くゐんどは誠ゐ面白き人情なり英國の競馬て恰も日本の祭禮と云ふべき樣子あり彼地の人て全体の職務よ勉強すると也日本人より劇しき代りよ又種々ある慰て物を設け餘念なく心を樂ましむるとも日本人より劇しきが如し

●問　其のダルビーレースと稱する大競馬の時其近邊の賑やかさの模樣は如何

●答　前よ記そる如く競馬所周圍のみならぬ其近邊の野原一体に種々樣々の觀せ物慰み物あて其中よて日本の開張あどの時よ之れおき種類ある者もあり又同樣ある者をあり今ゆ彼

地の人の如何なる慰をあそやを下よ畧記すべし

第一ラムチ氷水とも名づくべき種類の店澤山あり又慰み物の中よハ獸獵の眞似事ありて其仕方は見物人の所より十四五間隔てゝ一本の柱を立て其上よ長さ二三間なる十文字の棒を置き其棒の四隅よ人造の鳥をつけ鳥の背よガラスの空球を結びつけあり其持主が綱を引く時て柱の上ある十文字の棒はキリ〳〵と廻はり隨て其端に附きたる鳥て恰も自ら翔けるが如くよ其柱の周圍を飛ひ廻いるを見物人は此方より狙ひ射るとなり若し射中つれば鳥背のガラス球ヒツと碎け落つるあり日本を出しより久しく銃を手よせさりしかは餘り左右ゐ人のなき折を幸ひ一發之を試みたりとよ其製藥の强きよて驚きたり殆んど是が爲よ肩を突き仰けぶるゝ程の心地したり蓋し彼地の人は一体よ强藥を撃つ者と見へ斯る慰の射的ゐさへ此の如き强藥を裝むるて驚くへきとあり又此外よ恰も日本の室内射的場の如く小銃よて遠方の棒よ垂下げあるガラス德利を撃たしむる處あり此れも見物人の手元よて十間ばかり隔て大なる柱を立て此よ長二間計の棹を横一文字よ五ツ六ツも段々に結びつけ其一ツの棒毎ゐビールの空德利の二十ばかりも垂下げあり斯く棹毎よ二十宛もある事あれば其數て至て夥しく一寸眺むれべビール德利が竹棹よなりたる如き有樣なり此ビール德利を目懸け射撃

するとして銃丸の中たる時ハ美事ゐ其の空德利を立割りホロリ〳〵と落とすとあれバ皆ら
ぬとあがら甚だ面白く見ゆるあり又此外ゑ多き者ゑ拋球なり其法は十間ばかり隔てゝ杭の
上に木丸を載せ置き之を此方ゑり球を投て撃落す事なり是ゑ最も容易き者と見ゐて處々ゑ
此設あり其他三四間隔てゝ可笑ある人形を造り置き此方より木の丸ゑて其人形を敲き壞し
撃落す樣ゐ仕懸ゑて先年日本ゑて行ゑれし玉を打落す趣向の元祖ゐるべしと思ゑる又此ゑ
ゑ弓の慰みもあり是も見物人の手元より十間内外の所ゑ一坪ばかりある大的を置き此方ゑ
りして射中るとあり其弓ゑ一種の弓ゑて大さは殆ど日本の弓程なり但し少し短き樣ゐ思はは
れたり矢も畧等しきなれども竹ゑあらせたて木なりと覺せ去りおから其の餘り重ゐ過ぎす
輕ゐ過ぎさる工合如何ゑも竹同樣ゐ善く出來居れり其群衆どもが我こそ命中せんと競ふて
的を射る景色を見るゐ恰も日本人が揚弓を射る如く右の眼ゑ右の手を着け狙ひ居る者多し
左れば一本迚も十分の力を得て的迄直行し得る矢は少く多くは其前ゑて墜が故ゐ之を避
けんため又ゑ度をうけて射るを以て其矢はヒュウと虹寛形ゑ飛行く者のみゐて餘り可笑さ
ゑ堪ねざりければ詮なき事とは思ひしかども其所ゑ立寄りて二ゝ手三手射たりしゑ幸ひゑ
して三四本は彼大的ゑ容易く中りければ傍の者どもゑて頻りゑ感賞せられたるは我あから

可笑く覺ね其儘其所を立去りしが長居せば必熟練の尾の露はれんとを恐れてあり昔ゑ英人
は非常ゑ弓術ゑ巧ゐて し者ゐて大陸諸國の兵と戰ふ時常に弓を以て敵を敗りし程の名手多
うりしゐり故に英國の弓ば長さも稍や日本の弓ゑ近かく他の西洋諸國の弓ゑりて大ゐりし
を用ゐたるゐて左れば其以前ゑ那須與市ゑ比しき手鍛練も彼國ゑは多かりしなるべきゑ理
料の擧開け極めて微力ある者も能く數百歩の遠さゑ鏃魂を飛ばせて敵を殪すの社會とゐり
しより當來の長技を失ゐ今日ゐて ゑ慰みゑ的を射るさへ不器用千萬ある者のととなゐて世
の變遷も亦甚しきゐあらずや

此大競馬ゐ趣きし時思ゑぬ慈悲をゐしたるとゐりき前ゐ記したる杭の上ゑ木丸を載せ
て之を撃落さしめて金を取るの仕組をゐす者ゑ概ね極て貧賤ゑて且つ十五六の子供の之を
興行し居る者多し然るゑ已等の商賣上の事ゑり爭起りけるゐや十五六の子供兩人摑合を始
め互ゐ顔とも云はず頭とも云ゑず突合組合各々面部ゐ大疵を負ひ血まふれとゐりて喧嘩せ
しが遂ゑ一方は撃縮ゐれて其處ゑ悶絶せしゑ一方ゑ倘ほも容赦なく打擲する有樣ゐり先
刻ゑり群集して眺め居る見物人の中ゑり今にも兩人を引分るかと思居たるゑ一人も進み出
つる者なく唯面白氣ゑ眺め居る者のみあれい餘り一方の殘酷を見るゐ忍ず其邊ゑ歩み寄り

て懐中より二三志の金を取出を是を一方の勝たる者に與へ余が此金を與るが故に汝等の爭ひを止むべし若し余が命を用ゐぞんと巡査を遣れ來るべしと言ひしよて其爭ひ辛じて息たりしが余等の爭を止むると間もなく群集中より一二の老人の身元よく見もる人〻出來りて余等と共に其爭を止めたるとありしが既に其時一方は半死半生の体なりき其後は如何ありしや余等も打棄て、歸路に着きたりし

●問　西洋諸國の新聞紙の体裁と互に相同じきや又日本の新聞紙との異同い如何

●答　英、佛、伊、墨等の國々にて其体裁の同きあり又異なるもあり今其諸國の相異なる箇條一二を畧述せんに英國にては雜誌類の外毎日發兌の新聞紙にては十の八九までは概して小説を掲くる者あし然るに佛國伊國に至れば其國に大勢力ある一二の新聞紙を始めとし其以下に至るまで日々發兌の者にも皆に小説を載せざる者なし是れ英佛伊の著るしき相異る所以なり英佛共に一二を爭ふ國柄なるに如何にしてか新聞紙に斯其相違あるやは甚だ解し難き事なり去りながら余等の想像にては英人は全体に不風流なると且つ其國非常に繁昌富て物事に忙はしきとの爲めに其新聞紙上に慰みに類する閑散の事柄は幾んど掲げかねるの風をおしたる者と覺ゆ之に反して佛國の如きは文學の風韻あると英國に優れるが上に

歐洲第一繁華の地とは云ひながら凡百の業務の忙はしく多端なるとは稍〻英國に一歩を讓るの有樣なきにあらざ此等の異同より兩國の新聞紙に此の如き相違を生じたる者にあらざやと思はる又伊國と英佛二諸との新聞紙の相違を云ばゞ其新聞紙に大抵小説を掲ぐると佛國西と同樣なれども唯佛蘭西に異なる所は併國に毎日發兌の繪入新聞紙ある一事なり英佛二國にては雜誌類には繪入のものあれども毎日發兌の繪入新聞紙之れなしと云ふて可あり英國に勿論の事なれども佛國にても然るべき勢力ある毎日發兌の繪入新聞は見懸けざりき樣に覺ゆるあり伊國の分にても固より毎日發兌の事あれば其畫圖などに先づ高尚ならざる方にて其畫圖の精巧に至つては毎週發兌の雜誌の方に路を取らるゝと云の有樣あり蓋し伊國は英佛二國に比すれば業務も多端ならぎして一体の事柄に閑暇多く又た畫國なる故に人心も稍や都び居るようして遂に此の如き新聞紙の体裁を生せし者ありと見も我報知新聞の如きも半ば佛國伊國の新聞の体に同じかゝしめたる者にして日本の畫國なると其國人に文學の風韻あると事務事業の英、米、二國の如く繁忙多端ならぎして記載ぶべき事柄の世間に少きとを察し寧ろ佛、伊、二國の体を変もる方然るへしとの相談にて遂に今日のごとき体裁をばなせし事なり然れば若英、米、の新聞のみを見て世界にて新聞と云へる者は皆に此の如

しと思ひ其方に反する者と新聞の仲間外をなし居る如く考へらるゝ者あらんには是れ大に誤れる者と云ふべし

又記事の上より云ふも英、佛、諸國の新聞の特に日本に異なる所の點と其紙面に外國種の廣告多くして又世間の耳目の是に集まるの一事なり尤も歐洲諸國は汽車電信の便宜の快利として彼我の交通非常に容易頻繁なれば各國間の出來事と皆其利害甚だ已れに切實あるの故に由る事あれども全体に讀者の眼界甚だ廣くして新聞も亦之に應じ世界の事を泄さゞ一纏めに其紙上に載せると云ふの舊弊常に見て居れり左れと彼の新聞には外國のことも常に殆ど內國の事の如く讀者に感せしむるの便利あるあり然るに日本には日本以外の事ならんにと最早新聞の種の中には入らざる者の如く思ひ等閑に讀過する者鮮からゞ是い全く外國交通の日尚は淺きが故なるへけれども行く〳〵と我日本の新聞も世界中の千一分の一にも當らざる小さき國內の事のみに心を留めゞして眞正の世界のことを紙面に載せ大切なる大体の事に目を注ける樣自然に成行くべきなり又た斯く成行かねばならぬ必要ある者なと何となれば今は英領濠洲に於て石決明板屋貝の柱等の產出盛大に赴かば支那の得意は悉く之に奪れて我國の取引は立どころに衰ふべし又亞米利加のテキサス近傍にて盛力

し居る桑の景況次第にては我國の生糸も大なる響を蒙るべし日耳曼地方にて麻さビールの製造場を生せば我國の商賈人は爲に無數の損得を受くるに至るべし一事一物我國の相手と外國に在るの世の中に立ちながら外國時々の模樣を知らゞして事の濟むべき道理と決してあられまじき譯なり將た斯る經濟上の問題のみならゞ學術にあれ兵事にあれ何一つとして外國の事變に差響を受けざる者のあらざる時節に新聞紙上にと唯た我が國內の事柄丈けを載せて獨り是れのみ眺め居ると實に不覺の極と云ふべし然れと我邦の新聞紙い是非一度は日本國內の事柄のみを寫し出す小鏡にはあらずして全世界の事變を洩れなく寫し出す一面の大鏡とあるを期せざるべからゞ目下日本の新聞紙と英佛の新聞紙とを比較し重なる相違の點を求めは先づ茲に次の如と云ふも可なり

問　伊太利に御越しにて風俗始め其他英國と相違ある箇條は意外の者なりや

答　先づ人種より總ての事に至るまで英國と異る者の眼に觸るゝこと多き中に日常の細事にて云へゝ先つパンの形狀の違ひ居る事第一に目に留まれり尤も佛國にても英國風や佛國風のパンも之ある事あり少通例多く食卓に現はるゝこと特に佛國に限りたる一種のパンありその形い小指或い食指位の大さにて長さ一尺ばかりの棒の如くおしゐる者にして之を五六

本一把とあし英、佛、等にて通常のパンを置く如く客の左方より持來り置く事なり此異体なるパンの樣子甚だ珍らしく覺へたり英人佛人等と談話して言伊國の事に及ぶときい直ちに此のパンの事を語り出たると多し然れば右い余等のみにあらず英佛の人あどにも珍らしき事と見も此小枝の如きパンをばく〳〵と少し宛食らふ事なり又た其次に伊國製の葡萄酒を盛りたる德利の甚た異体あるとなり其形に恰も日本の一輪挿ある花瓶の底の方丸く口の方細長く直立せる者と喩ば相似たる姿ゐして但た其物質に勿論ガラスにて之を造れり其ガラスに極めて脆手のものにして粹れ易きが故にや鐵の類を以て奇麗に此德利の口より以下の全身を卷き掩ひ德利の底に其の倒れざる樣同しく藁にて圓座の如き物を造り添あり其の全身を藁にて卷き立てたる体に恰も薩摩の泡盛德利の如く甚古雅に見もる物にて如何に英佛抔にて斯る古風ある德利をば見懸る事い出來さるあり右の德利の大さい二三合入りの者と見も又其の他食料より云はゝ同國にて彼のマカロニーと稱ふる一種の素麺（温飩と云ふも可あるべし）の夥しき一事なり此のマロカニーに恰も日本の温飩素麺と同樣あ姿にて又物質さへ同樣ある如く見も但し其風味ゐ至て日本の温飩素麺よりは少しく味の濃かあるかと覺ゆ蓋し此に温飩粉の外ゐ又何ら一種の交せ物にてもあるやと思ふる麺

例他の諸國の料理にて時々用ゐる所のマカロニーに重も伊國より輸入せる者なり則ち伊國に其本家だけありて其國人の此素麺を嗜むと非常なるよい驚きたり朝晩の食卓に此マカロニーの出でゐらざる事い少き程にて初めの中こそ珍らしく賞翫したれ後々い少しく難澁そる計りに頻々現われ出來れり右のマカロニーの太とき者ゐ至ては恰も日本の温飩の大さにて唯た其異ある所に管の如く中心には穴の明き居る一事あり又素麺の如く穴無くして線の細ゐき者もあり黄色赤色等の色を着けある者もあり伊國の小都邑を通行する時に此の種々のマカロニーの澤山店頭に並せあるを見るとなり同國より之を輸出する額に實に夥しき者にて一昨年伊國にコレラ病の流行せし時英佛諸國にて此のマカロニーに伊國よりコレラを持込の種子ありとて其注文を減少したる爲め伊國の製造者仲間に大なる響をなりたりとの評判さへありし程の事あり此外飲食の上にての行儀に都べて皆ゐ英佛抔と喩へ同樣にて著しき相違の所も見されども唯ゐ其料理は全体に粘厚き方にて何品に限らず油濃き者多く又其の油を用ゐる事も非常に多き樣あり同國ゐは多く撒攪樹を植付け撒攪油を一の産物となすとなれは從て其油を多く用る事なりと云へり英國ゐ比すれば佛國の料理は概して重くれたる旨味多き方なるが伊國の料理い佛國を超へて更らに尚一層重くれて油強しと云ふべ

し全体よりして油強き方より順序を立れば伊國の料理を第一とし其次に佛國其次は曼國其次に英國なりと云ふべし又淡泊にして油少なき方より云へば此順序を逆さまにして英國を第一と爲すも可なり尤も何れの國にも重なる料理屋に佛國を學ぶ事にて其料理人小使さへも出稼の佛人を雇ひ入るゝ者多けれども右に全体に其國の料理を區別したる者と知るべし

●問　日本にて洋服を着たる人を見るに其外套（英語にてチーバー、コート）の形に種々にして或に何も飾りなくして其長さ膝切りのものあり或に襟、袖口、等に毛皮抔を飾り付け其丈も少し長きあり或は又た全躰の地の厚くして裾に足の踵に届く程長く腰の邊りに帶、紐革の類を着けて引き締めるやうに爲し居るものあり右に彼地も同樣なりや如何

●答　外套の形に國々にて種々流行の相違ある樣に見受けたり先づ英國倫敦を以て申さば此の二三年は襟、袖口、共に少しも飾りなく又其丈も膝切り有るか無しのものを用ふると通例にして決して他の形のものなし故に偶〻余等が寒氣を防ぐ爲めに異躰あるものを造りて之を着けて外出する時に何か頻りに人に見らるゝ如き心地するに多かりしなり尤も稍れば他の形の外套を着け居る者も見掛るに乍ら能〻注意するに其骨格容貌多くは他國の人にして

英人に非ざれば近來兩三年倫敦にて通例の外套の形に先づ前記せる如く極めて飾りなきにあらずとしたるものにて其の流行も餘り多く變化なりたるに少しと申すことを英人より承りたり

倫敦に日本に比すれば寒の季節短くして冬の季節長く全半ヶ年は唯だ寒き氣候にて其餘の半ヶ年を春、夏、秋に分ち居る有樣なれば外套を着けざる季節は甚だ少く少し寒を恐るゝの人に一年中僅か二三ヶ月を除く外八九ヶ月間に常に之を着け居るとあり斯く冬の長き代りに倫敦に常に霧深くして歐洲大陸の諸國に比すれば寒氣は稍や輕き方なれども先づ東京の寒氣より強て甚だしとは覺へざる程なり英人の氣丈なるとは寒中外出するにも一向に襟巻を用ふる者なく凜々たる寒風の中に襟に飾りもなき外套を着け乍ら喉の邊より頬顎をむき出しにしさっさと歩き居るとあり然れば此間に立ち獨り襟巻抔を爲さる時は何ら人より目を注けて可笑しく思はるゝの有樣なきに非ず又婦人の外に襟巻を爲す者なきに男子の獨り之を爲し居るも何やら元氣なく思はれんかと恥かしさに余等が如きも寒中にも大抵頸の邊りをばむき出しにて外出せるとなり男子が襟巻を爲すに屏弱げに見ゆるもあるを避るに理窟あるとなれども婦人にソレよりも及ぶ間敷と思いるゝに中以下の婦人は多分外出するに襟巻を

用ひもして其の鼻端を眞赤よしながらサッサと歩き居る者頗る多し尤も年老ひたる婦人と多く襟巻を爲し居れり然れども若き婦人と一い其品を作て襟巻を爲さゞるとと見ゆるなり若き男子の襟巻を爲さゝるも一と此の邊の趣味より生せるよりもあるべき歟又老年の人は男子と雖も襟巻を爲し居る者を稀よと見受けれどソレすらも通例と小さき襟巻を用ふるとあて日本人の用ふる如き大なる物と極て罕れなり但し右よ通る所は都て中以下を云ふとよて上等の人ゝと出入共に手馬車を用ひ居るとなれば車の四方をさへ締ひれば寒氣を恐るゝよも及ばもし然れば是等と格別のとと知るべし去り乍ら極寒ならぬ時公園抔を驅り行く人を見るよ母衣を開き或い箱馬車の戸を開きたる儘あて寒風を吹かれ乍ら頸の邊を暴ちし居る人を甚だ多きとなり之を概するよ英人と平生より行儀至て嚴しく幼少の時とり暑寒よも其身躰を崩さゞる樣方正なる行儀の範圍中よ生育され遂よ其の性を成せる者と云て可なり唱本の社會の何事を不極りよして士君子淑女共よ幼少とり暑寒を堪ゆる行儀の規則なく其身躰を柔弱よ爲し居る者と相比すれば實よ大なる相違あるよ思ひ付きたり

又夏分傘をさし日を除ける之婦人のみよ限るとて婦人なれば歩行するあ皆な蝙蝠傘を開き居れり然れども市街中よて如何よ暑ければとて決して男子の傘を開き居るものあきい不

思議なり既れも皆な照り付けの馬車抔を乘て作ら平氣よ澄まし居る者多し余等の如きも既よ斯る國風中に交はれば獨り傘を開くも何とやら柔弱らしく其儘よて歩行すると多し尤も自本の如く暑氣は甚だしからぬとあれば先づ耐へ難き程よい非ゞ去り作ら余等の身に取て い隨分傘を開きさく思ふ時も甚だ少なからぬとなり曾て此の事も英國よて聞合せたるよ傘の一事は左して禮法の中よい入れ居らぬ積りよて少し田舍あ旅行する時抔と英人も皆な攜ゆゞ傘を開きて日を避くるとあり左迄規則嚴びしき譯よも非ゞとて笑ひ居たり去り作ら偏敎市街中よては實よ申合せたる如く殆んど一人の傘を開きて日を避くる者なし

又男子の外套の色合い通例無地よて縞物と少なし其無地の色は樣々あれども先づ焦げ茶、溝鼠、黒抔も少なからゞ唯た赤い勿論溝鼠責類と甚た少きとあり去り作ら右は唯た市街を往來するの時の外套を云ふとよて少し旅行よても爲さんとし田舍抔よ赴く時よい縞物抔の長く腿よ至る程の外套を用ふる者少からゞ故に流行の外套と平日の外套とは全く其趣きを異よすと云て可あり又巴里抔の二三年の外套の有樣を申せば種々の流行もあるとあらんが先づ通例と前記せる英國と同樣よて二三年の處と襟、袖口、よ飾りあくスラリとしある短き物多し一ト口よ云ゐば英國の外套の都びて上品なる方を用ゆと云て可あり去り作ら同地に

とは襟、袖口、など毛皮抔を用ひたるを着けし人をも間々見受る樣に覺ゆ是れより北のかた日耳曼抔に至れば寒中に用ふる外套は特別に長く厚く英國とは全く其趣きを異にせり是れ寒氣の殊に甚だしきが故なるべし又魯國抔の樣を聞き合すれば寒氣強きがゆゑに外套の制も亦之に應ぜる樣に益々厚く長くして毛皮抔を多く用ひ居れりと云ふ然れば先づ氣候の寒温に因て國々の相違ありと云て可あり

●問　伊太利の衣服家屋等に付異なりたる風俗を承ること度し

●答　衣服などの有樣より云はゝ伊國の首府なる羅馬或は是に次べきフローレンス抔と格別あれども其の小都府に至れば衣服の風の甚だ面白き者多し先づ第一旅客の目に留まるは日本にて坊主合羽或は廻合羽とも名くべき合羽の裾は足の踵に届く程の長き者を着け右の腕を合羽の外の合せ目の處より出し其右なる長き裾をばパタリと左の肩に打掛け居る事恰も袈裟を斜に掛けたる如し則ち左の方の方と合羽の形ちゝまて一面に垂れて踵に至り右の方の右の腕を露こし之を斜に胸より左の肩に纏ひ居れり然して其頭に戴きたる緣の廣くして軟やかなる高き帽子の上を一の字形に中に折込みたる者あり（明治七八年頃まで日本にて少し流行せり必ず讀者に記憶せらるべし）此帽子を少し斜に打冠ふり故の長き廻合

羽を袈裟掛けに細長き卷煙草を薫らしつゝカップヒー店の門口の柱に斜に立居るこれ伊國田舍の若者の一寸意氣なる所と云ふべし余輩の眼より見れば恰も中世の歐羅巴に至りし心地して當時の歴史上の事どもを思ひ出さしむるの種とある者あり又西班牙抔も右の長き廻合羽と略同じき者を着け居る由なれば是の裝束こそ一体に其昔羅甸人種の國々に行はれたりし遺俗ありと見ゆ伊國の卷煙草は其丸さこそ英佛諸國のよりも甚だ細やかにて長きことこそ殆ど此に倍せり而して卷煙草の口元より中心に極小なる管の如き者を挿しあり是を扱きて吸ふ樣に爲したり全体に同國の烟草こそ甚だ強く辛き方の樣に覺ゆ

伊太利の諸小都府は殆ど日耳曼の諸小都府と同樣にて衣服帽子の有樣も種々樣々なり丸帽子を冠り居る者あり高帽子を冠り居る者あり誠に不極の有樣あり又羅馬の如き首府を以て云はゝ高帽子を冠り居る者こそ先づ身元ある人のみにて通例こそ種々の低き丸帽子を戴き居る者多し又倫敦などにてこそマンテル及びナッキこそ黑の色揃にてズボンのみ縞物を着け居るが通例にして先づ縞羅紗などこそ田舍行きなどに或こそ極打解けたる時かのみの外之を着ることなき羅馬などにてこそ縞羅紗の服を着けて往來し居る者も澤山に見懸けたり又人種上より云てゝ恰も英國に茶色の毛多く黑色の毛少なき割合程伊國にこそ黑色の毛ある者澤山にて赤茶色

の毛と先づ少なき方あり倫敦あたりて黒髪の日本人抔の背影を眺むれば著しく目立つ事あるが羅馬等よりては黒色の毛ある人多きが故ゐ日本人抔も左まで目立たざる樣の心地せり又其面貌を云へゞ伊國人は日本人あたりの風韻にて極く適する方よりて英人に比すれば佛人の顏とキユッと引締りて意氣なる方あるが佛人よりは比ぶれば伊人の方は尙一層引締りて意氣ゐ見もる者多し又其顏色い淡紅の者（英人の如し）鮮なく寧ろたゞ白き方あり

又家屋の有樣と一体より諸都府共に英佛二國ゐ比すれば古びたる方よりて其建築の模樣体裁は先づ似寄りたる者なり唯た英佛諸都府い中古の建築風より漸々より進歩して種々の材料物質を煉瓦より造り又た遠方のものをも隨意より運送し得る今日の事あれば昔しと木材を用ゐし所よりも今日い鉄或は石を用ゐると云ふ傾きよりて万事輕便より趣くと云へる勢なるより伊國の諸都府より至り見ればそれ迄より進歩し得ざりして是は尙ほ中古の建築風をなを居る者ありと思はしむるの有樣あり例へば屋根瓦の如きも尙石瓦を用ゐずして多く赤色の燒瓦の粗末なるを用ゐ且つ其屋根の勾排格好まで歟然中古の畫圖を見る如き心地せしむる事多し又中古の建物の其態より存しなる町々は場家の壁あたりの馬鹿げて厚く丈夫ゐると實ゐ人を驚かす程の事あり今日よりては不要の處ゐ下手念を入れて無用より物質を費やし使ふ事をば爲さざ諸事萬端

唯た其の入用ある處までより限りて切り詰め煎し詰めて都てキヨウより賢く出來するより昔し物は昔し物程無駄念を入れ無用れ場所に材物料質を費しゐるは何れの國も同樣ゐて則ち伊太利の諸都府よりては是より類する事共を夥しく其の建築上に見かけたり又昔しは其府内の市場ゐ用ゐたりし者と見え小都府の中ゐは必ず一二ヶ所大なる廣小路の如き空地あり處より因りて い現ゐ猶は府民が茲より集り色々の市を立て居るをも見受けたり又其府内の諸街路は概して狹隘ゐるか上例の如く悉く石疊よりあり故に車よりて馳する度毎に甚だ繁昌する事あり

伊國の諸都府よりて用ゐる定時馬車乘合馬車等と先づ通例佛國と同樣あり

●問　英國にて い日本にて稱する鳥屋の類之れありや

●答　鳥類を賣る店と鳥類專門の者もあり然れども通例は魚屋と鳥屋と兼帶なる店多し店の通例の處より は魚を並ぶべ置きて其上の方より鳥をブラ下げゐる者を通例とそ

●問　鳥の種類と如何

●答　第一より多き者は鷄第二と鴨第三い家鴈（者ひ立たる鴈日本よりはおし）の類あり右の諸鳥と何れも日本の物と同じとあがら鷄あたりの如きと大抵日本の者とりも幾分か大なる方多く先づ軍鷄と尋常の鷄との合の子位より見ゆ一羽の價と通例二三志の間と云て可なり（五

十錢より七十錢までの間）又鴨の類と四五志の間（一圓より一圓卅錢内外の處）として鶏も前記せる鶏と同樣にて日本の者より少し大なり京都邊よて畜ふ所の一種の大なる鴨とも更らよ大なる樣よ覺ゆる併し先づ鴨は通例日本の鴨と同樣よて稍や似寄りたり其外ゐ鶏鳥とか家雁との稱ふべき一種の大ある鳥あり其大さと殖んど鶏鳥よ同じき者少あからぞ左りながら其の毛色容子と總て野雁と同樣よて察するよ其初めは野雁ありし者を久しく畜飼ち其子孫が即ち今の家雁とありし者あるべち鶏鳥よは其嘴、鼻、の處ゐ凸肉ありて面を被り居る如く見ゆると通例あるよ右の家雁ゐと此の如き凸肉あく一切ヒシタヒと稱ふる野雁と善く相肖たゆ然れば其以前は野生の者を漸々畜ゑたて、一種の物となしたるとは疑無きが加し此等諸鳥の共進會、博覽會抔に赴て見物そるに右の家雁の種類よは實よ非常なる大物ありて其中よは首の眞中を手よて握り廻されぬ程よ大ある者多し又此家雁の外よ眞の鶏鳥をも賣り居れゆ又七面鳥をも賣居れり七面鳥抔と價甚た高き方あり日本よて云はゞ年始歳暮を兼ねたる祝日とも云ふべき夫の歳末のクリストマスの大祝日には何れの家も皆な右の家鴈、鶏鳥、を料理する事慣例あるが如く見ゆ故よ此頃よ至れば其價殖んど平常より四五割を引上ぐるあり又冬期よは野生の鴨を賣り居るも多く通例日本の鴨の種類に異あらぞ

又日本の者と全く異る鳥類あり即ち彼地ゐては（鶏）と云ふ總名を附し居る者種々あゆ如何ゐも之を類別すれゞ鶏の屬なれども其大小は色々よて同じからぞ日本の如く小さある鶏も稀よは見懸る事あゞ英和字書ゐんどにて鶏と云へる譯字を下しある彼地の鳥は鶏の屬中よて甚た大ある者なり即ち其の大さは殖んど雉子と鳩との間位ゐて其姿は先づ鶏ゐれども全体に逞しき者ゐゆ又其の毛色は黑みかゝりて赤き雞冠樣の如きものを戴き居る類もあり此等は日本よは無ふして彼地には多く人の好んで銃獵する所の者ゐゆ雉子、も多く鳥屋よ下がり居る者なるが此よも二種ゐゆて其一ハ日本の雉子と略は同樣ある者ゐり他の一種は日本の雉子よりも一層奇麗なる者よて先づ日本の山鳥と雉子との合の子の如く見ゆ其脊中は通例の雉子の如くゐして頭より胸までは黑けれども其の胸前より腹一面よかけては山鳥の如く金色の毛生たり（日本ゐ雉子は此胸より腹の邊は一面よ唯た黑き毛生たゆ）又此雉子の中ゐ白き首環の入り居る者ゐり此等も日本ゐては見かけざる一あり

●問　鳥類の風味ハ如何

●答　鶏、家鴈、等全体の家禽を云はゞ其の風味は無論淡泊なる方よて旨味なくシバ〳〵すると心持せゆ偶々日本人ゐどが打寄りて之を日本料理ゐ用ゐるよ常ゐ旨味少ゐしとの小言を

聞くあり右之番料の加何より出る者あるか或之西洋人が好で此淡泊なる所を賞翫する譯を
不乎兎角日本の料理に用ゐる時之何か旨味の足らぬ樣に覺ゆるあり因て余等之後々は日
本料理に斯る家禽を買入るを見合せ野生の鴨を買來て之を料理せし事あり人爲の働の加と
りし家禽類こそ色々の變化をも受けたるべけれ天然の儘の野生の者は日本と同じうるべし
と想像せしが果して其理窟と見へ眞鴨其他野生の鴨類は先づ日本の味を感じたる事あり
又鶉抔の加きも銃獵にて之を獲るに日本の如く天然の儘の山野に天然の儘に鳥の栖み居る
と之殆ど英國中通例の處にては之おきものと見へ銃獵の爲め別段に鳥の種を畜立る由あり
皇族、貴族、金滿家の加きと銘々已れの銃獵地面を所有し平生より其中に鶉、雉子、あんどの
類を畜立て置た獵時節に至て茲に出懸る事あり又其外に商賈の爲めに銃獵地面を所有し一
日何程との條約にて銃獵人に之を貸渡す者あり然れば前記せる雉子、鶉、の加きは皆日本の
加く純然たる野生の者にあらずして半之畜立てあるが加き姿あり然る故あるもある間數が鶉
なんどを日本風の燒鳥抔料理するに其味の淡泊にて旨味あき事殆んど鷄、家鴨、と同樣あり
蘇蘭の極北の地方或い愛蘭の邊鄙はいさ知のず通例の場所あらんかと英國中之殆んど開け
盡して加何あも鐵砲抔を携へ出懸けるも容易に鳥類と見當るまじと思はる、程の有樣あり

是れ一之其國の平野にして處々に少しの丘陵あるのみにて日本の如く險しき山岳少なく禽
獸の栖所多かゝざるが故あも出るべしと思ふる

●問　伊國羅馬府の有樣は加何

●答　羅馬は二千年來の古跡にて西史を讀む者の皆あ何とおく昔しなつかしく想ふ處あり
余等の加きも日本に在り去頃平素羅馬史を翻閲して古羅馬人が歐洲全土を一統を居たる時
の事あどを追念し其の摸樣と斯くあやしあらん抔と想像し居たると久去かりしかは一たび
吾脚を其境に着くるに及ていい實に懷古の情に耐へも余之フローレンスより夜汽車に乘込み
羅馬府を指して出發したりしあ未明にい既に羅馬府の近傍に驅せ着たり車中の小使が戸を
開て最早羅馬府に近づきたりとの聲に眠を驚かされ俄に衣服を更めて先つ汽車の窓より其
邊の景色を打眺めたる事のりしが此日は細雨霏々として降りしめり太と穩やかなる初夏の
天氣なりければ斯の煙霧蒼朦たる中に左まで險しらざる遠山の徐かにウヲれる波の加く
遥あ西北に横はるを見たり是れ即ち彼の古羅馬人と爭ふたるサビヲ人種の棲み去地方にて
余之地圖を案じ扨は彼處ありけりと思ひたり
既にして羅馬府に近づけば彼の有名なる古水道の恰も無限の長橋の加く蜿蜒として平野に

奔れるを見たり是れ則ち二千年前の遺物として日本人に似たりたる土工あるが故に類を以て之を比説せん事難けれども先づ通例の日本の長橋の橋柱を煉瓦にて圓形に壘き上げ其上に煉瓦の洞道を幾十町とあく直線に續けたる者とこそ云ふべけれ兎角する中源事と間もなく敗頽して苔茂きたる古城壁の間を横切りつゝ羅馬府内に到着せり

概ね羅馬府の地形を言へゞ初め余等の想像せし如き嶮岨なるものにはあらぬ先づ一面の平野にて近くに三四里遠きに七八里の間に山勢極て温藉なる樹脈の遥かに羅馬府の幾分を抱擁し居るのみ是に余等のみの知らざれども初め羅馬の古史を語る當時の地形を想像する時と羅馬府に都て嶮岨なる山嶽を以て立て廻されたる者の様なる心地し居たりしに斯る平垣なる有様を見て先づ意外の思をなしたりしが又熟々考れば二千年の間に羅馬府近傍の地勢も相應に桑滄山谷の變を經たりし者にして昔の羅馬府と恰も既に土中に埋もれ盡し今の羅馬府は昔しの羅馬府の天井を基礎として其上に立ち居ると云ふも可なる程なり其証據に市中の片はとりに幾千年前の古高宅の下部の八分通りと地底に沒去て僅かに其上部の一二分の地上に露はれたるを利用して穴居同様其の内に生活し居る貧民も少からぬ又地底より掘出したる古建物の圓柱抔と概ね皆な其の頂き今の家屋の土臺より下にあ

る者多し羅馬府の人口と概ね十万人内外にて市街の建物と全体に古びたる者多し左れども亦た中古建築の模型を存し甚だ丈夫に見ゆる者も少なからず今の王室が伊國一統の功を奏し十五年前茲を以て其の首府とあせし迄と此地と唯た羅馬法王に參拜し世界第一と稱するカゾリック教の本山寺院あるサンペートルに參詣せんとて輻湊する所の信徒並に此地の名所古跡を探か爲めに接踵來遊する所の旅客の二者を相手に全府の活計を立て居たる者あれば市中に聞く所の品物も皆な是等の外國人の本國に持歸るべき土産物多く日用品の方と左まてあらざる樣に思はれたり左れば全体に町も狹く之を巴里倫敦抔に視ふれば其大小冷熱と固より相比較すべき類にあらぬ然れども今の王室が此地を首府と定めたより漸次に市區を改正し新らしき建築抔も起り行々と一の繁華なる新都會にも變ぜべき有様あり先つ前記せる人口と此地の沿革の發來とを察する時は畧ぼ其他の事を推量すると難からざるべし

●問　引續て羅馬名所の御話を承り度し

●答　巴里倫敦の羅馬府に及ばざる一事は其の名所古跡の多きと是なり左れば余等の逗留中も新らしき繁華の場所へと赴き觀ると少なくして暇ある毎に輙ち古跡のみ見物せり四史を讀たる日本人抔に取りて第一に珍らしきと数の二千年前共和政治の始めより王政の始

めゐ至るまで用ゐたりし古宮殿の跡なり又羅馬史中よりカピトルと書し其節羅馬の本城とも云ひし處よりて今日も尙ほ其の上より羅馬の府會議事堂、府廳、など建築しあり其の廣さは二三町四方よりて今日よりても他の地面より一二丈も高く聳へ居れり前記せる如く今の羅馬府の基礎て昔しの羅馬府の天井の上より立ち居るとを考ふれば其の昔しの羅馬府の頃よりは此本城の地面へ餘程市街より高く拔んで要害の區たりし者と察せらる前記の古宮殿は卽ち此本城の裏手の麓よりあり此古宮殿は圓と地面の下より理もれ居たりしを中ごろ其土を掘り上げて堀り顯てしたる者あれば尋常の往來の方迚かよ宮殿の圓柱の頂さよりも高く之を見物する者は皆ゐ往來より一段低くき地面より降り行くとあり此の宮殿の趾にて今日より存し居り認め得へき者て其一部の石壘と三四の圓柱と又其傍らゐ立てる一箇の凱旋門とのみなり此の石壘ゐる一區は則ち彼の英雄該撒が志士ブラタス等の爲より要殺されし所ありと言ひ傳ふ果して信あるや否や敷石は都て大理石ゐて其圓柱の格好風韵は亦た實より美事あるものなり

又此古跡の一方よて四五町四方の小高き丘ありて是は羅馬が帝政より變じたる以後の皇居の趾ありと云へり丘の地質て都て煉瓦ゐして其の窗へ唯た一個の宮殿なりし者が幾千の星霜を經る中ゐ漸次土砂より埋もれて遂より今の一堀の丘を成せしよて非さるやとへ思る、程の者なり四方より此地ゐ遊ゐ旅客共ゐ前記せる古宮殿の大理石などを持去る者多く之を制禁せされば終ゐ其形を損する迄ゐ至るべきが故より茲より伊國政府より出張の番人ありて之を看守するとあて余等の如きも何とかして此の古宮殿の大理石を手より入れんとせしゐ左りとて番人より咎められんも面白かゝ迚又其の大なる者て持歸るよも不便なれば唯より余か遊蹤の印爲めよもと其邊の大理石の一小片を打缺きて携へ歸れり他日之を彫刻して當時の紀念と爲さんと思ひ居れり

初め其の共和政治の時代ゐ當て小亞細亞より歐洲を一統して以後羅馬人民て一体より奢侈の風を長したりしが故より其宮殿の圓柱ゐやも既より定めて美事よあり居しならんとて今日より存する二三の記述を以ても之を想像すべきが其の帝政の始より中頃よかけては取分けて建築術の進歩せしものと見ゐ帝政の頃の神廟の圓柱二三本右の古宮殿の傍より立居れるゐ其物質て紫色の大理石よて其割合の宜しきと彫刻の美事あるとへ實より人をして感嘆せしひ

古宮殿より少し隔りて一二の凱旋門あり是を過ぐれば彼の有名なるコロセオと稱ふる圓劇場の古建築あり其狀を畧記すれば圓形の飯櫃の如き者より其圓形の周圍て始め七八町もあるべく直徑二三町もあるへし其圓形の中央に平場ありて茲より猛獸を鬪てしめ或へ奴隷を

して互に決鬪せしめ或ハ人と獸とを鬪てしめたる土俵舞臺其云ふへき所あり其の中央の平場より少し高く石を疊み上げゝより圓形なりに段々高く數十の階を輪づくり設けあり即ち見物人の席なり左れと見物人と中央平場にての決鬪を立て廻てして上より看下す樣あせるものあり而て其外面周圍ハ地面より幾丈の高さゟ直立し居れり又其鬪獸場の地底ゟと穴厩の如き部屋幾個もあり是はかねて猛獸を入置く處ゟて決鬪の時ゟ拔ゟり之を例の平場ゟ引出す樣ゟあしたる者ありと云ふ此の鬪獸場の中央と總て廣大なる石を以て疊み上げたる者ゟして其昔しと總て彫刻せる大理石を以て內外共ゟ飾り鏤ばめたる者もりしが中古歐洲戰國の時ゟ及ひ羅馬の古物の悉皆零落せし頃羅馬の一侯國の主某が其の宮殿を造らんが爲ゟ此鬪獸場の大理石を過半取り去り唯たゝのみゟて一個の大なる宮殿を建築したりと言ひ傳ふ其他亂世の事なれと何者が取るともなしゟ思ひ〳〵ゟ之を奪ひ去り遂ゟ今日の如く其中央の骨のみ露殘するゟ至りし者と云ふ如何ゟも以前大理石ゟて飾りし證據ゟと今日ゟても其の或る個處ゟと尙は一二彫刻大理石の零落しのこりて存し居るを見受けあり今日ゟ存せる古羅馬の建築物中ゟて此の鬪獸場こそ則ち古色第一と稱せふるゝ所にして四方來遊の旅客の昔を忍ふ人々は風淸月白の夜ゟ乘じ此邊を逍遙して流光の廢墟を照ふゟを賞す

るも多しと聞けり彼のギッボ氏の羅馬帝政史ハ英國文藝社會ゟて有名の一書なるが初め同氏の此ゟ在る頃一夜月を踏て此の邊ゟ散策し俯仰低回感念の依々たるゟ堪へも乃ち帝政の史を編ゟて往事を叙述せんとの志を此時ゟ發したるありと言ひ傳ふ此の鬪獸場の寫眞ハ日本あゝゟも持歸れる者多ければ時々諸處ゟて之を見懸し者も少かふさるべし其昔しは一たび世界の中心たる名都の間ゟ立ちて壯嚴偉麗を誇てたる建築が星移り物換りて斯く荒敗せるの有樣を念もひ又彼の古宮殿の中ゟ一たび出入せし該撒。ブルタス。其他の諸豪傑の事を憶もへば轉た懷古の情に耐へも余ハ逗留中外出さへそれば幾回となく此れ等の古跡のみ訪ねたる事なりき

問　彼地ゟてホテルと稱ふる旅舍の有樣は如何諸國共ゟ其体裁は同樣ありや

答　通例ホテルと稱ふる旅舍ハ諸國とも其体裁先づ同樣と云ふて可あり是ゟは上中下幾等も階級あり上等の分と非常ゟ高價ゟて下等の分と又た非常ゟ廉價あるもあり今ゟ世界第一繁華の地たる巴里ゟて最上と稱するグランド、ホテルの有樣を略記せば其他は推て知るべし右の大ホテルと五六階の高さあて其間數と三四百の間なるべし食堂は第一階（即ち尊常の平地に並べる間）ゟありて食事の時刻ゟと客人皆な其所ゟ打揃ひて食事を爲すものと

す又低き程部屋も上等にて二階三階と高くある程其價も廉なり又低き部屋程其天井高く位置の高くあるに從ひ部屋〳〵の天井も亦た低く屋根に密接する最高頂上の部屋抔は日本家の低き天井と殆んど同樣なるものあり左れば大ホテルにても其部屋次第にて直段に種〻樣〻なり先つ四階位の處にて十五疊内外の一ト間にて一日廿フラン（四圓許り食事に無論一切別なり）あれば其の低き三階二階の部屋〳〵に此より次第に高價となり又天井の方に近づく程從て廉價となる

ホテルに先づ部屋代丈を拂ふを通例とし食事は爲すも爲さゞるも客人の自由なり食事の附きたる部屋とても別段に之なし右の大ホテルにて夕飯一食の價八フラン（一圓六十錢許り）なりきと覺ゆ晝飯も此の半價内外にて朝飯も又之れより廉なり然れども若し三度の食事を悉く食堂にて爲さゞ多分十一二フラン（三圓三四十錢許り）にても澁むべし尤も右に無論食事のみの代あり又た此のホテルの食堂なる者に料理屋と同然なる有樣にてホテルに止宿せざる人にても此食堂にて食事を爲し得るに恰も料理屋に行くが如し又食堂にて各種の酒あり其の註文に從ひ之を持來る尤も酒代も食事の外に之を拂ふなり食事の後、付の給仕に通例廿錢許りの心付を與ふ是等の給仕に總て黑の禮服に白襟を附け一同に立派に裝ひ

居れり

食堂は最も見事にて身元善き客人あれば夕飯の時に通例黑の禮服（燕尾服）を着けたるもの多し食堂の内に之五行或に六行の長き大食卓ありて銘〻此に就くとあるが客人一名食堂に入り來る何の禮服着用の給仕直ちに之を案内して其の着く可き席に着かしめ客人は食卓に密着して眞直に立ち居れば彼の案内せる給仕ソッと後方より椅子をあてがい客人は悠然と尻を据れば丁度好き工合に自然と腰掛らるゝなり然れども未た是等の事に經驗あらざる時に茲等の躰のコナシ甚だ不落着にて直に田舍者と見て取らるゝあり

又た百名前後の諸國入りまじりの客人が思ひ〳〵に食卓に列し居るも其行儀粛然として安暗に高聲を放ち調子外れの談話を爲す者も無く同行の客人同志互ひに談話を爲すさへ極部かなる調子にて滿堂何となく物柔らかに品よく打上がりて見ゆる程離れ合ずるとも無く一同の作法行屆き居るに吾等の驚き入りたる所なり又た其の料理の風味も甚だ好きとあるが獻立に季節に因りて相違もあり繁煩しければ略するこそ然るべし但し朝飯、晝飯、の時抔に男女の客人共に夕飯の時程食堂に列する事に意を用ゐざるあり

去りをから食堂に赴かずして自分の部屋に食事を取り寄ずるとも勝手次第なり然れども部

屋ゟ取り寄する時ゝ其代を一割以上高く取らるゝことあり是ハ部屋ゟ持運ふ面倒の賃錢を拂ふ譯あるへし又一ト品二タ品を擇ひて註文をするも客人の自由あり

●問　其外ホテルの有樣ゝ如何

●答　是迄遇へたるは何れも巴里のグランド、ホテルと云へる客舍の例を擧たるとあるが英、曼、伊諸國のホテル共ゟ先づ大体は斯の如し極上等と極下等とを格別とし先づ通例八疊或ハ十疊許りの三階若くゝ四階ゟある部屋ゟて寢臺附の者あれゝ五フラン又ゝ四シルリング（一圓内外）を通例とし又たルーブルドーと稱する夕飯一ト揃の食事ゟて一圓内外の價格を通例とす去ゝあから場所柄次第ゟてハ非常ゟ何事も高價あるあり又非常ゟ廉價あるもあゝ又た處ゟとりては部屋の蠟燭代を別ゟ取るものあり給仕の召使代を別ゟ取るものあゝ其甚しきは一本の蠟燭ゟ一フラン（廿錢許り）を取るものあり余等者て英人、佛人、と路伴とあり共ゟ客舍ゟ投じたる事ありしが其夜種々の物語の序ゟ英人が例のお箱なる國自慢ゟて英國程客舍の便ある國は無しと言ひ去ゟ佛人ゝ大に之を笑ひ余が英國のチャーリン、クロースなる停車場附のホテルゟ投宿せし時所用ありて小使ゟ一對の書翰を帳場迄持行しめしゟ翌日の勘定書を見れゝ是か爲め廿五錢取られたるとあり貧ゟ嘆く可き高價なり佛國ゟゝ決

して彼樣なる事無しと言ひしゝは英人は負けぬ氣ゟあり頻ゟ佛國のホテルの高價なる例を擧て口論し大笑とありしとあり又た或人が米國のホテルゟて明日の天氣を氣遣ひ今夜ゝ露れ居るや否やを小使ゟ見來らしめたるにアトゟて其代を三十錢取られたりと言へる笑話ある程あり實ゟ何事もウカとゝ命せられす余等が紐育ゟて食指許りある大さの細細二三丈を買ひ來れと命じたりしゟ二圓以上を貪られたる事あり然れば通常の物品の外は先つ容易ゟは用る難き方ありと知るべし又英國の大陸案内書中ゟ旅客ゝ石鹸を必ちも用意す可き旨を載せ一ト切の石鹸ゟて二三十錢以上を貪らるゝは珍しからもとの注意を爲しありしが如何ゟも右樣の事甚た多し注意すべきとあり

世事は經驗を積めば積む程巧者ゟ成り行く者にて余等の如き氣の利かぬ者迄も國々を經廻り旅慣るゝゟ從ては自然何事も狡猾ゟ立ち働く傾きとなれり然れば我が懷中の温度ゟより懷の暖かある時ゟハ大盡顔を爲して最上のホテルに泊り込み少しく其冷かなる時ハ面目ゟ關せぬ迄を界とし成る可く廉價のホテルゟ投宿せり今ま後來の旅行の爲ゟ一二の傳授を

畧記し置くべし

外見は体裁好くして實際の經濟なるは上等のホテルゟ止宿して珈琲店の食事を食ふを第一

とす珈琲店其他料理屋に至れば通例一ト品にても二ツ品にても已れ好みの品を擇み多量に も少量にも自分の欲する丈註文することを得然ればホテルの食堂にて滋味厚味にもせよ其時 左程欲しからぬ料理を數多く是非共あてがはれ是に高價の代を拂はんより自分料理店に往 きて己れの腹加減に合へし隨意の品を食するこそ便利なれ料理店あれば註文次第に我ら欲 しき品を一品あり二品あり擇て食するとも出來從て其の價も甚た廉あり又外國人、同國人 に對して己の宿所を名のり或は來客抔ある節も上等のホテルなれバ面目も甚た宜く萬事に 都合あり故に好きホテルの相應の部屋に投じて料理屋の食事を爲すは甚た便利ある法あり 不案内の人は之に反し食事をば其ホテルにて爲し却て部屋をば頂上に近き極廉ある所に定 むる者も尠なからぬ是は餘り感心せぬ仕方あり

●問 然れは先つ經濟上とて云は、ホテルの食堂にて出ぬ方なりや

●答 然り、然れとも言語も全く通せさる國に至りた時抔はホテルの食堂なれは默し居り ても出す丈の物は持來るか故無造作あり左るに若し料理屋抔に行きたとて遲來る料理の名 もロクは分らす勘定そら輙くへへ出來難けれは斯る場合及び婦人連の旅客抔は餘義無くも ホテルにて食事を爲さねべあらぬ然りながら余等とても英語の外は佛語あて伊語あり曼語

あり僅かに十五ら二十位の外へ解し得さる身ありしろども猶ほ大膽にゴマカして時々は料 理店にマクれ込に食事を爲たるとあり萬事に敏捷ある歐洲人の事ゆゑ先つ大抵に手眞似 にても此方の意味を悟り呉るゝとなり況んや此方も知た振を爲しウヰとかヤーとか生意氣 に其の國語を吐乍ら料理屋の料理の表(日本にあれは「板」と云ふ處なり)を大抵に指ち時は給 仕等心得て持來るとあり又名品の直段は數字にて記たあるが故に別に獣かるゝの憂も無た 唯た其の國々のマクとかフランとかの價格と數字とを知り居れば例の表と見合せて充分 悟り得べし又料理の名へ國々にて無論一樣にあらねとも諸國共に多くは都びたる佛語を 用ゐ居るとなれべ先づ幾分は悟り得可きあり又英語と曼語との加きに甚た相似たる者多き か上に其間に交しり居る外國出の詞とては亦た多く佛語なれば日耳曼にては余等も料理の 獻立に大抵間違はぬ方なれしか唯た一度可笑しかりしはクースと書きしものありしを是は 英語のケースに似つかはしけれは多分菓子あるへしとて誂へたるに彼のチースの出て來り しには閉口したるとあり然れへ折々は斯る間違は出來するを免れぎ

開け切マたる故き國々のとあれば歐洲の旅行に何事も痒き所に手の屆く如くに順序整ひ居 り此上も無く氣樂なるとして亞米利加抔に比すれば實に雲泥萬里の相違ありし如し余等

か歐洲旅行中には常ゑ毛布包と手カバン抔の類両三個を携へ居りしか別ゑ荷と云程ゑもわふねと若し已れ持運ふとすれハ瞻分厄介なるとあり左れとも旅行中余等と曾て此の厄介を感したるとあく先つホテルを出立する時は小使か之れをホテル持の馬車ゑ載せ客人と共ゑ停車場迄送り來り停車場ゑ着すれは停車場附の荷持人足出て來りて之を受取り客人の乘込む汽車の處迄運び呉れ又た荷車ゑも載せ呉れるあり又ライン河の如く風景を旅客の眺むる地方ゑては少し心付を澤山遣たせハ彼の荷持人足ハ此方の窓か景色を見るゑ宜しとか彼方の窓か宜しとか敎へ呉れて其處ゑ座を定め占むる世話をさへ爲す者あて扨汽車か留まる所ゑ至れは又其停車場の人足出て來りて此方の指圖ゑ從ひ之を其の停車場ゑ客待を爲し居るホテルの車に運ひ載せ此方と唯アレコレ指圖するのミゑて空手を振りつゝ此ゑ乘込むあり又船ゑ乘込むも船より下るも皆ゑ同樣の手續ゑて自身に荷物を扱ふの面倒と曾て之れ無く幾百里の長程を旅行するゑも費ゑ自由自在ゑて何の不便もあらねは又た遠方の旅客と見て視さ取る如き無作法を働く徒も少く(決して其徒無きゑは非す)流石は故國なりと其萬端の順序の行屆きたるを稱したるとあり

◉問　有名あるアルプス山の景色は如何

◉答　世人の知る如く此の山は佛、伊、兩國の境ゑ起伏して北のかた澳利亞ゑ奔り又た茲ゑ澳、伊、二國の境を爲し居るあり古代ゑ於て其將ハンニバルか兵を援きて羅馬を掩擊し來りし時も此の山脈を越ゑ又た那翁一世か伊太利を侵す時も間行此を越えて不意ゑ敵の背後を擣きたる等ゑて歷史ゑは有名ある故跡とあり居るとなり人力能く天工を制する第十九世紀の今日ゑ生れたる我々は左したる苦勞も無く安々と此の巍峨たる山脈を越すとあから以前は定めて一の大難所たりしゑ相違あしと思はる余ハ佛境より車ゑ乘り夜を冒して此を越ゑ翌朝伊國のトリノと云へる地ゑ着したり佛境の方ある山麓ゑかゝりしは夜八九時の頃ありしか伊境ゑて平野ゑ降りしハ拂曉なりし最も滊車は此の山脈の低き所を彼方此方と迂り廻りて行く上ゑ此の山脈の厚さの非常ゑ厚きか故ゑをあれと兎ゑ角斯く時間を費すは以て此の山の大あるを察するゑ足るへし山巔ある伊、佛、兩國の稅關ゑて荷物を改先しハ夜半十二時の頃ありと覺ゆ、時方さゑ四月の初ありしか山上ゑては處々に積雪の皚々と積り居るを見たり昔ゑハンニバルか阿弗利加より數多の戰象を率ゐ來りしゑ此を越る時、寒氣に堪へすして象と多く斃れたりしと云へるも虛說ゑはあらさと思ひたり日本は島國の故にや國内の山脈は大低馬の脊を立てたる如く上り下りは急あるも山脈の厚さは甚だ薄し左れは日本

の諸山脈より推想せる者にてハアルプスの高山ハ其の斜面も定めて急あらんと思ひ居たりしよ左は無くて山腹と非常よ厚く山嶺よ至る迄左程險しとも思はぬ程ゐ其勾排甚だ緩かめり又谷々の勾排も頗る緩よして饅頭の如き圓山を上りてハ下り下りては上りする内よ最高の嶺よ達するが如く覺ゆ左れは谷と云ふも日本の如く狹隘峻削ある者よは非らそして實よ陵夷なるものあり成程流石に大陸の山脈の氣象と斯る者あるへしと始めて思ひ當れり

同じ高山大嶺と云ふも大陸の者は薄ペラの急ある者よ非ざるあり

扨山嶺より山麓よ至る迄よは處々よ陵夷ある地面あり概して森林少く赭山と云ふも可あり

民家も其間ゐ散點せるか何れも山中の事あれば二階家は少あく恰も日本の一軒立の平屋の百姓家ゐ髣髴たるさ唯た旅客の眼よ異体よ見もると民家の屋根瓦あり此邊は一体よ煉瓦抔を用ゐそ薄き石片を以て不規則ゐ屋根の上に積み重ね居れり其の石片と薄くへゞたる三四尺許りの色々の形の者あり此邊の山中よは斯る石片多しと見も此の瓦の外ハ都べて伊、佛、の民家よ異なる箇條あし

佛境とり山嶺迄も隨分洞道多しと思ふが山嶺より伊國の山麓迄と又一層洞道のみよて忽ち明、忽ち暗、出しろと思へば入り、入りしかと思へば出て、麓の方七八合迄の處ハ幾ど唯た洞

道續きある心地せり

既ゐして瀛車山下よ來り彌望空濶の郊野に出てたり地圖を案すれは伊國の西北境は都て此アルプスの山脈よ抱擁され又少く西南の方に至れば直ちよ〜ランスの山脈あり此兩山脈の間には左程の餘地あり其思はさりしに實際此に來り見れば平原蒼々沃野千里とも云ふ可き地形にて畎畝相接し原野相聯り處々に桑樹多く村落所在よ散點せり斯の如く空濶坦遠ある地形ハ恐く日本には曾て見ると能はざるべし流石に舊國程ありて原野抔の開け盡したる有樣人力の加はり居る有樣は又た一ト入ゐ眺めらる伊國が二三十年を出てすして早く强國の間よ列するよ至りしも決して偶然よと非す亦其國本の在る所を想ふへし

●問　倫敦の氣候は如何

●答　倫敦の位置ハ日本の函館、札幌、よりも尚一層北の方角にあるとなれば其寒氣も亦た非常よ强かるべき筈あり然るに其寒氣は東京より稍〻少しく寒しと云ふ位のとゐて別よ甚しき相違ありとも思ハさ昨冬の如きと五十年未曾有の寒氣ありしと彼地の人は云ひしなれども左まで堪へ難き程とハ思はざりし又一昨年の冬の寒氣は東京よりも稍〻輕き方よ覺ゑたり去れべ其地の北よ寄りたる割合には同地ハ寒氣の輕きと明らあり一説よて大西洋の熱

帶として炎日に照り込められたる潮流が其温氣を廣ふして英國の西岸一帶を衝き當るも恰も太平洋熱帶の潮流が日本に於けると同しく爲めに斯く緯度の割合よりも温き氣候を生するありとも謂ひ又或と同地には霧多く冬分に常に霧を以て同地を覆ひ包むが故に其寒氣割合に輕きありとの說もあり又英國を指して（常青卿）と名けし人もありしと聞く是れ場所に因りては冬分も草色蒼々として日本あぞの如く黃ばみ枯るゝことなき者多きが故に斯く呼へるありとも云へり如何にも處々の公園などを散歩し見るに日本の芝に似たる軟草と一面に青色を帶ひて其儘に年を超す者比々皆是あり尤も其中には少しく赤べみたる枯葉も見るとにて固より春夏の初めの如くに色合匂ひふて好くはあらざるなり然れとも之を日本の芝原其他の草叢が秋冬の際には全く黃色に變し盡す者に比すれば甚しき相違あり斯く草の枯れさるも一に寒氣の甚しからさるに因る者にや

因に謂ふ右の日本の芝に似たる軟草は芝より一層愛すべき者にて芝は其葉硬く尖り居るに此草は其葉柔やらかなる事恰も俗間にて稱ふる雛草の種類に似たり此草を日本の庭園或は公園抔に移し種あば如何と思ひし事もありしが或人の話に嘗て之れを日本に移植したるとありしに氣候の温かに過くる故にや非常に長く生延ひて茫々たる草原と變し英國の如く短く細やかに愛ふしき芝生の用をばなさゞりしと云へり或は左もあるべき乎

此の如く寒氣は思の外に輕けれとも唯た其寒き時節の永く續くには驚くべし嘗て記載したる如く先づ概して言はゞ一年十二ヶ月の中の五ヶ月を冬とし殘り七ヶ月を春夏秋に分つも可なり斯く冬の長き處なるが故に又其の手當も殊の外宜しく家、座敷、窓等の造作も又馬車、乘合馬車、等の造作も皆多くは冬期に對して其の樂きを專らに工夫せるが如く見ゆ殆て他地に着せし時は夏の初なりしかは是等の造作向都べて如何にも不細工に見受何とか今少し空氣を發散流通する趣向ありなきやと私に笑ひ居たりしに追々寒に向ふに至り始めて扨は と思ふあたり玄あり窓戸の締り都べてキチ〳〵と行屆き室外と室内とは恰も別世界の如く爲しある風は最も冬向に適當せる者なり斯く細りとき家に在て煖爐を焚き家内打寄りて多籠りをなすは又た一種の趣きある樣に見受けたり斯くて歲の初め四月頃より漸々と温氣を生じ是より世間も次第に春めき六七月より八九月にかけては人皆之を遊觀の好時節とし或は諸國に旅行し或は海邊に遊び抔して樂しむとなり

余等は常に日本の氣候の寒温、中を得たる時節多く又た晴天多く最も人体に適當せる好土あるを誇り居るとかから彼地の人は亦た英國の世界第一の氣候たるとを誇り居れり是も亦

た銘々國自慢の一証なり日本ゟ來りし英人抔の倫敦を優れりとする口實を聞くに曰く日本の國ゟは常ゟ濕氣多し其証據は品物ゟ懼を生じ從て腐朽すると速かゝり左れば金屬ゝも銹を生ぜると甚だ多しと此點は如何ゟも一理あきゟゝあらぜ倫敦にては加何ゝる時節と雖も曾て銹を生ぜざりしゝり理髮道具の如きも日本ゟ持ち歸れば其の一面ゟ懼を生すると二三ヶ月の内ゟ幾度ゝるを知らぜ始て〻日本の空氣に濕氣多しと云へる爾も認りゝらぬゟ思ひ當れり如何ゟも彼國の空氣は寒き時多きが故ゟ熱氣に蒸されて濕りを含むと少ゝく一体ゟ乾燥ゝる如き心地せり斯れば其邊は彼國の空氣が優り居るやも知るべからぜ然れども唯た倫敦ゟては快晴の天氣殊ゟ少ゝく早朝ゟ晩方まで蒼々たる碧空を見るを得るの日は一年の中ゟ幾くもゝかるべきと思ゝるゝ程ゟ曇り勝ゟて又た其陰晴の變化の劇しき事は言語同斷ゝり

◉問　倫敦邊ゟて氣候の異りたるよりして推及べる色々の風俗もゝるべし如何

◉答　夏の外は春、秋、冬の三期共常ゟ蝙蝠傘を携へ居らぜしては不都合なる程ゝぶつゝけの驟雨來る事少からぜ然るゟ茲ゟ又奇ゝるとは倫敦の雨の長く續うざると水量の少なきとの二事なり日本ゟては東京其他概して盆を覆へすが如き水量の多き雨の五六時間も降り續くとゝ珍きからぜ左ゝるに彼地ゟては此の如き雨ゝ絶無とも云ふべき程にて一寸降り來るかと思へば忽ち止み始終曇りがちゟてポツ〳〵と小粒は落ちゝがらも水を撒くが如くは降り來らぜ左れば手代伴頭抔若者ゝ蝙蝠傘を持たぬ者すら甚だ多し若し途上にて傘なくして行かれぬ程の雨ゟ逢へば一寸家の入口其他の蔭ゟ立寄りて之を避け居るときは遠からぜして濡れ行くなり是亦奇と云ふべし

春、秋、冬の三期ゟ於て倫敦にて最も厭なる心地するは東風なり蓋し此風ゝ北のかた遙かに墨西亞日耳曼の氷雪の上を捲き來るが故ゟや其寒き事非常ゝり是を以て英國にては通例東風と云へば狂人抔ゟは最も宜しからざるもの〻如く謂ふゝり日本支那抔にて東風とさへ云へば何とゝく和らぎて長閑ゟ面白き者の樣ゟ想ゝる〻習慣とは大變の相違ゝり亦た風土の殊れる所を見るべし

前記する如く公園或は牧地の如きは冬期と雖ども亦青色の草を見るゟ是ゟ引替る樹木は概して皆其葉を落さゞる者少なし日本にて常盤木と云へる杉、檜、あんどの如く綠葉を帶びたる儘冬を過ぐるものは甚だ稀なり通例庭園又ゝ公園抔ゝ植へたる樹木も春夏に茂榮し秋冬に落葉するを通例とぜ是れ一〻春夏の煖かき時には蔭を愛し秋冬ゝ日光を愛ぜるより自

然斯の如き常盤木のあき有樣となりし者なる歟要するに英國にて之常盤木の生長都べて非常に遲きが故に寧ろ生長速やき他の樹木の方を愛し植るあり又た間〻松杉の類を植へあるべもあれども日本杉の如く喬大に生長し居る者之少し但し伊太利の如き暖國にて之松の大なる者をも多く見かけたり

前記せる如く倫敦にては冬分ハドロリとせる曇天の上に霧さへ立籠る事多く之に加ふるに百万戸の家が軒別部屋〳〵にて煖爐を焚く其の石炭の烟が幾百万の烟突〻り立升るとなれば積り積もる烟ハ四方に飛散すると能ぎして多く之其近所の樹木の枝幹に附着し從て市中及び公園抔の樹木は皆黑色にクスポリ居らざる者あし左れば其葉の黃はみ落ちて枝幹の全く露ハるゝ秋冬の際に宛然一幅の墨畫の山水を見るが如き心地すと云ひし人ありしが實に能く形容したりと云ふべし

是の故に秋冬六七ヶ月の間ハ殆ど綠葉を着け居る樹木は絕て見ると能はぎと云ふも可あるも始末あして三四月頃に至り青き嫩葉のポツ〳〵と黑く燻ばれる樹身より一ト際色立て芽出しかくるを見るときは實に得言はれぬ愉快の心地するあり

又た一寸云たる自宅の庭園に日本にてアチキバ（處によりて稱へ之異同もあるべし）と稱する者に似たる一種の木植へある者多し冬に綠葉ある者は殆ど未だ此の木のみと云ふも可ありアチキバと云へる木は日本にては素と甚だ不風流にて無論庭園の飾り抔とする者ふもあらぬに彼國の園庭に在りて見るときは甚だ其趣に適なる居る樣眺めらるゝなり以て東西の風韵の甚だ相同じからざる一端を察するに足べし

●問　倫敦邊にて春花の景色等は如何

●答　六七ヶ月の間花は勿論木の葉さへ見るとなき世界より自然に暖かなる春期に向ひて彼處此處に種々の新芽を吹出し花さへ色々に咲はじむるを見る時は坐ろに故園の情を生ぜるあり余等の如きい是迄外國に留學したるとも少く稀に旅行すればとて廣くもあらぬ日本內地を東西に奔走するのみにて汽車汽船に便ある今日にては左程に懷鄉の感の出たるともあかりしも其身を萬里の外に置き親戚朋友等も少き有樣にて節物の移り代はるを見るときは實に一種の感を生ぜる者にて支那の詩人抔が懷鄉の情を述べたる境界も思ひ當れり左れば一日ハイドパークを散步せる折不圖下の如き拙作をも得さることあり瑰園日暖百花明、綠葉深邊有鳥聲、萬里假令春相似、滿眸草木不知名、

彼地の人は全体に草花を愛して木の花を愛せぎ彼地の人が歌或は詩に述ぶるは多く皆草

花にて本の花は誠に稀あり斯る高尚より生せしよる者か木に咲く花よりして麗はしき者は甚だ多からも然れども日本同樣の花の絶て無よもあらざるあり先づ春頃に開く桃の花抔は全く日本と相違あし又同じ頃に櫻の花も開けども日本の加く美事ある櫻よはあらも元來彼地の人の櫻に對するは唯だ其實を珍重するに在る者あれば其種類の撰も從て日本とは趣を異にせり故に同じ櫻の花よはありながらも日本の美事なるに比較すべくもあらも去りながらソレにても其滿開の頃は稍は觀處あり此に對すれば何となく故郷あつかしく眺めたるとあり又梨の花は畧ぼ日本と同樣にて遠く望めば皎然雪の如く見ゆる程堆かく植付けたるも少のふも余等が春晩に佛國の南境より白耳義に旅せし時に左さに花時にして櫻花梨花枝を交ヒへ村落の間に散點せる景色に日本の田家に異ならざるの心地したりさ

此の加く櫻花、桃花、梨花の類は先づ日本と稍や同樣の者を觀得るとあれども獨り梅花に至ては曾て其似寄りの者さへ見懸けたるとあらざりき梅に元と寒さに耐もる木の如く思はるれども彼國の氣候よては倘は適せざる譯にあや但た春晩に伊太利に遊びし折一夕客舍にて食堂に入りし時卓上の花瓶に種々の花を雜ヒへ挿みある中に料らも忽ち一枝の梅花の欹歪として奔出し居るを見たりしが加何よも久きぶりにて朋友に面會せし心地せるが上獨旅の

事よしあれば分けて懐郷の情に堪へざりしあり左れば同國には必す梅花あるべしと思はる當時看出したるは確かに梅花に違あし

倫敦は暴風雨も少なからぬ事あるも平生の風力も亦た隨分劇きき事多く東京抔に比すれば惡さ天氣がちの方あり去り乍ら人智の進むに從ひ諸般の理科學益に開け爲めに社會に受くる所の助けの大なるとい毎〻驚くとあるが英國の新聞紙には大概例刻に氣象臺よりの通報ありて數日サキの暴風雨の調査を前以て預記するあり亞米利加の大西洋海岸より今に愛蘭の何の地方に吹廻り居り何日頃には英蘭の海岸に來るべし等一々測量屆きを新聞紙上に掲ぐるあり尤も此の通報通りに行かずして意外に荒れの少なき事もあれども又通例幾分かは其驗はあるあり左れば余等が旅行するにも西の方よりの天氣は多く此通報を目當てに晴曇を計りし程ありし又明日の天氣の有樣を今日より世間に預報するとは諸國に其例少からも大陸の諸都府の中よては氣象臺より翌日の天氣の概畧を日々掲げ示めはための懸板を懸け居たるをも見し事もあり

問　人家に近き鳥類即ち鳶、烏、雀抔は英國も日本と同樣に多き事あるや

答　加何よも雀の加きは其澤山ある事日本と同樣あり又其毛彩あるも一見して同種類の

者たるを知るべし但た例の烟の爲めゝや倫敦の雀は黑く燻ぶり居れり日本人打寄りて言語容貌等の事ゝ及ぶ時ゝは毎ねゝ鳥類就中雀あどは日本も英吉利も其語格は同樣と見へ少しも啼聲の變らぬは不思議なり雀抔こそ日本の者を倫敦ゝ持行きて其仲間ゝ入るゝも言語容貌都べて他國の者とは思はれざるあらんとて打笑ふたる事なりき鳶、烏ゝ倫敦市中ゝは殆ど見懸けぎと云ふも可ある程なり是ゝ倫敦のみあらぎ巴里、伯林、も同樣ありしと覺ぜ但し倫敦より少しく郊外ゝ出れば鳥は隨分澤山ゝて其の聲、形、ともに總て日本の者に異あるとあし然れども鳶の方は英國ゝては不思議にも見當りたるとあらぎ邊鄙の小都邑あどに至らば時として見懸る事もあるべきやも知らざれども先づ倫敦近傍の都府にては注意したるゝ曾て見當りたる事無かりしあり察する所市中ゝ不潔物多く或は空地あどありて鳶、烏、の食物となるべき者或は其家となるべき場所の多き都府ゝあらざれば鳶、烏、も自然栖まゐ難き者と見ゆ若し東京の市中が倫敦、巴里、抔の如く掃除行屆きて不潔物少あく鳶烏の食料絶無とあらんゝは是等の鳥類は强て芋を以て遂ひ廻はらすとも必ぎ都府より以外の地ゝ移り去る事となるべし又今日の如く市中一面不潔物多き時代ゝ在りては鳶烏の無數ゝ栖游して是等の汚穢を掃除し呉るも亦た必要どこそ云ふべけれ

鳩之を飼居る者處々に少なからぎ就中寺院ゝは多く之を飼置ける樣見受けたり又尋常の家ゝて之唯た樂みゝする譯ゝや又ゝ何等かの必要あるゐや兎ゝ角市中ゐ飼居る者を段々見かけしあり

●問　倫敦の雪景色之如何

●答　函館、札幌、よりゐ北の地位なるが故に倫敦ゝ雪も多かるべき筈の處甚だ少なし如何ゝも冬ゐ至れば兩三度は雪の降るとのなきゝもあらねど先づ東京位の者ゐて非常ゝ深く積りしとて同緯度の北米加拿多或は歐洲大陸日耳曼境抔とは勿論此較ゝあらぬ由あり一二尺以上積れば珍しき者と見へ塲末ゐてゝ子供や若者あどろ相集りて雪拋をあし樂しみ居れり又此若者共が興ゝ乘じて往來の人ゝ雪丸を拋つけて其れが爲め警察署ゝ喚出されて罰金を課せられるあどの話隨分新聞紙上に少からぎ又まイッでも雪が屋根ゝ積りありては其融け汁殆終シタ、り落ちて敷石抔を汚すう故其の不都合を避くるため家々ゝて多く屋根敷石等の雪掻をあそなり左れば少し雪降りの後は貧民が雪掻の道具を擔ひ家毎ゝ御用はあきやと尋ね歩るく人手少あき家は之を呼び入れて庭前又は屋根抔の積雪を取除かしむるあり

●問　自轉車にて世界を一周すると云へる名高き旅客ステーヴン氏は不日東京に來着すべ

き筈ありと云ひ又た第二の自轉車一周客マルトビー氏も既に此程印度コロムボ迄到着したりと云ひ亞非利加のモロッコ國王迄宮中も自轉車を斷ふ迄至れる由續々貴社の紙上にて拜見せり左すれハ自轉車は今日西洋一般の流行物と相見も彼地にて自轉車の有樣は如何ありや

●答　倫敦などにて市中を乘り廻ハし居る者の有樣より記さんに彼の肩と摩れ合ひ轂と擊ち合ふと云へる中央盛り場ある市區内の通りにて素々り斯る慰み半分の者の横行すへき餘裕も少なければ市區内の通りにて之を見掛ると甚だ稀れある方なれども少しく往來の疎らなる場末又ハ公園、空地、などにては隨分自轉車を馳せて乘り廻ゑり居る者をも多く見掛るなり自轉車と上中下色々の種類あれども概するに日本抔にて見掛るものと其の精粗好惡甚だしく相違せる樣あり第一に其輪の輻極めて細くして一寸見たる所電信線の針金位の太さあるか無きか程にて又た其の輪齒と名づくべき輪の外邊を成せる圈金も甚だ薄く唯だ之を一目したるのみにて既に左も輕快らしく見ゆるに加ふるに車輪の外邊は大抵皆あ厚さ一寸を以て繰とりあれば其の彈力にて車輪と地面との激觸も柔かに乘手に伝へ至て安易ある趣向あり又た其制も種々ありて日本に在り來れる如く後ろに小車二個前に大輪一個の三輪車又ハ前後に小輪と大輪と各々一個宛ある二輪車等は勿論又た兩人相乘の双坐車あり此の双坐車は大抵三輪付にて前に一人後に一人乘る可き形の者あり又た右に一人左に一人乘る可き形の者あり午後より夕方にかけ公園抔に至り見れば彼の双坐車に朋友にや或は將來の婚約ある仲間にや年若き男女相並びて打乘りつゝ平坦砥の如き廣き路を輕快なる輪にて音をもさゝもアチラコチラと乘り廻はり居るもの多くを見受けるあり尤も是等は都べて中等以下の者共にて無論上等の人々にてあらも又た相乘車にて其輪を踏み廻はすの勞を取り居るものハ皆な男子にして女子は嚮だ左右前後四方の景色を打眺めながら少しも手足を動ろさもして平然と驅り居るあり

此度ステーヴン氏が乘りて世界を一周し居る自轉車は直徑四尺許の輪ありと云へば先づ余等が彼地にて通例見掛けたる尋常の大さのものなりと思ふる

先般以來屢々我社の紙上にも譯載せるが如く日耳曼にては既に之れを軍陣傳令の事に試用し佛國にては之れを郵便遞送の事に試用し何れも好結果を見たりとのことなるが斯くまでに至りたるに決して一朝の故にあらも西洋にては夙より自轉車の流行甚だ盛んにして倫敦にはは現に自轉車雜誌と稱へ自轉車に關する丈けの有らゆる事柄を記して定時刊行をる

専門の雑誌も之れある程あり亦た以て其の流行の久しく且つ盛んなることを知るべし

又た西洋よりは寄席などの如き場所にて一寸前藝として此の自轉車の曲乘りをなすも往々少なからず其の乘方は色々あれども先づ其の一例を擧げんに彼の曲乘の藝人は左も輕快よ見もる直徑四五尺許りの大輪付きたる二輪自轉車を舞臺の中央より持出だし最初之を打乘りて廣しと云へど限りある舞臺の上をば縱横十字卐巴或は斜めに或は直ぐに自由自在に乘り廻るし又た勢ひ込で走り居る車をば腰を捻りて忽ち中止し瞬き五ツ六ツする間と云へる者は恰かも二本足にて屹立せるが如くイみたるまゝ少しも動かず此外或は車を停め片足を車上に掛けたるのみにて半身は落ち掛りながら宙に留まり居り或は枕の如き小さき箱を幾個も〳〵高く積立てたる上に彼の自轉車を置きて身体をば車上に安ビッとメメ居る等種々の技を演せるすは終に彼の自轉車を次第〳〵に解きて仕舞ふに襷手も踏處もなき大車のみを裸にて殘し之れを子供が輪を廻はす如く二三尺向ふに轉がし置きてアトより之れに飛乘りて手に執るべき所も無ければ足に踏むべき所も無きに喘だ輪の中央なる心棒の嵌る可き穴の周圍の少き高くあり居るを足掛りに突立て足の方にて左足右足更るゞ下を蹴廻はしつゝ手にては又た圈金を手繰り手足相須ちて其の勢を助けながら馳せ廻ぐる中

に遂に之れ非常の速力を生ぜ全然尋常の自轉車と其れ早さを同ふはるに至る抔は最も熟練を見るなり然れども更に一ときゝ目覺しきゝ自轉車の曲乘濟みたる處にて餘興として大八車の隻輪を外し來り前の自輪車の裸輪同樣に之れに打ち乘りて自在に馳せ廻ぐる樣前の自轉車の熟練と感心せり此程コロムボにてマルトビー氏が種々の伎倆を衆人に示したりと云ふも彼地にてヨクある所の曲乘と見合せなば餘り異はり為る事もわらざるべきやに想像せらるゝあり

問　米國にて名高きモルモン宗徒の開拓地なるソート、レーキ、シテーに御立寄成し由其の有樣如何

答　余等の乘りたる滊車にユニオン、パシフヒック會社の線路にしてユータ州のオグデンにて滊車を次き代へる趣向なりしオグデンよりソート、レーキ、シテー迄は少し寄り途にて之れども僅かに一二時間にて往かる、處あれば見物の爲め態々寄り途をなす人も多きあり御承知の如く右の都府の名高きソート、レーキ、(潮湖)ある大湖に沿ひたる者にて余等がオグデンを發して最早や二三十分にて彼の都府に到着すべき筈なりし途中より遥かに一

曲の潤水に多少の幽影を浮べたる者の徐々として窓前に現れ出でしを見たり然れども余輩都府に近つくに及ては復た見へざりき

此の都府こそ今を去る四十年許即ち千八百四十七年の七月中モルモン宗徒の一ト組百四十三人が始めて開拓したる所にして最初より町の割方抔は大に意を用ゐ十エークル（凡そ四町餘）宛を仕切りて一區畫とし此の區畫の四面に外に向けて家を建て列ねし此の區畫を幾個も〳〵井然と相對し合てせて遂に全都府を組み立てたる者なり而して是等の區畫同士の間隙即ち町幅は百廿八英尺（凡そ廿一間半）と定め又た町の兩側の家をして門口を互ひチガヒにして向ふ同士迭ひに店を眺め合ふことのあき樣にしたる抔こそ殊に意を用ゐたる處なる由余等は素てより斯る話を聞き居されば如何にやと見るを樂み居たり滊車の到着せるは恰も夕方にて晩餐を終ると其儘杖を提げて直ぐ樣市中を散歩し視たるに成程町の區畫の井然となし居る有樣往來の幅廣く直ぐに走て所謂る大道路の如しとも稱すべき程に整ひ居る有樣皆な素て聞けるに違はぬ又た家の檐下より二間許り出でたる處に兩側共三四尺飾り付廣さの溝堀りありて是には絶えず潺々として水の流れ居るあり折しも夏分の事なれば此の溝を横ぎりて板を渡し其上に椅子抔置きて納涼臺となしすゞみ居る人々も多かりし元來

此地は土質輕鬆にして少しく風吹けば土は皆な灰の如くに颺がり飜へるを見たり左れば是等の溝は土を潤はすにも必要なる事なる可しと想れたり又た町の兩側に植え付けある樹の皆な大きく生長して割合に弱木の少かりしは亦た以て最初より町の割方都べて成算ありて樹木植付けの事抔も既に夙より若手の整ひ居し者なるを推量すべき要するに市中區畫の非然として且つ町の組立の按排宜しきを得たる工合は歐洲大都府もれさ〳〵及ばざる所あるべし當國の都府は在り來りの家並をアトより取繕ふに過ぎされども此の都府の如きは最初より先づ圖引を定め置て後ち建てたるものなれば其の善く行屆くも尤もあり

●問　引續てソート、レーキ、シテーの有樣並にモルモン宗の事を承り度し

●答　先づモルモン宗の奇談より記さんに御承知の如くモルモン宗は今より五十年許前に米國の一賤民なるジョセーフ、スミス、の開創せる一派にして此のスミスなる者は別に著われたる程の履歴もなき田舍百姓の息子なり左れど其の母は何か異常の處ありし婦人なりしと見へ平生より口癖の如くに已れは必ず一人の豫言者を生むべしと云ひ居たり（豫言者とは將來の世事人事を豫言する者の義にて其の豫言する所こそ皆な神の感應より出づると稱するなり昔より西洋にて一宗を開創せる祖師又は之を承繼して其道を弘めたる上人等は大

抵斯の豫言者と名づけらるゝ種類の人々あり）此の婦人の腹より彼のスミスの外に尚は幾個の子供を擧けたりしが母は亦た何か認る所やありけん他の兄をば樂借き彼のスミスのみをば幼き時より斯の子こそ行く〳〵豫言者とあるべき者なりとて殊更に詑り居たり然るに又た不思議と稱すべきは此のスミス加何なる故よや生れ落ちて一向に笑ふと云ふことをおさ〻尋常の子供あらんよりも物心つき染むる頃より人の腕又たは膝の上に在りてもアチラコチラと打眺め看廻はし或は嘻々と笑ふとの多きが通例なるに此のスミスは眠りてゝ更に笑へることなく唯だ恒に下に俯むき居るのみなりし又た少しく生長して游び戯ふるゝにも他の兒童の如くに子供らしき譯もなき事をば爲さず仍復下俯いて唯だ何か思慮し居る樣なりければ其の十二三歲に達せる頃は蚤くも近村の評判となりスミスこそ凡物ならずと云ひ囃すまでに至りさり孔子が子供の時にゝ事して游ぶにも宗廟の祭の眞似をなしたる孫後來世の中に立ちて多くの世に少くの世に衆人を率ゐて一派の教をも建つる者は兒童の頃より既に何か常に異なりたる行狀のあるものと見も又た此に非れば衆人を服するゝに至らざるものと見も今の清朝の初めに支那の田舍に或る子供ありて鴨を畜ふに妙を得其の子供の聲さへかゝれば數多の鴨のアチコチに散じ居るものも皆一行にありて列を正し揃ひ歩るくとの事

とり其評判高くなり其の子供は終に謀叛人の首領と戴かれて一時地方を亂せる話あり是は其の異常を政治上に利用ゐたる者なれどもスミスの方は素てより母の口癖に言ひ居たるが如く之を宗教上に利用して乃ち今のモルモン宗を組立つるに至りしなり

スミスが十五六歲の時井戸の中より一塊の怪石を堀り出だしたるに此怪石は願掛けすれば何か感應のある由を云ひ出だしたる事が則ちスミスの始て宗教世界に一ト足を踏みかけたる初歩なりしと覺へらるる此頃は近村にてスミスの取沙汰既に喧しくなり居たる時なりしかば扨こそとて之を信仰する者も希れならざりしものと察せらるる然れどもスミスが眞に踏込て一宗の祖師となりしと其の後シカゴより行脚し來れる一僧がスミスの噂を聞傳へて一日突然其の居を訪ひ終日何か密談して別れたる時を以て殆ど之となす是より幾ほどもなくスミスに神の告げによりて或る山巔より銅牌若干枚を堀り出だせり其牌面に錆りあるを皆あイスレールの古語なりしをスミスが神の助けによりて讀み得たる所に據るに是は所謂るイスレール十族の一なる猶太王レヒーの子ニフライーの記したる者なりニフライーは國難を避けて其の一族と共に故郷なるユーサレムを迷ひ出で大洋を横きりて此の米國に殖民したりしが其事を長へに傳へんが爲め手づから其前後の顚末を錄して茲に藏し置きたるなり因てス

ミスは自から之を英文に譯して出版せり則ち今のモルモン宗の經典ブック、オフ、モルモンと稱する者あり

スミスが其の經典を出板してモルモン宗を首唱し出だせるは其三十歳許りの時なりと覺ゆ今を去る僅かに五十年程の事あり然れども又スミスとモルモン宗を首唱し出だせる後幾ばくもなく地方を說法し廻はれる中に暗殺せられ其アトをはブリュガム、ヤングと云へるが繼ぎて七八年前其の歿する日までは常にモルモン宗の管長とあり居しあり

モルモン宗が米國人は本と神聖ありイスレールの古族の移住去たる者ありと言ひ出たるは大に米國人の心に叶ひたる所なるべし又たモルモン宗の他宗と特に目立ちて殊なりたる一點は御承知の加く一夫多妻を正道とする一事あり余等が彼の前管長なるブンュガム、ヤングの墓を見物せる時も案内者は門前にて「是がヤングと其の諸妻との墓にて候」と案内せり成程ヤングの墓を中央に据へ其他彼の隅此の隅に都合三基の墓あり皆ヤングの妻を葬りたるものなり西洋の墓には十字架を堀り附る抔色々の形ちにせる石を樹てし日本の如き風の者と又た之を平に地上に寢せたる者との二樣ありヤング及び其諸妻の墓は即ち第二の地上に寢せたる方の者にして長方形なる大理石の上に其の姓名月日等を記したる質素のものなりし又た其の墓地も餘りに廣かゝりき十間乃至二十間四方なりしと覺ゆ

●問　嘗て承りしが彼地新聞紙の上に付伺は日本と異なりし箇條はなきや如何

●答　英國にては一事一物殆んど皆な其專門の雜誌なきものはなし例へば慰みの事柄のみを記載して發行する遊樂新聞あり又た自轉車なれば自轉車の事のみを記載する自轉車雜誌あり其他遊獵、川漁、に至る迄皆な夫〳〵の雜誌ある程の事なれば矧しては重もなる藝術事業に至ては皆なそれ〳〵の雜誌なきものあらず但た茲に一種の奇異なる雜誌ありてマットリモニアル、コウスと名つく右は緣談新聞とも譯すべきか一切世間の緣談の口入れを記載せる新聞にて餘り可笑しき新聞なるがも為に余輩も其見本として一枚を携へ歸れり右の新聞を一讀すれば實に抱腹すべき事少なからず先づ第一面に現れ居るは年齡何歳幾許の收入の男ありて此たび年齡若干如何なる女房所望なりと廣告し居るもあり又金持の後家らしく見ゆる者の若き入夫を求むるもあり其中には餘程財產を所有したる者を記載したるも少からず又此の新聞に因りて實際便利を達し睦じく婚緣を爲し居り合好き者幾千人以上なりとか其數を記載せるもあり果して左程の効能あるものにや去り乍ら婚姻は人生の大事なれば互ひに其平生を知り居るが上にも念に念を入れるこそ當なるに斯る新聞の文面のみを便り

として縁を結ぶ者ありとは實に廣き世の中と云ふべし尤も通例の人は先づ斯る新聞には拂ふべき理窟もなけれど相應の讀者もある事と見ゆ

去り乍ら又た時としては大なる間違を惹起す事も少からざる由にて嘗て右繰蹠新聞紙上にて年頃の男子の廣告と年頃の女子の廣告とあり双方共に似合はしき事と思ひ互ひに相投せしかべ愈〻双方より日を約して見合ひの爲め某の所に出會せり扨て男女とも先方は如何なる人物なりやと且は心配し且は樂ミ乍ら顔を合はしたるに何ぞ計らん兄と妹にてありければ双方共に仰天して逃出せしと云ふ物語りさへある程なり又右の新聞は定めて婚姻の節世話料として金子を申受るやうの事も之れあるべきやに察せらる兎にも角にも先づ面白き新聞と云ふ可し

佛、伊、等の國々と英國とは新聞記者の身上に付き亦た各々相異る場合あり佛、伊、二國に限らず米にても其他何れの國々にても新聞記者は通例政治家を兼帶する者少なからず文學得意の政治家とか又は法律得意の政治家とか各々其得意とする所は樣々なるも兎に角新聞記者となりて政治家を兼帶せる者多し早く云へば新聞記者たる者は通例政治家の役目を務むる者少なからぬ佛に在りてはチエーア氏が新聞記者たりしが如きガンベッタ氏がレピュブリックフランセーの記者たりしが如きクレマンソー氏が現に新聞記者たるが如き皆な其証なり又た伊太利に在りても有名なる新聞紙にして其記者たるものが國會議員中の重もなる人物と稱せられざる者は幾んど稀なる程なり又た米國に在りても今の大統領クリーブランド氏と兩三年前雌雄を爭ひたりしベイン氏は亦た新聞記者なり其他西班牙の議員中にて重もなる政治家と稱せらるゝ者は皆な新聞記者にして諸威、瑞典、丁抹等の諸國の如きも粗ぼ同樣の有樣なり是れ蓋し新聞社の爲に云へば然るべき人物を主筆と祖む時は其社の勢力を增すが故ゝ勢ひ然るべき政治家を聘するに因るとあるべく又政治家の方にても之を機關として我說を世ゝ表白するの機會を得るが故ゝ亦た進で之ゝ當るにも因るあるべく又新聞紙ゝ關係あれば其名を廣むる事も早く隨て政治世界ゝ頭角を露はすに便宜なるが故にも因るあるべく凡そ是等種々の都合より新聞記者は政治家兼帶の者となり來りし事なるべし然るゝ獨り英國のみは殆んど其趣を異にし政治家は政治家、新聞記者は新聞記者、と全く別〻の職業を爲し居れり尤も尋常人にては固より新聞の主筆となると出來難き譯なれば新聞記者の名は世ゝ聞へ相應に珍重もさるゝ傾きはあれども去れべとて他の國々の如く新聞記者は則ち政治家と云ふが如き譯ゝは行かず何とあれば新聞記者は新聞限りの事務家にて政

治家とは先づ緣のなきものと云ふ如き仕方あればなり是れ英國と他國との其の新聞記者の身上よ於ける異同なり

去りながら英國の記者とても隨分社會にはモデル方の者にて又た新聞記者の行狀よは話柄とある事少くなからぞタイムス新聞の前の主筆(二三年前よ死去せり)某が尙は社務を執れる頃英國の上等社會の貴婦人等が聊か企る事ありて新聞に大皷を持ち貰はねば不都合なりとの相談にて則ち盛宴を張りて彼のタイムス記者先生某を招待せり素より計りての事なれど彼の廿名許の上等の貴婦人等は寄りて集りて周旋歎待至らざる所なく右より左より取持ちたる末情で此度の企を申入れ貴社新聞にて然るべく助勢を願み入る旨を述べたるよ彼の記者先生は太と平氣よ受合ひ委細承知せりとて其夜は別れたりしが其後間もなく愈よ右の一事紙上に現はるゝ事となれり然るに彼記者先生は滔々たる筆を以て遠慮會釋もなく此企の筋に違ふ廉ゝを指摘し散々ゐ非難しければ上等社會よ乙其頃傳て一笑話とありしと云べり

●問　新聞社が會議の筆記抔取るには如何にするや

●答　英佛の重もなる新聞社は議院開會の節は勿論皆な其社より速記法の筆者を四五名づゝ議院に差出し議院よも亦た別段に是等を坐せしむべき新聞記者の席を設けあるなり筆者は已れ記せる所幾枚か溜まれば早速此を持ちて本社に驅けつけ直ぐさま印刷よ付する其間に第二の筆者が又た其の記せる所を齎らす等眞に櫛の齒をひく有樣なり左れば是等の筆者は其受持時間一人前十五分の交代なりと聞けり各新聞共に斯く筆記を取るが上に又た重もなる新聞社は議院ゐて電信を通じ居れり故よ議院ゐてい今ま某氏が斯く述べたりとの事は一分間毎に手に取る如く知るゝなり余が佛國のレピュブリック、フランセー新聞社を訪ひし時只今議院より電報通じ居れりとて其有樣を觀せられたる事あり實に便利至極と云ふべし日本抔も議院開會の後は我社にも特許を得て是れ位の便利乙計りたきものと思ふなり又た新聞社のみならぞ重もなる政黨倶樂部其他の結社抔には皆な議院より電信通じ居れりと云へり然れば大抵の倶樂部にてさへ今ま議院には某氏が何事を饒舌り居れりとか何事の議決は何十の多數なりしとか少數なりしとゝ皆な手に取る如く知れ得るの仕組なり實に便利至極と云ふべし是は電信のみならぞ電話機の用も追々廣まる有樣なれば議院の話しも行く〳〵は諸方よて手に取る如く親しく聽くことを得る世の中となるべし十九世紀に生れし人は是れ豈に便利至極に非ぞや

◎問　日本の子守女が子供を背負ひ居るとて西洋人は之を笑へりと云ふ話しを聞きし事ありしが彼地の子守女は子供を背負うと一切之れなきや

◎答　如何にも子供を背負ひたる者は一度も英佛等の諸國にて見掛けたるとなし但た前に抱き居るは段々多く見掛けたり先づ通例は中等以下の女房或は子守が子供を伴ひ行くには車を用ふるとにて恰も當歳より四五歳迄の子供を乗すべき小さく手輕く工合好く出來たる一種の四輪付の車あり子供をば此車に乗せて女房或は子守が之を後ろより推し行くなり近所の公園に赴た或は買物抔に赴くには皆な此の子供車を用ひざる者なし余等も日本にて往々之を見掛け居たれ共是は實用より寧ろ翫物なるべしと左して意をも留めざりしが則ち大なる誤りにて皆な子供を運行くに實用する者なり

中等以上の家にては早く乳母を雇ひ又は牛乳抔にて育てる故にや日本の如く子供を抱へながら身元好き婦人が所々に出行くをば飾り見掛けざる方なりき但し伊太利抔にては乳母が子供を懷き主人と共に外出し居る者少なからず嘗て一寸記したる如く其乳母の一種異躰にて美事なるには目を驚かせり例せば中世の衣服かとも覺しきブタ〳〵としたる筒袖、袴、にて其色も冴えたる淺黄抔にて又所々に金モールの總抔をフサ〳〵と垂れ其の戴きたる帽子も亦た一種異体なるに同じく金モールの總をつけたる抔中々に四邊を拂ふ計りなり斯る風は倫敦抔にては餘り見掛けざるとにて定めて中世の衣服と知られたり是れ蓋し小兒を飾る林抔にても伊太利邪にはあらねども乳母と覺しき者は一種の支度を爲し居るを見掛けたることもあり去りながら多く盛飾せる乳母を見掛けたる事伊太利の如きはあらざりしと覺ゆ

◎問　引續きてソート、シーキ、シテーの有樣を承はりたし

◎答　前記せる如くモルモン宗は創立以來僅かに五十年許になる間なれども之に歸依する者は中々に少なからぬ有樣なれば他の耶蘇教徒の者共は頗る心配なる趣にて種々の手を盡し或は間者を縱ちてモルモン宗徒とならしめ或は尋常の旅客となりて彼都府に滯留し色々秘密なる内事をも聞き出し其の奇談も甚た多きなり今は其の秘密の一二を掲げんに彼の世界の始めに當りエホバの神が創めてアダムなる男子一人を作り又た其の肋骨を扱き取りてイーブなる女子一人を作り此の男女二人を花園に住はせ置しにアダム。イーブ。は惡魔に惑はされエホバの神が豫ねて食ふべからずと命じ置たる木實を食ひたるより神は大に怒り始めて人類に死と云へる罰を與へ是よりして人類は繁殖し乍らも死と云へる事必ず之れに伴

ふ樣なりしと云へる經典の本文よ從ひモルモン宗に入る者には最初此の始末をば見振芝居にて示す儀式ありたれば始めてモルモン宗に入りたしと申し出る信者をば先づホノ暗らき風呂場に導き異樣なる衣服着けたる婦人出て來りて身体を洗ふ是れ現世の塵潤を洗ふて尊とき神の徒となるの印なり此の洗禮畢りたる處にて又々之れをホノ暗き一室に導くなり信者は此處に待ち居る中忽ち隣室にて何か物語る聲漏れ聞ゆるなり是れ神が天上にて衆々下界よ人類を作らんとの相談をなす處なり此の相談終りたる處よて神と下界の花園よ樂とりたる前面の庭に下り來り此處に色々の男女出て、前記のアダム。イーブ。を作る事より惡魔に誘なはる、迄の始末を演そ殊よ彼の両人が神の誡を破て食ふと云へる木實抔は樹身はじめ一切其處の壁に畫がきあるなりと云ふ甚だ子供らちき事よ似たれども其歸依の者共より觀れば轉た信心を增さしむる者と見ゆ此事は近來米國の耶蘇教徒が間者となりて入り込み自身現よ目擊して探り出したる秘密なり

モルモン宗の本山は今日にては年々一百万圓の収入ある由にて此の一百万圓は多く耶教師を派出し其宗旨を弘むる事に用ゆると云へり余等ゑバナクルと稱する彼宗の寺院を見物せるに全体の結構は先づ一寸奮の明治會堂の如きものにて只た廣き會堂の左右及び後邊にかけ凹字狀の二階を着けたるのみの極て質素なる普請なりし壁上には彼の祖師スミス神の告げにより銅牌を堀り出す處を畫きありしが是も餘り感服すべき程の手際には非りし會堂の前面よは例の如く説法壇ありて其壇上の摸樣抔は別に目立ちたる程變りし處もあらざりし此の會堂は都合二万人を坐せしむる者の由にて殊に意を用ひたるは堂内音聲返響の趣向なり番人が余等を導ひて會堂の後邊の壁際に立たし先己れは其反對の端なる前面説法壇の上よ立ち小さきペン先をポトリと机の上に落したるに其響き明らかに二三十間此方よ立ちたる余等の耳に聞えたり

右ゑバナクルの外觀の異樣なるは屋根の色尋常の瓦などと違ひ一寸日本の草葺の如く見へし事あり又た此近邊に新たゐ大なる寺院を建立しかけ尚は普請中なるを見しが前のゑバナクルが堂内の柱は悉く木の地を色どり大埋石、蠟石、樣になしたる抔のゴマカシとは大に違ひ皆な立派なる石材にて組立て居りたり

●問　一夫多妻の有樣又はモルモン宗と他宗との關係等よ付き何か目立ちたる事ソート、レーキ、シテーよ之れありや

●答　一夫多妻の正道たると否とは扱置き一夫よ事かふる多くの細君が皆な幸福ありや否

との一事は頗る話の多き所あり兩三年前の事と覺ゆ彼の都府よてモルモン宗徒の婦人二千人以上も大集會を開きたる事あり集會せる婦人は何れも既よ人の妻とありたる者よて其中よは當ソート、レーキ、ーシテの闘け始めより此よ住ね居ると云へる七十歳以上の老嬢もあり各〻其の一夫一婦たりし時と又た後ち一夫多妻とありし時との事を比較し己れの身上の經驗よ就て演說せるよ皆あ一夫多妻となりし後の樂み多き事を言はざるはあかりしなり然れども米國の一体の婦人仲間よては斯る邪敎蔓びこりては倫理地を拂ふのミならず女性たる者の幸福を滅絶するよも至るべしとて特に一夫多妻排擊組合と云へるを結びて頻りよ之と防禦するよ盡力なし居る仲間もあり此の組合より出だしたる探訪者抔がモルモン宗の婦人よ就て親しく聽き得たる所なりとて報告せるを觀れば現よ多妻の仲間よあり居る婦人にて其實は誠よ面白からぬ味氣あき日を過ごし居るとの中情眞心を打明けたるも往々少からぬ趣あり然れども斯る不平を竊かよ訴へたりと云へる婦人は大抵最初に婚禮せし元妻又は第二番目に嫁し來りしもの等其多くを占め第三以下の年少細君あは割合よ寡あかりを樣あり

兎よ角よ幾分か此方の心持よて迎ゆる所あるかを相知れねど彼の都府よては出遇ふ婦人も

相見る婦人も何とあく勢あく影の薄き樣想はれたり殊よ歐洲諸國又は米國の自餘の諸都府とは相違し婦人の市中を往來し居る者の極めて少かりし一事は亦た實に目立ちて覺へたり

ソート、レーキ、シテーハ固よりモルモン宗徒の闘きたる地なれば其筈にもあるべきあれど全都府悉くモルモン宗徒あらざるはなき程の勢にて府廳の役人首じめ一切皆あモルモン宗徒あれば偶〻に他宗の者あるときと之れを異端外道と視做し万事よ付け擯斥さるゝ有樣あり余等が市中の或る書林に立寄りたるときも彼の書林の主人は已れモルモン宗徒よあらざるが故平生殘念ある事のみ多しと物語れり又た笑しかりしは余等の同行中少し用事ありて當都府の殖民事務取扱所に立寄るべき積にて旅舍を出る時より其旨を馬車の馭者に申付け置きたに市中の見物都べて畢りて旅舍に返着く迄彼の馭者は到頭彼の取扱所に立寄らぎ之を責むれば只だ何か口中にてグズ〳〵囁囁くのみにて更よ動かぎ餘りに面倒あれば遂にソコより下りたがアトよて者へ合すれば彼の取扱所は耶蘇敎徒ある米國人の出張所あればモルモン宗徒たる彼の馭者は之れを仇とし惡くまて故さらに立寄らざりし者あり

モルモン宗徒の内規と至極善く行屆き五人組に伍長を置き伍長を都ぶるよ百人長あり百人長を都ぶるに万人の頭ありと云へる如き仕組にて終りハ之を本山の一ト手にて總管する抔

の趣は都合好く出來居る由あり他宗の者共の評判にては其の宗徒の經書を追〻に米國の國會議員中に其の宗徒のもの幾名を出だし幾分か議場の勢力を占めたる所にて彼のユータ州(ソート、レーキ、シテー即ちはユータ州の首府なり)をば行く〻獨立の一邦とおし此にモルモン宗の本據を定めて是より次第に米國を蠶食して已れの宗旨に引き入れ米國を一統し了りたる處にて終に全世界をして悉くモルモン宗國と變せしむべンとの企ありと云へり彼の宗徒の心持より云はゞ其位の處までは勿論意氣込おくしてはあらぬ筈にもあらんが先づ實際に其の第一歩すら覺束あげある有樣なり

ーソト、レーキ、シテーにはモルモン宗徒の專有の機關新聞もあるあり

●問　彼地にて歳暮年始の儀式は如何

●答　歳暮年始の儀式は佛國と英國とは稍や異る所ある樣に覺ゆ佛國にては專ら年始を祝する樣あるが英國にては專らクリスマスを祝するとありクリスマスとは耶蘇基督の誕生日にて十二月廿五日の曉あり此の日をクリスマスと稱へ是れより一月初めに掛けては先づ英國にて重もある商店抔い大休とも云ふべき有樣あり則ちクリスマスは歳暮年始を兼ねたる一年中の大ある切れ目と云ふも可あるべし

親戚朋友知人に對し一年中の歳暮年始の折目切目の祝日なればクリスマスの騒ぎと云へば最早や十二月の初旬よりソロ〻と騒ぎ掛ける譯よて店〻の前よは「クリスマス進物御用」抔と書きつけ種〻樣々の物を列べて賣捌くあり又此の頃にもれば一般の人氣も何とおくソハ〻として恰も日本の正月前の如き心地せり最も得意あるは子供にて祖父祖母或は叔父叔母兩親兄弟抔より其貧富相應の玩物手道具の類を澤山に貰ひ受るを心待ちに待受け樂み暮をあり又互ひに意を屬し居る若き男女の如きは此の機を幸ひに然るべき贈物を爲して情好を通ぜるもあるべし又日頃の無沙汰を此時の進物よて詫る朋友を多かるべく萬事萬端一切の折り目切れ目は十二月二十五日のクリスマスより大切なるものはおしと考へ居る風習あり又通例の知人よて品物を贈答する程に至らぬ者も互ひにクリスマス、カード、と稱へる一種の名札樣のものを贈答するあり此の札は大小精粗種々樣々あれども先づ通例は四寸内外のものよて恰も西洋カルタの如く細長き格好おるが通例あり而して其表面には或は草花或は人物抔種々樣々の面白き洒落たる繪に彩色を加へて印刷しあり又其上には「汝の幸福を希ふ」とか或は「目出度今年」とか「嬉しき一年」とか種々の文句を記載しあり此のカルタの背面に先方の名を書し又此方の名を書し互ひに贈答して懇意を表するなり然れば十二月

廿五日前後は郵便脚夫は大困りゐて平常の書簡ゝ比すれば幾十倍とも云ふべき狀袋を運送そるなり左れば配達するたびに下女抔に向て其骨折を述べ立るも少あからぬ又年中出入りの郵便配達人其他の者には此のクリスマスの時に少々の心付を與ふる家も甚だ多し是等の有樣は恰も日本の歳暮年始と同樣なり

偖てクリスマスの前晩は子供の身に取ては此の上もなき樂みの夜にて何時の頃よりの言ひ習はせゐや靴足袋を其の窓間の扉ゝ釣り下げ置く時は天人降來りて種々樣々の玩物を授くるとか云へるとゝて此等を爲ゑ童男童女も少なからぬ就ては其家の父母兄弟祖父祖母抔は豫て用意し置きたる種々樣々の玩物をクリスマスの朝子供の未だ目を覺さゞる內ゝ其寢床の近所ゝ堆く積み置き子供は朝、目を開けば已れの周圍ゝ人形其他種々樣々の物あるを見て先づ第一ゝ悅び居るなり斯の如き始末にてクリスマスハ先づ家內の祝ひ日ゝて他人雜らぬその樂ゝを爲す日と視做すも可なるべし

クリスマスの前日より丈恰も日本の松飾を爲すが如く綠葉を以て種々の飾付けを爲すあり英國ゝては右の飾りに用ゆる木ゝ二種ありて其一は日本の柊の類ゝて赤き實の結り居る樣ゝ覺へたり又他の一は日本にもあれども稀に見掛る所のものゝて先づ楓の如きものあり此

の二種とも先づ常盤木の類にて其葉は十二月頃青ゝとし赤或は白の愛らしき實を其間ゝ着け居るとあれば歳暮年始の飾りとしては恰も申分なきものなり左れば此の二種の木ハ右祝日の十日前より處ゝ方ゝにて日本の門松を售る如く售り行くなり因て之を買入て先づ通例天井より下がり居る瓦斯ランプゝ飾り付け或は室內ゝ飾りある鏡の綠抔ゝ飾り付るもあり又其邊の額抔の綠ゝ飾り付るもあり斯く此の綠葉の室內ゝ飾り付けあるを見れば何となく人氣もサエ〳〵となる心地するなり異鄉の者に在てもそらも斯の如くあれば子供の時より是れに慣れ居る彼地の人ゝゝは定めて我々が正月のお飾りを視る如き心地するとあるべし

●問　其他のクリスマスの景況は如何

●答　扨て十二月廿五日ハクリスマスの當日なれば其拂曉より寺々ゝてハ日曜安息日の如く類にカラン〳〵と鐘を鳴すと共に鈴鐺の如き老人を首め其他家內の然るべき者丈先づ第一寺參りを爲すなり又寺ゝの方に在りては固より祖師降誕の日の事あれは無二の盛んなる儀式日ゝてソレ〳〵飾りを爲し祭禮を執行ふ參詣人は寺の儀式濟みてソレより各ゝ定まれる親戚の集會所ゝ赴くなり此日は親戚朋友團欒して樂みを爲すとあれば豫てより何れの家ゝ打寄るべしとか離れの所を此の會ゝ用ふべしとか父子兄弟祖父祖母抔の間にて定めゐる

とあれば其處に一家族落ち合ふあり是れ彼地にて父子兄弟別居をすると持前の風俗あれば一家族落ち合ふて歡を盡すには祖父の家とか親の家とか子の家とか兄弟の家とかに皆な落ち合はねばならぬ都合あるが故あり

饗飯を以て宴會の時と爲すもあり又晩飯を以て其時と爲すもあり炙りたる鵝鳥及びクリスマス、プッチングと稱ふる盛物菓子の加きは恰も日本の正月の雜煮同樣是非其此日に添はねばならぬ獻立あり鵝鳥の間に合はざる所は牛肉にて其代りとなすも少なからぬ斯くして上等は上等、下等は下等、夫れ〳〵に打寄りて歡を盡し此日を樂み暮すとなり

左れば當日は都て店々は戸を閉め倫敦市中の外觀は恰も日曜日の淋しさに倚は一層甚しきを加へたるものにて家内の樂をなさ旅客抔の身には隨分困却する日柄なり偖てクリスマスの當日を過れば其翌日より諸興行觀世物芝居と一年中の當て込み時にて何れの場所〳〵も塞がり切る程の始末なり平常閑なる手代番頭職人其他仕事ある者共へ此の二三日は手足を伸ばして氣樂に遊び得る時なれば中以下の遊び場は別して賑はひ榮もるなり

問　英國抔にて通例品物を贈答するとは日本と同樣なる趣なるや如何

答　品物を贈るとは隨分日本と同樣なる場合もある樣に見掛けたれども日本の如く頻繁

にはあらざるが加し先づ英國抔にて品物を贈るは第一婚禮の儀式の時なり此の時には或る座右に置くべき文房具又は花嫁の襟飾腕環其他茶道具の類を親戚朋友より祝ひとして贈り進すと實に盛んなる風俗なり少し身元ある人なれば其親戚朋友も亦身元あるが故に其の贈り物のみにても中人以下の身代位の金高に積るとなりと云へり右婚禮の外には別に品物をやりとりすべき定まれる節なし但た田舍に旅行し或は遠國に旅行する時は其地方〳〵の綺麗なる產物を歸遺して贈る者は甚だ多に似たり又其他地方より倫敦抔に用事ありて出京せる人々が一夜にても二夜にても其相知れる人の家に引止られて逗留抔する節は其宿料の返禮と云ふる意味にてもあるべきか一寸したる小道具或は額面抔を其家の主人、主婦、娘抔へソレ〳〵贈るも少からず又タマ〳〵に面會する知人には一寸したる手綺麗なる其地方の產物抔を贈るともあり

英國抔にては銘々の誕生日をば其身に取りて非常なる一年の祝ひ日と爲すとにて男女に限らず己れの誕生日には其身寄りの者を會し茶話會にても開くか或は少し身元好き所へ小宴にても開くかする者少なからず又誕生日には父母たる者は其子に一寸としたる品物にても必らずこれを贈り又子たる者は其父母に對して心計りの贈物をも是非爲す抔誠に床しく感

しき風俗あり又同居せる父子兄弟の間にても誕生日ニはソレ〳〵贈物を爲す者通例あり就中子供の如きは誕生日とさへ云へば其父母兄弟より種々の玩物類を必らず貰ふ可きの日ありと心得、心待ちに樂み居る有樣あり

又たポアスデー、ブック、(生日錄と譯す可き歟)とて筆硯文房具抔を賣る店々には三寸四方計りの手綺麗に拵へたる金緣の小冊子を賣り居れり是は銘々所持して己れの父母兄弟朋友知人の苟くにも誕生日の贈答を爲すべき人々の誕生日を忘れぬ樣記るし置くべき爲の手扣にて一年中の月日をば綺麗に印刷しあり英國の子女にして此の生日錄を携へ居らざる者あし親戚知人にあるながら其誕生日に音信贈答を爲さゝる時は甚だしき不愛想の人の如く思いるゝことあり

右の誕生日を祝する風は至極宜しきものにて斯る折目切目あればこそ親戚朋友も互ひに其緣を厚くする機會を得ることなり如何に懷かしく思へばとて我心を表するの折目切目一年中に之れなき時い自然其情の薄らぐことも有り勝ちのものなれべあり

●問　伊太利にて鬪獸場及び古共和政治の時の宮殿の遺物等の外に尙ほ古蹟の面白きものこれあるや

●答　先づ重なるい嘗て述たる如きものながら尙ほ其他にも之れあり今其一二を記さんに最も奇異なるは地底の住居是れなり是は羅馬帝政の時耶蘇教が嚴禁を蒙りしに當り其信徒が酷刑を逃れて茲に隱れ栖みたる跡なりとも云ひ又耶蘇教徒が唯た自宗の儀式を以て死者を葬むるが爲めに茲に來りて其の葬式を執行し居りし迹なりとも云へり孰れが信なるやは知らざれども兎角奇異なる古蹟なり右は今の羅馬府を離れて二十町計りの近郊に在り先づ地面より打見たる處にてい勿論何事もなく唯だ小さなる入口あるのみにて此れより穴道を地中に遣入り往く時は石炭坑の如く無數の部屋〳〵の相連りたる廣さい十町乃至十五町四方もあるへきとの事なり穴の入口には案內者ありて見物人は之れと共に各々手に日本にて提燭と稱ふる如き細く長き一種の蠟燭に火を點じ之を携へて案內者と伴に地底に降るなり地底の道は幅は三尺乃至一尺計りの所多く僅か人の往來の出來る迄にて又其部屋〳〵の高さも僅かに六七尺に過ぎざると覺へたり而して其部屋〳〵ゞ唯た土を切拔きたる迄にて實に日本の穴居の如き有樣なり又處々に棚の如きものあり是れ則ち死骸を葬むりたる所の由なり又たアナヲコナヲに不器用なる畫風にて魚の形を畫きありて何なる譯のものにや案內者の詞には古代に在りては耶蘇教徒は魚を以て其符牒と爲せし者なりとの事

ありしが果して然るや否やを知らず扨て我らは一階より二階へ梯子の如く刻みたる所を降り又は上へ登り頻りに其邊を彷徨たりしが何分暗黒なる穴の中にて空氣の通ひも十分ならねば甚だ不快なる心地せり

若し彼の古へに有りしと云ふ迷宮も同樣にて若し此の地中にて案内者を失ひたる時は十五町四方の廣さの三階に成り居る地底に迷ひ迷ふて出るの道を失ひ餓死するの外はなかるべしと云ふ既に先年一人の旅客が道を失して此中に入りし儘出で來らざりしと云へり又た案内を商賣と爲し居る其の肝腎の案内者さへも未だ十分には其路を窮め居らざる由にて通例旅客を案内するには唯だ一通りの定まれる場所〳〵を觀せて然る後に地上に現われ出ることあり

嘗て佛人が百五十年以前に著はせし小說を讀みしに其中に西班牙の南部の事を記し耶蘇敎徒が回敎徒に罰せらるゝを恐れて人知れず穴居したる官を過べたりしが其折は唯た小說のヅラ事とのみ思ふ居たりしに今は此羅馬の古蹟を見るに及びて始て其全く架空の言ならざるを覺れり

又右の穴居の近處に耶蘇敎の未だ流布せざる以前の古代の墓處あり此の時代にハ皆な火葬を行ひたる趣にて四五寸許りなる小さなる壺に遺骨を納め之を夥しく一室に積み累さねあり）其棚の壁に彼の壺を一個宛納むる樣にあせし滿鉢形の窪み無數にあり左れば家の四面一体に彼の壺を列ぶべあるなり又た其壺の前に燈火を供へたるものと見へ日本にてカンテラと稱もる形の燈火皿の往々存し居るものあり

●問　彼地にて一寸買物抔なる時の工合は如何

●答　日本の店にて買物を爲し覩るに彼地と著るしく相違あるは懸直を直切るの面倒是なり英佛抔にても隨分旅人と見て懸直を云ふ者之れあきはあらねども先づ通例は價を貳つにせもと云ふ有樣にて云ふ出し直より引ける抔と云ふとは幾んど罕れなり且つ店にの賣物の十の七八は正札付ならざるものなく一錢も引けるとなし只た非常に金高の買物を爲す時は先方も事宜に因りて幾分か引くとは少なからぬが日耳曼抔の一二の店には金高に因りて引けたるものありしと覺ゆ巴里の正札付のルーブルの如き店にても金高に因りて引けたる例もあり然れば一概に引けずとも申されざれども日本抔の店に比較する時は懸直もなく直切るにも及ばず甚だ便利に手堅く行屆きたる事なり然るに日本に歸り些の買物を爲し見る